

---

# 俺（殺人鬼）とバカとテストと召喚獣！

キングオブチキンの親友の子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺（殺人鬼）とバカとテストと召喚獣！

### 【Nコード】

N4815K

### 【作者名】

キングオブチキンの親友の子

### 【あらすじ】

さきほどトラックに轢かれました。

理由は猛ダッシュで赤信号わたったら猛スピードのトラックと接触。

そのまま死にました。

起きたら神様と名のる奴が出てきた。俺はいつたいどうなるんだ？

現在、といつかずっと前からですが更新を停止させていただいております。

## ぶろろーづぐ(前書き)

バカテスの二次創作ですが、原作が少しだけ崩壊すると思います。

そこんところはわかってください。

ぶるるーづく

「ここはどこだ？ いったいなんで俺はこんなところにいる？」

まったくわからない場所に俺は立っていた。

まずさつきまでの状態を確認してみようと思う。

俺こと天咲 あまなき 鋼侍 こうじは現在？ 高校1年生になったばかりの15歳だ。

高校は自宅からは少し遠く、自転車に乗って駅まで10分、電車で25分

徒歩10分ほどかかる距離にある。

登校時間は8時40分まで、入学式が終わってまだ一日目の朝。

俺は8時に起きてしまった。

当然、朝飯など喰わず、制服を引っ張ってきて、そのままチャリでGO！

となったわけだ。全力でチャリを走らせた結果、駅まで三分で着き、出発しそうになっていた電車に無理やり飛び込む。

いつもは三十五分かかるところを二十五分で駅まで着き、そこから猛ダッシュ！

疲労が少し溜まっていたがそこは気にせず突き進んだ。

しかし、学校を目前にして信号が赤になった。

それを俺は気にせず突き進んだところ猛スピードで走っていたトラツクに轢かれた。

はい回想しゅーりよー！

「まあまちがもなく俺は死んだんだな（笑）」

「そうじゃよ。」

突然、後ろから声が聞こえた。

「いやゝあれは傑作だったわい。がんばってきたのに結局はトラツクに轢かれて

お陀仏か。ふおゝふおつふおつふおふお。」

爺さんが俺を指差して笑い転げている。こいつ殺してやろうか？

「って声にでとるわい。やっやめてくれ蹴らないでくれ痛いじゃろう

ってイタイイタイツ、ギツギブじゃギブじゃ顔がつぶれるううう

うううう！！！」

俺は目の前の爺さんを気が済むまで顔を蹴りつづけた。けっいいい気味だ。

「次ふざけたことしたらドタマかち割るぞこの下種野郎が。」

俺が目の前の爺さんにそういつと爺さんはしょんぼりした顔になった。

さすがに蹴りすぎたか？

「すつすまんのう。最近おもしろいことがなくてのう。」

神様という仕事はたいへんじゃからな。」

「そうかあんた神様だったのか。そうかそうか……」

俺は爺さんの肩に手をポンっとおいた。

「いい病院紹介してやるよ。そこの先生やさしいからさ、」

あんたみたいな中二病発言するやつ言葉もちゃんと聞きいれてくれるさ。」

俺は憐れみと生温かい目を爺さんに向けていった。

「大丈夫じゃよワシの頭は正常じゃ。それにお前さん死んでおるじやろつ？」

病院など連れて行けぬわ。」

「そういえばそうだったな。んまあ仮にあんたが神だったとしよう。」

「この俺になんのようだ？」

「それはお前さんがワシに久しぶりにおもしろいもんを見せてくれたお礼を

しにきたんじや。なんでもいいからいうてみい。」

「うん……なあ転生とかってできるのか？」

俺は神様？に疑問をぶつける。

「お前さんが死んだ世界などは行けぬが別の世界なら可能じゃぞ。

やってみるか？」

俺は大きくうなずく。だって転生だぜ！一回はやってみたいじゃないか。

「ああ頼む。行く世界は……うん決めた。（バカとテストと召喚獣）の世界だ。」

俺が一番気に入っているマンガだった。おもしろそうだし、行ってみることを

ずっと夢見てきた世界だったからな

「ワシはそんなもんわからんから、少しお前さんの記憶を確認させてもらっぞ。

構わんな？」



「ああ構わないぜ。さっそくはじめてくれ」

神様？（爺さん）の手が俺の頭に乗っかる。

「うゝむ・・・むむむむむ！！おおお！ふむふむ・・・・・・・・・・」  
爺さんがうなり始めて三分たった。

「ふむ、だいたいわかったぞい。なかなかおもしろそうなお世界ではないかのう？」

あとほかに三つだけお前さんの願いを叶えてやるうながいい？」

やはりもちろんこうだろう！！！

「まず一つ目、俺の容姿を良くしろ！！！！！！！！！！！」

二つ目、俺の頭を良くしろおおおおおおおお！！！！！！

最後三つめええ！運動神経を良くしろ！！！！

以上だ！！！

「ふゝむこんな感じかのう？まず第一は後でのお楽しみというところで、

一二つ目には瞬間記憶能力に自身の記憶操作でどうかの？」

三つ目は、まあオリンピック金メダリストの二割増しでどうじや

「二割増しって・・・まあいいか、それでも十分超人だ。いいぜこのまま送ってくれ！」

「じゃあ行つて来い！幸せに暮らすんじゃぞおおおおおおお。お。お。」

俺の足元に真っ黒な穴があいた。つて穴！？

「つてどこのテンプレだよおおおおおおおおおおお。おおおおおー！」

俺はその穴に落ちて行った・・・。

ぶらぶらーじゅく(後書き)

まあとりあえずがんばってみます。

ぶろろーづぐ2 (前書き)

書く必要なんてないもん！

だって誰も見てないんだから。

(T—T)

## ぶるるーづぐ2

(どうしろってんだよこんなの)「あうゝあぶあづぶづ」

現在俺こと天咲あまなき 鋼侍こうじは絶賛赤ちゃんタイムなわけだ。

俺にはまた別の名前が付くと思っていたらところがどっこいだ。

俺の名前は何一つ変わっておらず、さらには字も全く一緒、どうな  
ってんだ？

しかし、親は違う人だった。

まあ当然か。同じ地球でも全然違うしな。ここはあくまでバカテス  
の世界。

同じ人間がいるわけがないし、ましては同じ親から生まれるはずも  
なかった。

まあ今日の前にいる俺の親たちは完全に親バカだ。

俺が嘘泣きをしたら、あわてだして、母親のほうは直接母乳を飲ま  
せようとしてくる。

父親のほうは、大量のおむつを持ってきて、俺を無理やりベビーベ  
ットで寝かしつけようとしてきた。

俺が笑った時は、携帯やらデジカメやらなんやらで俺を撮りまくっ  
てその写真をみて、

両親はずっとにやにやしていた。

まあこんなことが三年も続いて、現在は三歳なわけで、そろそろハイもやめて歩くようになり、

ちよつとだけしゃべれるようになった。

まあ呂律がまわらなくて、きちんとした発音はできていなかったが、そんな俺を見て、両親は始めは歓喜に埋もれていたが、そのあと沈んだようになった。

「・・・もう・・・もうそんな時期なのね・・・。どうしてなの？どうしてこの子があんなことを

しなくちゃならないの？ねえ神様教えてよ！」

母さんはヒステリックな声をだした。正直言っている意味がわからなかった。

父さんのほつも声を殺しながら泣き「どうしてなんだ・・・？？」と Saying していた。

俺には正直両親の行っている意味がわからなかった。いくら0歳のころから言葉が理解できても

俺の前では二人が俺に対して泣くようなことは一切なかった。

「ねえ逃げ出しましょうよこの家から・・・この子をつれて逃げれば

いいのよ……。

「そうよ！逃げましょうよ。」

母さんはまだ暴走したまんまだった。

「……………それは無理だよ。この家には爺さんたちの監視カメラがある。」

もうこちらに向かってきているだろう……。逆らえば私たちが殺されてしまう。

「この子が強く生きて帰ってくることを祈ろう。」

父さんはそんなことを言い始めた。どういふことだ？父さんや母さんが殺される？

俺が強く生きることを祈る？なにがどうなっているんだ？

俺は完全に混乱していた。

「ねえお父しゃま？なんのお話をしてい」「ドンドンドンドン……！」「っ！」「

ドアを叩くような音が家全体に広がった。

「ドンドンドンドンゴン……バキン……カランカラン……」

鍵の壊れる音がした。正直俺は恐怖のあまり動けないでいた。

「じゃまをするぞ。」

声のしたほうを見ると、ムキムキマッチョな爺さんがそこに君臨していた。

「もうお前さんたちの子は十分に成長したな？いまからこの子を連れていくが

いいな？」

マッチョな爺さんは俺の両親に向かっていった。

「これはおまえが悪いんだぞ雄大。おまえがわしらの業を継がんからこんなことになったんじゃ。」

自分のしたことに後悔するんじゃない。大丈夫じゃよ、あと十年もしたらこっちに帰してやるから

それは安心せい。ただし、この子が生きていればのはなしじゃがのう。」

俺はマッチョな爺さんに抱きかかえられてしまった。正直暑苦しいつたらありゃしない。

「それじゃあ十年後までまたなぐぐがっはっは」

マッチョな爺さんに抱きかかえられて俺は天咲家から去って行った。  
.....



十年後・・・・・・・・・・・・・・・・

あれから十年たって、俺は爺さんから解放された。

俺が去る時爺さんは「もうわしを遙かに凌駕するほどになってしまったな。おっそろしいやつめ。」

そう言っつて笑顔で送ってくれた。

爺さんのとこで十年間学んできたのは簡単に言えば暗殺術だ。

本物のスナイパーライフルを使って実際にA級犯罪者の頭を狙撃したり、

スパイとして麻薬の売買地に乗り込み、主犯を抹殺して、麻薬を警察所に届けたり、

これまたスパイとして、あるホテルの料理長になって、顔の知られていない犯罪者の料理に毒を盛り

毒殺したりといろいろなことをやってきた。

もちろん、そこまで至るにはあり得ないぐらいの地道な努力をして生み出された結果だった。

そこで俺に付いたあだ名が「裏会の聖騎士」となった。

これを聞いたとき俺は恥ずかしくて死にそうになったが、これは正義の名の下からだけではなく、

見た目からもとられたようだった。

白銀の髪、色白で柔和な顔、目は少し蒼みがかかっていて、鼻は高く、唇も整っている。着物を着たり

女子の制服を着ればどこからどう見ても女の子にしか見えないだろう。

肩はなで肩、胸は鳩胸きみ、腰にはなぜかくびれがあり、足はすわりと長い。

身長は160センチと男子にはちょっと低め。しかし、まだ発達途上なのでまだ伸びるだろうとの噂。

このような見た目からでのスペックの高さも評価されている。

勉強も怠ってはいなかった。

もともと神からもらっていたチート気味の能力があったので、勉強で後れをとることはなかった。

そんな彼は文月学園に入学することになっていた。

「はあ〜やっど・・・やっど明久たちに会えるのか・・・長かつたな〜」

というより、苦しかったといったほうがいいだろう。実際疲れてはベッドで倒れ、疲れてはベッドで倒れ

というのを繰り返していたため、あまり長くは感じられなかった。

「早く会いてえな。そのためにこの世界にきたんだからな。」

「さあていきますか！文月学園に！」

俺は自分の生まれた街に戻って行った。

## ぶるるーづぐゑ (後書き)

つぎは結構飛ぶことになるかな。

この会はかなり無理やり感があったよつな気がする。

## 第一問！（前書き）

ヤッピ〜！〜！さん感想ありがとうございます。

質問に関しては今回の話で決まりますので。

このような糞小説を読んでくださってありがとうございます。

いちおうがんばってみますので。

## 第一問！

文月学園に入るにしても俺はまだ十三歳。

まず近くの中学校から入らなくてはならなかった。

まず、過去の身体のとくにウィキペディアで明久や雄二たちの卒業した中学校を調べたことがあり、

明久は月下中学、雄二は、神無月中学に所属していた。

年齢は………たぶん一緒だろう……一緒じゃなかったら……泣くしかないな。

他の秀吉や土屋康太こと寡黙<sup>ムツリーニ</sup>なる性識者の所属していた

中学校はわからなかったため検索からは、はずれる。

姫路はたぶん明久と一緒に、島田は帰国子女だから論外………ってわけでもないな。

まあでも無難に明久たちと一緒にのほうがいいのか？………

ということだ明久たちの月下中学に行くでしょう。

久しぶりに帰る家のことは考えず、ずっとそんなことを考えていた。

それから4年がたった。

結果として俺は月下中学に行き、明久や姫路と出会い、基本的に明久とバカをやって過ごした。

姫路とは基本的にはあまり話さなかったが、明久がいなかったりするときは、

ちよこちよこ話をしていた。

そして、みんなで文月学園に行くことになった。

余談だが、俺の親はすでにこの付近には住んでおらず、外国にすることがわかった。

仕送りは、月100万ちよつと・・・正直多すぎだと思う。

一度俺は両親に電話をして帰ってきたことを連絡すると、両親は泣いて喜んでいた。

結果的に両親は年に一度こちらに様子見にくるらしい。

俺が連れていかれのがショックでなかなか立ち直れないでいたらしいが、

また新たな子を授かることで、順調に回復していったらしい。

子供の名前は朱美女あけみの子らしい。

まあ余談はこれぐらいにして、本題に戻ろうと思う。

まあそんなこんなで、文月学園の一年間を過ごし、今まさに振り分け試験の当日になったわけだ。

「ねえ雄二、鋼侍。テストってどんなの出ると思う？」

今左隣から話してきたのが吉井よしい明久あきひさこの4年で最高の親友になったやつだ。

ついでにこの世界での主人公でもある、正真正銘のバカだ。

「そんなの受けてみなけりゃわからんだろう。それにお前は言っただけ無駄だからな。」

俺の右隣の雄二が答える。文月学園で出逢い、親友になったやつつの一人でもある。

過去には神童と呼ばれていた時期もあったが、それも今は昔、バカの一人である。

「俺も雄二に同感だ。教えるだけ時間の無駄だからな。」

俺もきちんと答えてやる。無視されるよりはましだろうからな。

「ムキ〜！いいもん！僕だつてできるところを見せてやるよ！」

明久は俺と雄二に向かって指を向け宣言した。



その言葉に俺と雄二は顔を見合わせにやりと笑う。

(先に問題出せ雄二。一応答えられそうな問題を出して、そのあと俺が追い打ちをかける)

(了解だ鋼侍。俺に任せておけ。中学生でも答えられる問題を出す。あとは任せたぞ。)

雄二とのアイコンタクトを終えると、雄二は明久に向かって簡単な問題を出す。

「よし明久 テスト前の小手調べだ!

(三権分立)は(司法)と(立法) もう一つは何で成り立つか?」  
さすがにこれは答えられるだろう。答えられなきゃ恥ずかしいぞこれ。

「ふ……………あまり僕を見くびらないでくれよ雄二、鋼侍……………」

……………二つまでは絞れる。」

「ほう」「俺と雄二は二つという言葉に疑問を感じた。

「(憲法)か(漢方)のどっちかだったはず……………」

顎に手を当てキュピーン!と効果音が鳴りそうなポーズで答えた。

俺と雄二は顔を見合わせどつしよつもないなといったふうに答える。

「「……………（行政）だ」「

「あ それじゃウチからも！」

後ろからある生徒の声が聞こえてきた。

声の主は島田だった。

「では基礎問題！（CH<sub>2</sub>COOH）とは何でしょう？」

これも簡単な問題だ。すぐに答えられる。

しかし、明久は眉をひそめ、だんだん深刻な顔になっていく。

結果的に島田から顔をぶいっとそむけた。

その反応に島田は「吉井？」と声をかける。

「……………英語は苦手なんだ」

「え……………？これ英語じゃなくて化学」

「じゃあ僕こつちだから！」

そういつて明久はその場から猛ダッシュで逃げ去った。

「ちよちよつと吉井！アンタ相当ヤバいんじゃない？」



腹に激痛が走る。完全に下痢の予兆だった。

（なっなぜだ？なぜこんなにも腹が痛い？そっそっだ今日の朝飯を振り返ってみよう・・・。）

いつもどりの食パン二枚にマーガリンとイチゴジャムをつけて、  
コーヒーを飲んできた。

（いっ・・・いっただいなにが悪かったというのだ・・・？）

・・・はっ・・・まっまさか！）

そう、今日鋼侍が食べてきた食パンに塗ったイチゴジャムの賞味期限が昨日だったのだ。

（捨てるのがもったいないとおもってやったことが裏目に出たのか？

なんとということだ！！これじゃあまともにテストが受けられないじゃないか！）

そんなことを考えているうちに腹の痛みがピークに達した。

「先生・・・トイレ行ってきて・・・いいですか？」

俺は我慢の限界がきてしまった。

俺が声をあげた瞬間俺の斜め後ろからガタン！と音が鳴り、そちら  
を見てみると

姫路が苦しそうにしていた。

「天咲、姫路……試験途中の退席は（無得点）扱いになるがそれでいいかね？」

俺と姫路は苦しそうに「は……」といった。

そこでいきなり明久が立ち上がり

「ちよちよつと先生、具合が悪くなって退席するだけでそれは酷いじゃないですか！」

明久はそんなことを言っていたが今はそれどころじゃない。

「それでいいですから……トイレに行かせてください。」

俺はそう言っただけで教室から出て行った……。

## 第一問！（後書き）

とりあえず本編の序章にのっけてみました。

やっぱり本を書くのって大変ですね。

改めて実感しました。

まあこんな小説ですけどよんでくださってありがとうございます。

とりあえずがんばってみようとおもいますので。

## 第二問

.....  
.....「第一問」.....  
.....

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだ』

のだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用

いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点.....マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例.....ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引

っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金(？すごく強い)』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

天咲鋼侍の答え

『問題点……マグネシウムが酸素と、くっ付いてピカァって光って周りが燃えちゃうからw。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

確かにあってはいますが、もうちょっとちゃんとした言葉はなかったんですか？



「天咲、吉井おまえたち遅刻だぞ。」

学校の玄関前でドスのきいた声に呼び止められる。声のした方を見ると、そこには浅黒い

肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

俺と明久は同時に逆のことを言った。

「「あ、鉄じ（西む）」                    じゃなくて、西村先生（鉄人先生）  
。おはようございます」「」

軽く頭を下げた挨拶をする。なにせ相手は生活指導の鬼、西村教諭だ。目をつけられ

るとロクな目に合わない。

ちなみに鉄人というのは生徒の間ででの西村先生の渾名で、あだなその由来は先生の趣味であ

るトライアスロンだ。真冬でも半そでであるあたりも理由の一つなんだが。

「おい、今吉井、（鉄人）って言いかけたな？まあそれはいいとして天咲！」

なぜいちいち言いなおした？そのままでもよかっただろう！」

俺は鉄人の十八番「アイアンクロー」を受けて宙に浮いていた。

「あい．．．すびばぜんじだ。ゆるじでください．．．．。」

俺の運動神経をもつてしても鉄人には敵わない。この人はいったいどうなっているんだ？

俺は地上に降ろされた。ああっ立つってすばらしいことなんだな。

「まあいいだろう。お前たちそれにしても普通に『おはようございます』じゃないだろうが」

俺は地上に降ろされた。ああっ立つってすばらしいことなんだな。

「あ、すいません。えーっと 今日も肌が黒いですね。」「

俺と明久は息ぴったりで同じことを言った。

どうして考えていることがこのバカと一緒になんだろう？

「．．．．．お前たちには遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

「そつちでしたか。すみm「当然ですよ!!」「せんってえええ!!」

「天咲．．．貴様というやつは．．．いいだろう貴様は特別に「観察処分者」にしてやる。」

「WHY?どうして?なぜ?俺はちょっとおちゃめをしただけなの  
にいいいいいい!!--!」

「ふん！これでお前も懲りるだろう。それにお前は紙を渡さなくても行くクラスは決まっているんだ。」

せいぜいFクラスでがんばるんだな。チャンスはいくらでもあるからな。」

「ふっ君もこれで僕と同類さ。僕と同じ苦しみを味わうがいい。」

はーっはっはっはっはっはあ」

明久が勝ち誇ったように高笑いをし始めた。結果が分かっているとはいえ、かなりムカつく。

「吉井、おまえも笑っている場合じゃないぞ」

「え………?」

明久は目が点になった。いままさに地獄に落ちようとしているな。後でおかえしに笑ってやろう。

「おまえもFクラスだ。それにおそらくFクラスの中で最もバカなのはおまえだ。」

姫路も天咲もどちらもトップクラスだからな。

それに、天咲はおそらく全校一位の頭の良さだろうしな。」

明久は渡された紙を見てまだ目が点になったままだった。

「おまえは真正正銘のバカだ。」

**第三問！！！（前書き）**

前回の話では少しばかり明久と鉄人が壊れてしまいました。

すいません。

第三問！！！！

. . . . .  
[第二問]  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと。』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏ん

だり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

天咲鋼侍の答え

『(1)釈迦も経の読み違い』

『(2)踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解ですね。私も(1)のほうは忘れていました。ありがとうございます。

.....

「なあ明久・・・ちょっと聞いていいか？」

「うん・・・たぶん僕と同じことを鋼侍も考えているだろうね」

「じゃあ声を合わせて自分の言いたいこと言ってみようかね明久君  
や。」

「そつだね。どうなるか試してみたいし・・・」

「「せくのー!!」」

「「どうしてこんなに差があるんだ~~~~!!!!」」

声は完全に重なり、他のクラスからも「うるせよ!」「やら「静かにして頂戴!」「やらの罵声が

俺たちにふりかかった。

なぜこんなことを叫んだのかは、先ほどAクラスとの設備を見てしまったからだ。

- - - - - 数  
分前 - - - - -  
- - - - -

「そついえばさ」

明久が俺に声をかけてきた。かなりやる気のない声だが、

さっきのことでショックを受けているんだろう。まあ仕方がない。

「なんだよ明久。トイレにでも行きたくなくなったのか?仕方がないな。先に行つといてやる」

「違つよ、そつじゃない!それに置いてく気まんまんじゃないか!」

「当然だろう?なんでお前なんかを待たなきゃならんの。」



「違うよ、そうじゃない」

そこで明久は真剣な顔をする。

「Fクラスを見る前に、Aクラスの設備を見に行ってみない？」

明久はそんなことを言い始めた。絶望するのがわかっててそんなことを言っているのだろうか？

「俺はパスだ。絶望するぐらいなら行かないほうがまだ」

「いいじゃないか。Aクラスを目標にしていけば、皆の士気があがるかもよ。」

それにどのぐらいなのか見てみたいし」

俺は考えていた。確かにこのバカにはあの状態を見せたほうがいると使えるかもしれないと。

「……………わかった行こうじゃないか。あとで絶望しても知らないぞ」

つとということであたちはAクラスに向かった。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「……これは……………」

「・・・・・・・・・・なんだろう、このばかデカイ教室は」

状況を確認してみよう。目の前には通常の五倍の広さの教室があり、担任の高橋先生が名前を告げると、プラズマディスプレイに名前が表示される。

机にはノートパソコンがあり個人エアコンがあり、冷蔵庫、リクライニングシートがあった。

ここは高級ホテルのロビーかよ！と突っ込みそうになったがあわてて押さえる。

先生によると、冷蔵庫の中身は学校側から支給され、他にも学校に必要な教科書や参考書

まで支給されるらしい。・・・・・・・・よくそんな金があるな・・・・・・・・

「なあ明久とつととFクラスに行かないか？このまま見てたら悲しくて死にそうだ」

「うんそうだね・・・・・・・・。来るんじゃないかなかつたかな」

そう言ってAクラスを後にした・・・・・・・・。

そしてさつきに戻る。

「まあ・・・・・・・・一応中を見てみないとね・・・・・・・・。入ろうか鋼侍」

「ああ・・・入ろうか明久」

「けどそのまえに！わざと明るく入ってみないか明久」俺は明久に提案してみた。

「うん・・・まあ暗いよりはいいよね」

「「せーの！！！！」」

俺と明久が同時に教室に入る。

「「すいません、ちょっと遅れちゃいました」」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

台無しだ！

明久も俺と全く同じ顔をしている。いったいこんな空気を作りだした先生は誰だ！

「聞こえないのか？ああ？」

いくら教師にしても言い過ぎだろう。そんなことを言い放った男を見してみる。

身長は180？強ぐらい、見た目は細めだが、どちらかというところクサーのような体つきだ。

少し目線をあげてみると、意志の強そうな目をした野性味たっぷり  
の顔。



「大丈夫だ、こいつの生命力はあの『黒い悪魔』を人間ベースにしたようなやつだからな。」

「おかげで本気でやれる」

少しの間沈黙が起きたが後ろからの声によって破られた。

「え〜と・・・ちょっと通してもらえますかね」

そこには、よれよれの冴えない風なおじさんがいた。

「それと席に着いてもらえますか？HR始めますのでホームルーム

ついでにそこに転がっている死体も席まで持って行ってください」

ひどいよいよだなこの爺さん。おそらく担任の先生なんだろう。

「「「「了解うけ（した）（・・・）「「「「

雄二を殴った俺は、雄二を席まで運んだ。

先生はしばらく俺らが座るのを待ってから、ゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくおねがいします」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとするが、肝心のチョークが用意されておらず、

あきらめた。

「皆さん全員に座布団と卓袱台は支給されていますか？不備があれば申し出てください」

このクラス全員に学習机はなく、あるのは畳と卓袱台と座布団のみ、とてつもなく斬新な教室だった。

「せんせい、俺の座布団に綿が入ってないですー」

一人に生徒が文句を言う。

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、あとで自分で直してください」

「センス、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請してくださいましよう」

教室のいたるところにひび割れがあり、天井にはクモの巣が張っており、

窓ガラスはところどころが欠けている。もはや廃屋である。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

ときどき畳のカビた臭いがして、衛生面でも悪いと見えた。

「では自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人から  
願います」

そう言われると一人の男子生徒が立ち上がった。

「きのしたひでよし木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

一番向こうの廊下側は秀吉か。

まあ見た目は、相変わらず女子にしか見えないな。

まあ俺はちゃんと男として接しているけどな。

「と、いうわけじゃ今年一年よろしく頼むぞい」

そう秀吉が笑顔であいさつを終えると、何人かの男子（明久も含む）  
が心をうちぬかれたような顔をしていた。

「……………つちやいひた土屋康太」

次はムツツリーニか。あいかわらず口数は少ないな。あいつは小柄  
だが引きしまっていて

運動神経もいいのに、なぜあんなにおとなしいんだ？いろいろと問  
題があるからか？ある意味で。

まあそれにしても女子の人数が少ないな。

あまりにも色が無いじゃないか。最低クラスともなると女子の人数が減るのだろうか？

「　　です。海外育ちで日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です」

ん？海外育ち？じゃあ島田？いろいろ考えていたせいで見ていなかった。

「あ、でも英語は苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

まあ十中八九島田だろうが、まだ断定はできないため次の言葉を待つ。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

うん、島田だな。それ以外考えられない。

明久は島田の顔を見て、すごい勢いで顔が引きつっている。そんなに苦手なのか？

「　　です。よろしく」

また一人終わると、おっ次は明久だ。

「　　コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」



「ダアアーリーーン!!」

俺と明久、島田、秀吉、雄二以外の男子の野太い声が教室中に響いた。

さすがFクラスやることが違う。

言われた明久は青い顔をして言葉を繋ぐ。よほど気持ち悪かったのだろう。

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

さあて、次は俺か。

「俺は天咲鋼侍だ。俺に喧嘩吹っ掛けたやつはそこに転がっているやつと同じようになるぞ。」

そんなこといったら教室全体が沈黙した。さすがに過激すぎたか？少し敬語気味にするか。

「まあ何にもしてこなければいいだけですよ。趣味は暗殺、特技も暗殺です。」

「殺したいやつがいたら僕に申し出てください。お金はとりますが、一撃で仕留めてあげますから」

にっこりと言ってみた。しかし、空気は一向に治らない。あれ？俺変なこと言ったかな？

その空気をぶち壊すかのように教室の扉が開いた。

「あの、遅れて、すいま、せん……………」

『えっ?』

クラス全体が驚いたような声を出す。俺は別に知っていたので驚かなかったが、

明久は知っていたのに驚いていた。

俺は息を切らしている姫路に声をかける。

「ようっ！遅かったじゃないか。どうしたんだこんなに遅れて?」

俺が空気をぶち壊すように明るく声をかけると。姫路も返してくれた。

「あっこんにちは天咲君、これにはちょっと理由があつて……………」

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……………」

小柄で肌は新雪のように白く、背中まで届く桜色の柔らかそうな髪は、彼女の優しそうな

性格を表しているようだった。保護欲をかきたてるような可憐な容姿は、男だらけの

このクラスで異彩を放っていた。

しかし、皆はその容姿をみて驚いたわけではない。

「はいっ！質問です！」

一人に男子生徒が姫路に向かって手を挙げた。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

いきなりの質問に少し驚いたようになっていたがキチンと聞き返した。

「なんでここにいますか？それに今さうだけど天咲も」

俺にも話が振られたので俺が答えることにした。

「それについては俺が説明しよう。」

クラス全員の視線が俺に注がれる。男ばっかであんまりいい気はないな。

「俺や姫路は途中で気分が悪くなって退席したんだ。」

この学校は一度退席するとテストは受けられなくなり、0点となる。

「だから、俺や姫路がここにいるんだ」

クラスの全員が、『ああ、なるほど』と言っていた。

そんな俺の説明を聞いてクラスの何人かが言いわけをし始めた。

『そういえば、俺も熱の問題がでたせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故にあったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かしてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

『実は昨日じいちゃんが死んで泣き疲れちゃって』

『……ご愁傷様です』

最後の以外は馬鹿ばっかだった。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そんな中、俺といつのまにか復活した雄二の隣の卓袱台に着こうとする姫路。

「き、緊張しましたあ……」

席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏す姫路。

前の明久が姫路に話しかけようとしているが、姫路はいったん俺のほうを向いてお礼をいつてきた。

「先ほどはありがとうございます天咲君。私が戸惑っているところを見て助けてくれたんでしょう?」

「んつまあな!それに俺の事情も一緒に言えたからいいよ。」

俺らが話していると明久が姫路に話しかけようとしていた。

俺は雄二のほうを見てアイコンタクトをする。

雄二もわかってくれたのかうなずいてくれた。

「あのさ、姫」

「「姫路」」

俺と雄二が同時に声をかける。

明久は声を遮られて不機嫌そうな顔をしている。まあそりゃそうか。

姫路も同時に二人に話しかけられて、少し困った顔をしていた。

「は、はいっ。何ですか二人して? えーっど………」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

姫路は深々と頭を下げている。そこまでかしまらなくてもいいのにな。

そこで、俺は明久が姫路と会話ができないように言葉をつなげる。

「ところで、姫路、お前体調大丈夫なのか？」

これは俺の本音でもある。実際昔っから病弱である姫路は、

復活してすぐ倒れたりすることがあったからだ。

「あ、それは僕も気になる」

そこで、無理やり明久が会話に入ってくる。

ちっ！作戦は失敗か。

「よ、吉井君！？」

姫路は明久の顔を見るなり驚いていた。

それに対して明久は悲しそうな顔をしている。いまがチャンスだな。

「姫路、明久がブサイクですまん」

俺と雄二の声が完璧にそろった。辛うじて任務は成功したようだ。

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイク

なんかじゃないですよ！その、むしろ……」

姫路がそういつてもじもじし始めたところを見て俺は少しおちゃめを試してみた。

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人

にも明久に興味を持っているやつがいあたような気もするし」

「え？それは誰」

「そ、それって誰ですか！？」

そして俺は言う。雄二は顔にはだしてないつもりなんだろうが、少し口がひくひくしている。

「確か、久保」

「利光だったかな」 久保利光 (性別/オス)

「……………」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

雄二が突っ込んだ。

「半分冗談だよ。安心しろ」

「ところで姫路。身体は大丈夫なのか？」雄二がきく。

「あ、はい。もうすっかり元気です」

「ねえ鋼侍！残りの半分は何！？」

「さて静かにしようか先生もこっち見てるしな。」

「残りの半分は何なんだよおおお！！！！」

明久は騒ぐのをやめなかった。うっとうしいな。



**第三問！！！（後書き）**

少し長くなりすぎました。

#### 第四問（前書き）

さっきの続きです。第三問はオリジナルです。

## 第四問

- - -  
- - - 第三問 - - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

問 以下の問いに答えよ

白玉三個、赤玉二個が入った袋から玉を一個とりだし、色を調べてから

元に戻す作業を五回行うとき、次の確立を求めよ。

- (1) 白玉をちょうど三回とりだす確率。
- (2) 五回目に赤玉を取り出す確率。

姫路瑞希の答え

- (1) 2 1 6 / 6 2 5
- (2) 4 3 2 / 3 1 2 5

教師のコメント

正解です。 ? C ? ( 2 / 5 ) ? ( 3 / 5 ) ? × 2 / 5 で計算できま  
すね。

天咲鋼侍の答え

(1) 2 1 6 / 6 2 5

(2) 4 3 2 / 3 1 2 5

教師のコメント

君と姫路さんがAクラスに行ってくれんことを口にする心から思っております。

吉井明久の答え

(1) ( ? ) (2) ( ? )

教師のコメント

おや？選択問題はこの問題のずっと先のはずなんですが？

それに？なんて選択肢はどこにもありませんよ。

土屋康太の答え

(1) ( およそ

(2) ( およそ

教師のコメント

どちらも( )おおよそ( )でとまっていますよ。

- - -  
- - - 第四問 - - -  
- - -

問 以下の英文を訳しなさい。

「 This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
y .  
」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強してますね。

土屋康太の答え

「これは  
」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「  
? \* x  
」



改めてこのクラスのひどさを実感することになった。

「あ、あはは………」

俺の隣で姫路が苦笑いしていた。

それを見ていた明久はなにかを決意したような顔になっていた。

まあ言いたいことは中学から一緒だった俺には当然理解できる。

「……雄二、鋼侍ちよつといい？」

明久は俺とあくびをしていた雄二に声をかける。

「ん？なんだ？」

「まあだいたいわかるんだが話は読んでいるんだが……いいぞ。」

「？俺も別に構わんが」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

明久から順番に俺と雄二が立ち上がり、教室から出て行った。

「んで、話って？」

雄二が明久に質問する。

「そこからは俺が話したほうがよさそうだな。」

明久は一瞬驚いた顔をしたが俺は続ける。

「まず、このFクラスの教室についてだ。お前たちも思っているだろうがここは想像以上にひどい。」

それに比べてAクラスはこれでもか！っというほど豪華なものだった。

そこで、せつかく二年生になったんだから、『ししきョウせんソウ試召戦争』を

やるうということだ。しかも、Aクラス相手にな。

まあ明久のことだから、目的は姫路の為・・だろ？」

明久は凶星を突かれたようにビクッ！となった。うんうん非常に分かりやすく結構。

「うん・・・。鋼侍の言ったことが、僕の意見そのものだよ。雄二はどうする？」

明久は雄二に話を振る。雄二はにやりと笑って答えた。

「そんなことを言われなくてもそうするつもりだったよ。俺はAクラスに試召戦争を

挑もつとおもっていたところだったんだ。」

「え？どうして？雄二だって全然勉強してないよね？」



明久はわけがわからないと言った風に首をかしげる。

「世の中学力だけがすべてじゃないって、そんな照明を試みてみてな」

俺はわざと雄二と同じタイミングで、全く同じことを言ってやった。

雄二は、まねされたことに驚くことはなく、俺に向かってにやりと笑っただけだった。

「????」明久は頭の上にたくさんのはてなをだしていた。

「Aクラスに勝つ作戦も、お前にはもう作ってあるんだろう?雄二?」

「さすがだな鋼侍。確かにおれには考えがある。おっと、先生が戻ってきた。教室に

入るぞ」

「あ、うん」「了解」

俺と明久は雄二についていき、そのまま教室に戻った。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

新しい教卓に替わり（まあそれでもボロいけどな）、気を取り直してHRが再開される。

「えー、須川亮です。趣味は」

特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて雄二が立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿にはいつものふざけた雰囲気は見られず、クラスの

代表として相応しい貫禄を身にまとっているように見えた。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

福原先生に問われ、鷹揚にうなづく雄二。

別にクラス代表といっても、学年で最低の成績を修めた生徒たちが集められるFクラス

の話。何の自慢にもならないどころか恥になりかねない。

それにも関わらず、雄二は自信に満ちた表情で教壇に上がり、俺らの方へ向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

クラスメイトから大して注目されるわけでもない。Fクラスというバカが集まりの中から

比較的成績が良かったただけというだけの生徒。他からみれば五十歩百歩といった感じだ。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そんな生徒が、ゆっくりと、全員の目を見るように告げる。

間の取り方が上手いせいか、全員の視線はすぐに雄二に向けられるようになった。

皆の様子を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移りだす。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて俺らも雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「不満はないか？」

「「「「「大ありじゃあっ!!」「」「」」」」

二年F組生徒の魂の叫び。

「だろう？俺だってこの状況は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ!改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろう?あまりに差が大きすぎる!』

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯を見せ、

「 FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思  
う」

Fクラス代表、坂本雄二が戦争の引き金つを引いた瞬間、身体  
の血が騒ぎ始めた……。

第四問（後書き）

まだまだやったるで〜〜

## 第五問（前書き）

ふういつの間にか25日になってました。

この更新が終わったら寝れるぞ〜〜。





天咲鋼侍の答え

『(1)  $X = \frac{1}{6}$

(2)  $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 』

教師のコメント

(1) は合っていますが(2) は選択問題です。答えがあっても?? ?の中から選ばなければ、

点数をあげることにはできません。とてももったいないのでこれからは注意しましょう。

土屋康太の答え

『(1)  $X = \frac{1}{3}$ 』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』



文月学園に点数の上限がないテストになって4年が経過していた。

このテストには一時間というタイムリミットの中で無制限の問題数が用意されている。

そのため、点数には上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

また、科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』というものがある。

これは点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムで、

教師の立会いの下で行使が可能になる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された

先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争  
試験召喚戦争と呼ばれる

戦いだ。

その戦争で重要になるのがテストの点数なんだが、AクラスとFクラスの点数は文字通り桁が違う。

正面からやりあったとすれば、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうか。

いや、相手次第では四、五人でも負けてしまうだろう。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言して見せた。

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『何を根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。

確かにどう考えても勝てる勝負だとは思えないだろう。それは雄二と結託して試験召喚戦争を

起こそうとした俺や明久でさえも同感だ。勝てないからといって止めるつもりはさらさらないけどな。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

この雄二の言葉を受けてクラスの皆が更にざわめく。俺はこの言葉に、にやりと笑った。

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす悪友。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太と呼ばれた男子生徒。

姫路がスカートの裾を抑えて遠ざかると、アイツは顔についた畳の跡を隠しながら

壇上へと歩き出した。

まあ流石だな。あそこまで恥も外聞もなく低い姿勢から覗きこむなんて、

しようと思えばできるが、あそこまでしてやるうとは思わない。格が違う。

「土屋康太。こいつがあ有名な、ムツリーニ寡黙なる性識者だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃないが、ムツリーニという名前は別だ。

その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリー二だと・・・・・・・・?』

『馬鹿な、ヤツがそうだといいのか・・・・・・・・?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして  
いるぞ・・・・・・・・』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・・・・・・』

畳の跡を手で押さえている姿は果てしなく哀れを誘う。例えど  
うい  
った状況であろうとも、

自分の下心は隠し続ける。異名は伊達じゃなかった。

「?????」

姫路は頭に多数の疑問詞を浮かべていた。まあわからんほうが  
いい  
けどな。

「姫路と天咲のことは説明する必要もないだろう。皆だっ  
てその力  
はよく知っているはずだ」

「えっ? わ、私と天咲君ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している。特に天咲はな」

『そうだ。俺たちには姫路さんと天咲がいるんだ』

「ああ。彼女たちならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女たちさえいれば何もいらないな』

だれだ？さつきから俺と姫路に熱烈ラブコールを送っているヤツは。

「木下秀吉だっている。」

木下秀吉。彼は学力ではあまり名前を聞かないけど、演劇部のホープであることと、双子の姉の

ことでは有名だったりする。

『おお………！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の………』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんや天咲と同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな！』

これならいけそうだな、とか、絶対に勝てるとかそんな声が上がったりしていた。

そう、気づけば、クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

………シン

そして一気に下がる。

「雄二、いまここでその名前を出したらこうなることは分かっていただろ？」

「ちょっと雄二！、鋼侍！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要ないよね！

それにさっきの言葉あってるけど結構心にグサツと来たんだよ。もう僕の心はズタズタだ！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

クラスメイトの口々から不安そうな声があがってゆく。

「ホラッ！せっかく上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちと違って普通の人間

なんだから、普通の扱いを            って、なんでぼくを睨むの？  
士気が下がったのは



僕のせいじゃないでしょう!」

まあ知っていてもあまり良い噂じゃないだろうし、どうでもいいるう。

しかし、雄二は真実を告白した。

「そうか、知らないなら教えてやる。こいつの肩書きはく観察処分者」だ。」

『……………それって馬鹿の代名詞じゃなかったっけ?』

その言葉がグサリと俺の心をえぐる。

「ち、違うよっ! ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

よくぞ言ったぞ明久! 今日は何にかいいもんおごってやるぞ。

「そつだ。バカの代名詞だ。」

「肯定するなバカ雄二! 僕はともかく鋼侍が悲しむだろう!」

ああ言ってくれちゃったよこいつ。あとで半殺しにしよ。

「?なんで鋼侍が悲しむんだ?別に何ともないはずだろう?」

「はあ……………説明するよ」

三分ほどたって……………。

「はあああああ！？鋼侍が＜観察処分者＞だつて！？」

雄二がかなりおどろいていらっしやる。まあ無理もないか。

『あの【シルバーナイト白銀の騎士】が＜観察処分者＞だと！』

『このままでは＜観察処分者＞の価値が上がってしまうじゃないか！？』

『なんということだ・・・俺の天使様が・・・！』

みんないろいろな態度をとっていたがまあいい。けど最後のやつは殺す。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が小首をかしげている。まあ知らなくて当然だろうけどな。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすと言った具合だ」

そう、本来なら試験召喚獣は物体に触れることができず、他の試験召喚獣しか触れることができない。

いわば幽霊みたいなものだ。

けど、俺と明久のは違って物に触れることができる特別製だ。

「そうなんですか？それってすごいですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなんて便利ですよね」

姫路はきらきらした目で俺と明久を見てくる。そんな大したものじゃないのにな。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

俺と全く同じ意見を明久は姫路に言った。

「確かに、召喚獣を思う通りに使役できるのは大きい。それに皆と違って雑用がある分

俺や明久のほうが、扱いになれている。俺はまだなったばかりだけどな。

けど、そのかわりに召喚獣が受けたダメージは俺たちにフィードバックしてくるんだ。」

「鋼侍の言うとおりだ。だが鋼侍の場合はペナルティと考えるよりむしろプラスに考えたほうがいい。

今はテストを受けていないから戦力にはならないが、テストを受けた瞬間、おそらく最強に

なるだろう。」

『ってことは使えるのが一人、もう一人のは戦力外と』

『使えねえなおい』

「気にするなどうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。」

「うわっ、すごい大胆に無視された!」

(近くにいっても存在すら認められなくなったか明久よ)。

そんなことを明久にアイコンタクトで送ると明久は泣きそうになっていた。

「皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『当然だ!!!』

「ならば筆<sup>ペ</sup>を執れ!出陣の準備だ!」

『おおーっ!!!』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない!Aクラスのシステムデスクだ!」

『うおおーっ!!!』

「お、おー……………」

勢いに押されながらも姫路は小さく拳を掲げていた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……………下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

それにさつき漢字が違ってた気がするんだけど……………」

「大丈夫だ。それはお前の聞き間違いだ。それにやつらはお前に危害を加えることはない。」

騙されたと思って行ってみる」

「本当に？」

「ああ本当だ」「俺も声をそろえて言う。」

「大丈夫だ。俺も鋼侍も友を売るような真似はしない。俺たちを信じろ」

更に追い打ちをかける。

「わかったよ。それなら使者はぼくがやるよ」

やっと折れてくれたかと言わんばかりの顔で明久を見送る。

「吉井君大丈夫でしょうか？」

姫路は心配そうに言う。

「大丈夫だ、死んで帰ってくるから」

俺と雄二自は姫路に向かって親指を立てにつこりと笑って見せた。

余談だがそのあと明久が「騙されたあぁっ」と言って帰ってきたのは

所詮余談である。

## 第五問（後書き）

今日はこれぐらいにしときます、すげー進行速度おそいな。

これからはちょっとずつ省いていきます。

## 第六問（前書き）

いつのまにかPVが15000を突破していました。

恐るべき力ですねバカテス。

こんな糞小説を読んでくださって誠にありがとうございます。

今回の問題もオリジナルで、主人公の答えは省きます。



## 第六問

- - - - -  
- - - - - 第六問 - - - - -  
- - - - -  
- - - - -

問 以下の（ ）の中に正しい人物名と、正しい言葉、を答えなさい。

『1874年（明治7年）、征韓論に破れて下野した（1873年）前参議の土佐の

（ ）（ ）（ ）の副島種臣・江藤新平、土佐の後藤象二郎らが政党の先駆をなす、

（ ）（ ）（ ）を結成し、（ ）（ ）（ ）を政府に提出した。』

姫路瑞希の答え

『？板垣退助

？愛国公党

？民選議員設立建白書』

教師のコメント

よく勉強してますね。いちいち紛らわしい問題にしたのですが、全く問題なかったようですね。

土屋康太の答え

『?坂本竜馬

?ムツツリ同盟

? (女の子のHI・MI・TU?) 『

教師のコメント

あなたは坂本竜馬を何だと思っているんですか?あとで職員室に来るように。

吉井明久の答え

?イオリア・シュヘンベルグ

?ソレスタル・ビーイング

?俺がガンダムだ!!

教師のコメント

私もガンダムは好きですが、年代が全く違いますね。君も土屋君と一緒に職員室に来るように。

.....

-----

まあ前の余談につながるわけだが、

今現在、Dクラスにはぼこぼこにされた明久が、雄二に向かっていやもんをつけている。

俺にそんなことを言ったら殺されるのがわかっているからだろう。

「吉井君、大丈夫ですか？」

そんな中でも姫路は明久に声をかける。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、ホントに大丈夫？」

島田が明久に声をかけたが、あれは別の意味の心配だろうな。

俺は瞬時に島田とアイコンタクトをとり、同じ言葉を明久に向ける。

「「そう（か）、良かった……。。ウチ（俺）が殴る余地は  
まだあるんだ……。」」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

俺と島田は顔を合わせて笑いあう。このクラスには息の合いそうな奴がいっぱいいるな。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ。」

雄二は扉を開けて外に出て行った。

まあ明久の心配なんかするわけないか。

姫路や秀吉は明久に、一声かけてから教室を出ていき、雄二の後を追う。

明久とムッツリーニが何か話しているが、島田によって遮られる。

「ほら吉井。アンタも来るの」

明久はさもめんどくさそうに「あー、はいはい」と返事をする。

「返事は一回！」

「へーい」

「……………一度、Das Brechen ええと、日本語だと……………」

「……………調教」

俺とムッツリーニが声をそろえて言う。

俺は思い出すのに時間をかけたが、おそらくムッツリーニは違うだろう。

いつものテンポの遅さにより、俺と偶然重なっただけだ。恐るべしムツリーニ。

「そう。調教の必要がありそうね」

「調教つて。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

微妙に明久の顔が引きつっていた。まあわからなくもないが。

「じゃ、中間とつてZ? c h t i g u n g

」

「.....それはわからない」

「それって折檻だろ? さっきより酷くなってないか?」

「そうよ、それぞれ」

「僕に何をする気ですか? 明らかに悪化してるし」

「そう?」

完全に悪化していることに島田本人が気づいていないようだ。

かなり危ないことをおっしゃってるのをわかっているのだろうか。

まあそんな会話をしながら歩いていると、いつのまにか屋上まで来ていた。

雄二はフェンスの前にある段差に腰をおろしてた。

「明久、宣戦布告のときに時間は告げてきたか？」

「うん。今日の午後ってことは言ってるよ」

明久はそういうと、近くの段差に腰を下ろした。俺らもそれにならう。

「それじゃあ飯にするぞ。明久、鋼侍、今日ぐらいまともなもん食っとけ。」

「そう思っならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど。」

「ん？俺はいつもまともなものを食ってるだろう？明久はともかな。」

俺は持つてきた弁当箱をあける。

「「「「「「「「「「「「うわああああああ「「「「「

みんな俺の弁当を見て、すごい勢いで引いていた。

なぜだかは俺にもわからん。

「よくおまえそんなもん食えるよな」

「ウチ、気持ち悪くて直視できないわ」

「うん、さすがに何度見てもその弁当だけは慣れないね」

「ワシには鋼侍の感覚が理解できんわい」

「……まさに珍食材の塊」

「あ、あはははは……」

みな、それぞれ俺の弁当から遠ざかっていく。さすがにショックだぞ。

「なにが変なんだ？ マムシの唐揚げに、芋虫（生）のソース漬、はちみつに、

できたて梅干し、ご飯は麦米。別に普通の昼飯だろう？ それに栄養価の高いものばっかだぞ。

飲み物は青汁、牛乳だ。」

説明するたびに皆が遠ざかっていくのを見ると、正直泣きたくなってきた。

「ね、ねえ鋼侍……」

明久が渋々俺に近づいて話しかけてくる。おお！ お前はやっぱり親友だ！

「朝とか夜は……こういうのじゃないよね？」

「？ もちろんだぞ」

みなはほっとしたように息を整える。





「し、仕送りが少ないんだよ！」

「……………あの、よかつたら私がお弁当作ってきましようか？」

「「彘?」「」

まずいぞ、これは。一応整理しておくが、俺は転生した身、原作知識で姫路の弁当がどんなものなのかを

知っている。あれを食ったら確実に十年は寿命が縮まるだろう。

しかし、ここは「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

っておいっー！明久貴様ああ！俺たちを葬るつもりか！原作通りに進んじまったじゃないか！

何ということだ！

「はい。明日のお昼で良ければ」

ああ……………明久なんということをして……………明日俺に死ねと言っのか？

「……………ふん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

あ、この爆弾忘れてた……………。

「あ、いえ！その、皆さんにも……………」

「俺たちにも？いいのか？」

雄二、貴様までいらぬことをいつてくれたな？

「はい。嫌じゃなかったら」

チャンスは今しかない！さあ言うんだ鋼侍！まだ解放されるチャンスはこれが最後だ。

「じゃあ俺はい」「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

おっ、終わってしまった……………。俺の寿命は縮まるしか道はないのか？

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」

俺はいつの間にか涙を流していた。うっうっうっ！

「お、おいなんで鋼侍は泣いてるんだ？姫路が作ってくれると聞いて感動したのか？」

「そっおもってくれればいいよ」

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな……………」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き

」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

雄二が突っ込みを入れた。まあ確かに的確な判断だが、告白しても振られることは絶対にはいはずだな。

「 にしたいと思っていました」

明久は失恋回避成功！みたいな顔をしているが、この告白は通常の告白より

圧倒的にハードルが高いことに気づいていないようだ。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

どちらの意見も正論だった。

「だって……………お弁当が……………」

明久はかなり悲しそうな顔をしていたので、俺は声をかけてみた。

「明久。さっきの告白はおそらくこの世界中の中で最も口に出してはいけない告白だぞ。」

「う、うわ~~~~ん!!」

明久は泣きながら屋上を去って行った。俺を弁当の道連れにしたんだ。これくらいはやっておかないとな。

「さて、明久のことはほつといて、本題の試召戦争にもどろう。」

姫路は明久が突然去ったことに驚いていたが、本題に入ったため、こっちに集中していた。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、

勝負に出るならAクラスじやろう？」

「そつえば、確かにそうですね」

雄二が俺にアイコンタクトをして、俺から理由を話すように目であつてきた。

「それについては俺が説明する。」

「どんな考えですか？」

「理由はいくつかあるが簡単に言ってしまうえば、Eクラスなんて戦うまでもない雑魚だからだ。」

「雑魚つて鋼侍、Eクラスのほうが僕らより成績がいいんだよ？」

いつのまにか帰ってきていた明久が、俺に疑問を言う。

「まあ振り分け試験の時点では確かに向こうのほうが強かったかもしれない。が、実際は違う。」

明久。お前の周りにいるメンツを良く見てみる。」

明久は俺が言ったと通りに、皆を見渡してから言う。

「美少女が3人とバカが2人とムツツリが一人いるね。」

「誰が美少女だと!?!」

「ええっ!?!雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………(ポツ)」

「ムツツリ二まで!?!?どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!」

いい感じで明久がとまどっているところを見て俺は笑いそうになった。

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリ二」

と、そこでおそらく明久が美少女と言っていたやつの一入、秀吉が言う。

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミを入れた

いんだけど」

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして雄二が説明をしなおす。

「姫路や鋼侍に問題のない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。」

Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味がないってことだ。」

そこに俺は付け足しをいれる。

「Dクラスと戦う理由はまだある。今Aクラスに突っ込んで確実に負けるのは目に見えてる。」

そこで、景気づけのためにDクラスとやって勝つことで、クラスの士気を上げて戦いを挑むってわけだ。

俺はべつにCクラスと戦ってもいいんだが、こればかりは代表が決めることだからな、

俺は逆らえないってわけだ。それに作戦を立てることに關しては、俺より雄二のほうが一枚上手だからな。」

「まあ、そういうことだ。と、言うわけで、お前らが協力してくれば絶対に勝てるんだ」

「これだけは覚えておけ、いいか？俺たちは 最強だ」

雄二が言いきった。さすががしいぐらいだな。

「いいわね。おもしろそうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………(グッ)」

「が、がんばります」

「ああ、漬してやるつか」

全員まったく同じ気持ちになっていた。俺だけは少し過激だったが……。

「そうか、それじゃ、作戦を説明しよう。」

「





第六問（後書き）

今日もまだ頑張って書きます。

俺フアイト！

## 第七問（前書き）

自分の文才のなさにないてしまいそうです。

今回は問題がありません

そしてちょっと原作と違うところがあります。

## 第七問

「さあて、俺はがんばって試験を受けましようかね。」

俺はまだ二年生になって一回もテストを受けていない状況だったので、

最初から回復試験を受けなければならなかった。

もちろん、姫路も一緒である。

「そうですね、早く皆の手助けをしなければいけませんから。

がんばって吉井君を助けないと！」

「クスツ……結局は明久なんだな姫路」

「え、そ、そんなことないですよ。皆のため頑張らないと」

そういつてごまかす姿は、誰からみてもかわいいと見れるだろう。

しかし、今はそんなこと考えている暇はなかった。

「まあ話しを戻そう。今回俺はDクラス戦に早めに介入することになる。」

時間はかなり稼げると思っから、テストが終わり次第来てくれ。そのとき俺は相手の代表を

倒しに行っているだろう。

俺の名前は<観察処分者>のせいで有名になっているだろうが、おまえはそうじゃない。

隙を見て、お前は相手の代表を倒してくれ、いいな?」

「は、はい。わかりました。」そう言って姫路はうなずいてくれた。

「これより回復試験を行います、試験中に不正行為が見つかった場合は、戦争に参加できず、

強制的に補修室送りとなります。いいですね?」

試験監督が俺たちに聞いてくる。

俺と姫路は顔を見合わせ、「はいっ!!」「っ」と返事をした。

さて・・・これからが本番だ。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

明久side

「吉井!木下たちがDクラスの連中と廊下で交戦状態に入ったわよ!ポニーテールを揺らしながらかけてくる女の子、そう島田さんだ。」

島田さんは背も高くて脚も綺麗なのになぜか魅力に欠ける。

「ああ、胸か」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に」  
マズイ。なんかのスイッチが入ったようだ。

「そ、それよりホラ試召戦争に集中しないと！」

現在前線にいるのは秀吉率いる先攻部隊。そこそFクラスの間際に中堅部隊の僕たちがいる。

いつのまにか部隊長にされていたけど、なった以上は部隊を導く必要がある。ここは気を引き締めて行かなくちゃ

いけない。まずは前線部隊の様子を見てみよう。

『さあ来い！この負け犬どもが！』

『て、鉄人！？嫌だ！補修室は嫌なんだっ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補修室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、

たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補修が終わる頃には趣味が勉強、

尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるさ」「

『お、鬼だ！誰か、助けっ

イヤアア

（ボタン、ガチャ）

』

よし、試召戦争の雰囲気のだいだいはわかった。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、何？作戦？なんて伝えんの？」

「ここで出す指示は一つ！

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

目をチヨキで殴られたというよりも、潰されかけたと言ったほうがいいんだろうなこの場合。

「目が、目があっ！」

僕はこの後島田さんに説教をされて復活したが、前線部隊が後退を開始したと聞き、言った。

「「総員退避（よ）！！」「」

「考えていることは一緒だったわね吉井。」

「うん！ここは逃げたほうがよさそうだ」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

くるりとFクラスに向かって方向転換。

すると、振り返った先には本陣（Fクラス）に配置されているはずのクラスメイト、横田君がいた。

「ん？横田君じゃない。どうしたの？」

「代表より伝令があります」

メモを見ながらハキハキとした声で告げる。

「『逃げたら鋼侍と俺で貴様らをミンチにしてやる』」

「全員突撃しろおーっ！」

気が付いたら戦場に向かって全力ダッシュしていた。

雄二一人なら何とかなっても、（白銀の騎士<sup>シルバーナイト</sup>）と言われた鋼侍がいたら絶対に敵わない。

「……………なんて思ってないよ。ただ皆の勝利を思っていることさ

前線で秀吉たちと合流し、秀吉は回復試験を受けに行った。さてここからが正念場だ。」

- - -  
- - -  
- - -  
鋼侍 side

俺は先生の特例を受けて、試験時間一時間のところを三十分にしてもらった。

点数はもちろん悪くなってしまいが、それでも十分に稼げた。

俺はFクラスのほうには行かず、職員室のほうへ向かった。

言っている途中こんな放送が聞こえてきた。

ピンポンパンポン「連絡致します」

ん？これは須川君の声か？いったいなにしているんだ？前線はどうなってやがる！？

「船越先生、船越先生」

呼び出し人はあの船越先生？婚期を逃して、ついには生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった。

あの船越先生か？何をするつもりなんだ。

「吉井明久君が体育館裏で待つております」

「生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうです」



ぶふうう！！ あまりの衝撃に噴出してしまった。

これはいたずらなのか？それとも先生を場外に送るための作戦なのか？

まあおそらく後者だろうけど流石に酷すぎるような気がする。

「須川ああああああっ！！」

これはおそらく明久の声だろう。あまりの怒りに一階の職員室前にいる俺にまで聞こえた。合掌。

職員室前で深呼吸して、静かに入る。

「失礼します。試召戦争の立会人になってほしいんですけど、どなたか一緒にきてくださいますか？」

「それなら私がいきましょう。」

立ち上がったのは我が担任の先生、福原先生だった。

「少し外に出ることになりますがいいですか？」

「？よくわかりませんがいいでしょう。」

.....

明久 said

ちい！このままじゃまずいぞ。

今現在後ろから雄二たちの援軍が来てくれて持ちこたえてはいるけれど、向こうがどんどん攻めあげてきていて、

僕たちと雄二たちの部隊を合わせても十人を切ってしまっている。

姫路さんや鋼侍が来るまでは持ちこたえてなければいけなかったが、正直もうきつい。

「雄二！このままじゃあ負けちゃうよ！」

「そんなことぐらいわかってる、俺がやられたら終わりなんだ。お前たちは俺が逃げる時間を稼いでくれ。」

「わかったよ！島田さん。雄二が逃げるまで少しでも多く時間を稼ぐんだ。」

他のみんなもDクラスのやつらが抜けられないように少しでも道を狭めるんだ」

くそっ！こんなはずじゃなかったのに！

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います。」

「ちい、負けるか！Fクラス田中が行きます。」

『Dクラス 鈴木一郎

VS

Fクラ

ス 田中明

化学 92点

『

田中君が敗れてしまったが、「もらったー！Fクラス柴崎 功 行  
きます！」

『Dクラス 鈴木一郎

VS

Fクラス

柴崎功

化学 25点

『

鈴木君を撃破。しかし新手が来てしまう。

「先生、Dクラス笹島圭吾行きます。」

『Dクラス 笹島圭吾

VS

Fクラス柴

崎功

化学 99点

『

どんどんやられていってしまふ。

雄二の援軍も残り少なくなっていた。

そろそろ僕たちも逃げないとあとがまずい。



鋼侍 side

俺が福原先生を外に連れ出してから、3分しかたっていないところの校庭の木の上に俺と先生はいた。

「先生。召喚範囲の高さを削って、縦の長さを長くすることはできますか？」

「うーん……できないこともないとおもいますよ。一応やってみましょう。」

「承認します」

そういうと、召喚フィールドができて、高さの分が削られ、縦に長い召喚フィールドができた。

「やればできちゃうものなんですねこういつのって」

「まあできたんですから、いいでしょう。これをどうすればいいんですか？」

「この召喚フィールドを学園の三階部分まで延ばしてください。やれるかどうかわかりませんが」

「やってみたいことがあるんです。」

「ふむ、了解しました。」

先生はそういつと学園に向かつて召喚フィールドを伸ばしはじめ、学園にたどり着いたところで止まった。

「今現在、化学のフィールドができています。それにアクセスすればいいんですか？」

「？はい。お願いします」

アクセスするってなんだ？とか思いながら先生の行動をみていた。

「アクセスが完了しました。ここからでも相手の召喚獣に攻撃することができますよ。武器があれば」

「っ！？マジですか！？ありがとうございます！  
試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

俺は召喚獣を呼び出した。俺を小さくしたようなやつで、もちろん白銀の髪をしている。

ゆったりとしたポニーテールで結んである。

格好は、木と同じ色の緑の軍服に目には赤外線ゴーグルが付いている。

肩には巨大なスナイパーライフルがあり、腰には毒を塗りこんでいるナイフがあった。

尻のポケットには閃光弾が三つほど入っていたりもした。

『Fクラス 天咲鋼侍』

「まったく君という生徒は……なんなんですかその点数は」  
呆れたように福原先生は俺を見る。

「君なんか<観察処分者>ではあまりにも強すぎるでしょう。西村先生の意図がわかりませんね。」

「まあいいじゃないですか。ちょっとためしに一人撃ってみますね。」

俺は昔の感覚でスナイパーライフルを持つ格好をすると、召喚獣も俺にならった。

「第一の腕輪共有Link」まず召喚獣の右腕に付いている一つ目の腕輪が光る。

そう俺が言つと俺の視点は、召喚獣とまったく同じ視点になった。

「第二の腕輪—NO restriction interference《制限のない干渉》そう言つと、もう一つの腕輪が光った。

「The bullet reload start《弾装填開始》」

俺がそういうと、スナイパーライフルの中に弾が入っていく音がする。一つ一つ……。終わった。

それを見ているうちに、いつのまにか明久が襲われそうになってい

る。

「狙いを定めて……発射Fire!!!!」

そういつた瞬間、明久の召喚獣に襲いかかっていたDクラスのやつ  
の召喚獣がポテリとたおれる。

明久も何が起こったのかわかっていない様子だ。さて電話でもし  
ましようかね。

俺はポケットに入れてある携帯を取り出して、明久に電話をかける。

ブルルルルルル　ブルルルルルルルルル　ピッ

「よう。まだ生きてっか？」

「そっそのこえは!?!」

「俺だよ鋼侍だよ。お前の目の前で召喚獣が倒れたろ?それ俺の仕  
業ね」

「!?!?いまどこにいるの?」

「いま校庭の木の上にいるんだけど、そっから狙って倒したんだけ  
どそっちは大丈夫か?」

「大丈夫じゃないよ!今さっき雄二を逃がしたところなんだ。襲わ  
れたら大変だって言ってるさ。」

「ああ、了解した。お前らの部隊はもう下がっていいぞ。俺と、も



うすぐ来る姫路で蹴散らしておくからな。

安心して逃げるよ。いま俺がどこにいるかあいつらが躍起になっ  
て探しているうちにな。」

「姫路さんが!?!うん。わかったよ。あとはよろしく頼むよ!」

そう言っつて明久はFクラスまで帰って行った。雄二を探すことにす  
るんだらうか?

「さあて、やりますか!」

『Dクラス 萩本良平

VS

Fクラス

天咲鋼侍

化学 98点

528点

』

『なんだ?いきなり。どこにいやがるんだ!?!』

Dクラスの一人が声を上げるまあ見えない死角にいるしね。

『<sup>発射</sup>Fire』

まず一人目!

『Dクラス 山田智也

VS

Fクラス 天咲鋼侍

化学 96点

528点 『

「<sup>発射</sup>Fire」

よし！二人目。

『ここから逃げよう！どこから攻撃してきているのかわからないうえに、

相手はあの<sup>シルバーナイト</sup>白銀の騎士だ。』

ちっ余計なことを言いやがって。あの言ったやつを潰してやる。

『Dクラス 宇都宮 健一郎 VS

Fクラス 天咲鋼侍

化学 103点

528点 『

「<sup>発射</sup>Fire」よっしさつきあんなこと言ったやつ死んだ。そして、不幸なことにそこに鉄人が現れた。

『むっこんなにも、戦死者がいたのか？全員補修だ！』

『や、やめてくれー俺はまだ死にたくないんだって イヤーー  
ーッ』

『あんな地獄に連れて行かれるぐらいなら、死んだほうがましだつて！？ぐほっ！』

見ていて楽しいな。もつと殺しちゃえ

『Dクラス 木庭森 俊樹 VS Fクラス  
天咲鋼侍

化学 98点 528点

「Fire! アハハハハハハハ ドンドン死んじゃえ」  
発射

だんだん自分自身でも狂ってきていることが分かるのだが、それよりもこの状況が楽しいので止めようとしな

『Dクラス 麻風 実癒 VS  
Fクラス 天咲鋼侍

化学 94点 528点

「Fire」  
発射

『ちくしょう!このままじゃ本当に全滅しちゃう!教室に逃げ込むぞ!』

Dクラスの連中の何人かは殺れたが、少しだけ残ってしまった。

「……………ふつつ後は姫路に任せるか。」

そんなことを言って後ろを見てみると、

福原先生が「ごめんなさい・ごめんなさい・ごめんなさい」とずっと呟いていた。

はて？そんなにこの木の高さが怖いのか？もしかして高所恐怖症なのだろうか？

第七問（後書き）

なんかGU・DA・GU・DAですね

はいすいませんでした。精進します。

## 第八問（前書き）

ヤッピ〜！〜！さん毎度毎度感想をくれてありがとうございます。

こんな駄目な小説ですが頑張っていきたいと思っておりますので

よろしくお願いします。

第八問

-----  
-----  
----- 第八問 -----  
-----  
-----  
-----

問 以下の文章の（ ） に正しい言葉を入れなさい。

『 光は波であつて、（ ） である。 』

姫路瑞希の答え

『 粒子 』

教師のコメント

よくできました

天咲鋼侍の答え

『 p a r t i c l e 』

教師のコメント

あつてはいますが、英語で書く必要があつたんですか？

土屋康太の答え

『 寄せては返すの 』

教師のコメント

君の解答にはいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

鋼侍side

Dクラスが自分たちの教室に戻っていったのを確認した俺は、  
いったん、福原先生に帰ってもらって、Fクラスへの帰路について  
いた。

Fクラスのみみんなもクラスへいったん帰っているんだろう。

教室からは生き残ったクラスメイトの声が聞こえてくる。

俺が教室の扉をあけると、目の前には明久と雄二が立ってお出迎え  
してくれた。



「明久、鋼侍よくやった」

雄二がらしくもない言葉を俺たちにかけた。一体どういふ風の吹き回しだろう？

それも笑顔で言ってきたから余計である。それはもうムカつくくらいに晴れやかな笑顔だった。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ、バツチリな」

「俺にも聞こえてたぞ」

明久はやっぱりつと言わんばかりの顔で雄二をにらんでいる。

雄二はおそらく明久の不幸を楽しんでいるのだろう。こいつはそういう男だからな。

「雄二、鋼侍、須川君がどこにいるか知らない？」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「やれる、僕なら殺れる……！」

「「殺るなつての」「」

明久は明らかにおかしくなっていた。……俺が言えることじゃないけどな。

「ちなみに、だが」

雄二が何かを付け足すように言う。まあ言うことは決まっているんだろうが。

「あの放送の指示を出したのは俺だ」

「シャアアアアツッ！」

明久はまるで猫のような鋭い一步を踏み出し、コンパクトに雄二に向かって包丁を突き出した。

おそらく、狙いは避けにくく致命傷になりやすい肝臓だろう。

しかし、俺はその行動を許すことができなかった。

俺は、一瞬で明久の懐に飛び込み、明久の包丁を持っている右手の手首を左手で捻り上げ、

右手で明久を抱え上げ、そのまま投げ飛ばす。

「え？つてうわあああああああ！！！！！！！」

そのまま壁に直撃。そして崩れ落ちてゆく。

「うづうづ……痛いじゃないか！どうして僕の邪魔をするんだよ鋼侍！」

明久はこのことに本気で腹を立てているようだった。

「んなことしてる暇があったら、もつと時間を有意義に使い。それ  
にここで雄二が負傷したら、」

今後の試召戦争に大きな穴があいてしまっただろう？そのことを考  
えたらお前のことよりクラス全体の

ことを優先しただけだ。

それに雄二も今回は調子に乗りすぎだ。いくら作戦だったとはい  
え他にまだ手段があつたはずだろう？

あまり犠牲を増やそうとするんじゃない。わかつたな？

「わかつたよ鋼侍。ちょっと頭に血が上りすぎてたみたいだ。」

「俺も悪かった。一番確実だったのがアレだったとはいえ、少なく  
とも不快な思いはしたはずだ。」

それについてはすまなかつた。」

二人とも納得してくれたようだ。

「さて、そろそろ決着をつけにいか。姫路も来るはずだ。」

「そうじゃなちらほらと下校している生徒も見え始めたし、頃合じ  
やるっ」

「……………(コクコク)」

「おっしゃ！Dクラスの代表の首級を獲りに行くぞ！」

俺と雄二は声をそろえて宣言する。クラスのやつらも『おっっ！』と声を上げる。

クラスの皆がぞろぞろと出て行き最後に俺と明久が出ていく。

ここで雄二は的確な指示を出す。

「下校しているやつらにうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

俺はスナイパーライフルから毒入りナイフに武器を変える。

召喚獣の服の中にはスペアがたくさんあるので、投げナイフとしても使用可能だ。

「そっちから周りこめ！俺はコイツに数学勝負を申し出る。」

「なら俺は古典勝負を」

「日本史で」

FクラスのみみんながDクラスの連中を取り囲んでいる姿がそこらじゅうに見てとれる。

下校中の生徒の中に紛れて敵に近付き、取り囲んで討ちとるという姑息な作戦だ。

『Dクラス塚本、討ちとったり！』

一際大きな声が上がる。

おそらくさっきの戦いでなかなか苦戦した相手だったのだろう。各  
クラスのHRホームルーム

が終わり、先生たちを捕まえやすくなったおかげでこの作戦はうまく  
いっている。

念の為、明久や雄二、秀吉、ムツツリー二の姿を確認すると、まだ  
だれ一人やられていないようだった。

「援軍に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないよ  
うに周りを見て動け！」

おお！あれはDクラス代表の平賀君ではないか！？

「Dクラスの本隊だ！ついに動き出したぞ！」

Fクラスの誰かの声が聞こえる。

これでこの廊下には双方の主戦力が集まっていることになる。

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！他のメンバー  
は囲まれているやつを助けるんだ！」

『おおー！』

平賀君の号令のもと、あっという間に雄二と近くにいた明久の周りがDクラスメンバーに囲まれる。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱するんだ！」  
相変わらず雄二の声はよく通るな。

まあ確かにこれでは圧倒的に不利だ。ここは一度退くべきだろう。

「逃がすな！個人同士での戦いなら負けることはない！追い詰めて討ちとるんだ！」

「そうはさせないね！」

俺は雄二たちが逃げられるように、道を覆うように立つ。

「いくら「白銀の騎士」シルバーナイトと呼ばれている君でもこの人数差には勝てないだろう、

さっきの僕たちみたいな状況になるのに、いいのかい？」

平賀君は勝ち誇ったように言う。

「別にかまわないさ。俺は時間を稼げればいいんだからな、それにもう直応援が来るしな。」

「第一の腕輪共有Link」

これで、ダメージを受けた時のフィードバックは大きくなるが、扱いがかなり楽になる。

Dクラスごときの攻撃なんて、全く当たらないだろう。

「チツ！腕輪持ちなのか！？けどこの人数差なら関係ない。みんなかかれー！」

『サモン試獣召喚！』

『Dクラス生徒×5

V S

Fクラス 天咲

鋼侍

現国 512点(合計)

53

2点

』

「なっ！？何だその点数は！？僕らDクラス5人合わせたのより高いというのか？」

「それに応援に姫路もきてくれたみたいだしな」

『は？』皆こいつ何言っちゃってんの？みたいな顔をしている。

「あ、あの………」

そんな彼らの後ろから、平賀君に申し訳なさそうに肩を叩いた。

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下を通らなかつたと思っただけど」

姫路と平賀君の会話に呆気をとられていたDクラスの5人組を毒投げナイフで抹殺する。

「あ、あれ？みんなどうしたの？」

いつの間にかやられていた仲間を見て、言う。

「あ、あの！Dクラス平賀君にFクラスの姫路瑞希が現国で勝負を申し込めます。」

「え、えつと…….よろしくおねがいます」

「あ、こちらこそ」

「あの、えつと…….さ、サマシ試獣召喚です」

『Fクラス 姫路瑞希 VS Dクラス 平賀源二』

現代国語 339点

129点

』

「え？あ、あれ？」

戸惑いながらも召喚をする平賀君。俺には及ばないが、姫路の点数も相当だ。

まず勝負にならないだろう。

「し、ごめんなさいっ」

そういつて姫路は相手に反撃の隙も与えず一撃で勝ちこの戦争の幕を閉じた。



第八問（後書き）

またいつのまにか次の日になっていました。

はあ、最近寝不足だな。

## 第九問（前書き）

さてさて今日もがんばりますかね。

## 第九問

.....  
.....  
.....第九問.....  
.....  
.....

問 以下の問いに答えなさい

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『C?H?』

教師のコメント

簡単でしたかね

天咲鋼侍の答え

『C?H?』

解説 分子式C?H?、分子量78・11 独特の芳香を有する  
無色の揮発性液体ベンゾールともいう。

製法 工業的には、炭化水素の接触改質リフォーミングやクラッキングによって製造する。

実験室的にはヘキサンの接触水素添加により生じる。

教師のコメント

あなたはこうしてここまでの情報を知っているんですか？できれば教えてください。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B-E-N-Z-E-N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ！』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳

をつんざくような大音響が校舎内を

駆け巡った。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。あれはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛してます！」

「天咲は神の子だ！」

代表である雄二を褒め称える声がいたるところから聞こえてきた。

雄二の周りにはFクラスの皆が集まり、わいわいと騒ぎ合っている。

Dクラスはと言うと、補習から帰ってくるなり、みんな仲良くそろって膝をついていた。

あまりにもシユールな光景だった。

そんななかで俺は、明久探す。もしかしたらまた雄二を殺そうとす

るであろう。

まだ納得いってなかったみたいだしな。

おおっと、明久発見！顔はにこやかであるが、手には切れ味の良さ  
そうな包丁を持っている。

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

英雄扱いされて戸惑っている雄二に向かって一直線。明久は握手の  
つもりで、包丁を刺す気だろう。

顔は笑っているが、目が明らかにおかしい。まるで狂気につかれた  
ようになってる。

止めなくては！

「雄二！」

「ん？明久か」

まずい！このままでは雄二が死ぬ！なにか方法はないのか？・・・  
・・・そうだ！あれがあるじゃないか！

俺は明久たちに向かって全力疾走をして、そのまま勢いにまかせて  
ジャンプする。

「僕も雄二と握手w」ラ ダーキッーーーーーックウ！」が

「ばジャゴげ！ー！」

俺は明久の後頭部をドロップキックならぬライーキックで蹴り上げた。

雄二は俺がしようとしていたことが分かっていたのか、そのままするりと避ける。

明久は約5メートルぐらいぶっ飛んで、「がはあ」

そのまま廊下を跳ねるように跳んでいき、「ぎっぐっげっー！」2メートルほど廊下を滑って、止まった。

それでも執念なのか、握っている包丁は離していない。もつばればれなんだけどね。

「ナイスだ鋼侍。俺も包丁の存在に気づいてはいたが、

ここまで楽しく明久を屠ることはできなかった。礼を言わせてもらおう。」

雄二は俺に向かって前歯をキラん と光らせた。

よし、コイツも抹殺しよう

「雄二」

「どうしたんだ鋼侍？なんでそんなにうれしそうなんだ？」

おそらく俺の顔は、いままで生きてきた中で最もすがすがしい笑顔

をしていることだろう。

「死んじゃえ」

「は？つて「オラオラオラオラオララララララララララララッ  
—————」

アガガガガガガガガガガガガガガぐほっ……………  
」

俺は高速で雄二の身体の急所を連続で殴り続ける。ときどき口から  
血が出ていたような

気がするが、そんなことはおかまいなし、目の前にある「物」を壊  
すのみ。

バタリ！ふう……………またつまらぬ物を葬ってしまった。

「あ、あの話を始めないか？教室こととかあるだろうし……………  
」

俺は後ろにいる平賀君に向かってふりかえる。

「それにしても、まさか姫路さんがFクラスだなんて……………  
・信じられん」

「あ、その、さっきはすいません」

姫路はそんなことを言っているが、こんな話なんか眼中になく、



ただ死体となつている明久を見ているだけだった。

まあおそらく俺に蹴られたことは忘れているだろう。俺を見てくることはなかった。

「いや、謝ることはない。すべてはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ」

「ルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

しかし、俺は首を横に振った。

「え、今日じゃなきゃだめなのかい？」

「いや、クラスを明け渡す必要はないよ。Dクラスを奪う気なんかさらさらないからな。」

「え？どういうことだい。それじゃあそっちには何の利益もないだろっ？」

「俺らの目標はあくまでAクラスだ。そのためにもDクラスにはやつてもらいたいことがある」

「なんだ？俺たちは何をすればいいんだ？」

「大したことじゃないよ、俺か雄二が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい」

それだけで十分だ。」

俺はDクラスの窓の外に設置されたBクラスのエアコンの室外機を指差した。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師たちに睨まれることになるだろうが、

そう悪い取引じゃないだろう」

「それはこちらとしては願ってもみない提案だが、なぜそんなことを？」

それに代表の意見を無視してもいいのか。」

平賀君は床に転がっている、雄二の死体を見て言う。

「雄二のことに關しては大丈夫だ。俺と全く同じ意見だろうからな。

それにアレを壊すのは、次のBクラス戦のことを考えてのことだ。作戦に必要なだからな。」

「………そうか。ではこちらはありがたくその提案を呑ませてもらおう」

「タイミングについては後日詳しく雄二から話してもらってから、今日はもう帰っていいぞ」

「ああ、ありがとう。おまえらがAクラスに勝てるよう願ってるよ」

「ははっ。無理するんじゃない。どうせ勝てないと思ってるんだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

じゃあ、と手を挙げてDクラス代表、平賀君が去っていった。

「さて、みんな今日はご苦労さん。明日は今日の分の補給をする」とになると思うから、

家でゆっくり休んでくれ。じゃあ、解散！」

俺がそう言つと、皆雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めた。

帰りの支度をするんだろう。

「ふつつ慣れないことはするもんじゃないな……それにこいつら早く起きねえかな？」

俺は雄二と明久の頬を順番につついていく。

しかし、本当に死んでいるかのように動かない。大丈夫かこいつら？

「あ、あのっ、天咲君」

「ん？」

姫路がいきなり俺の名前を呼ぶ。何か用事でもあるんだろうか。

「姫路どうしたんだ？明久のことなら当分起きないぞ」

「実は、天咲君に聞きたいことがあるんです。」

「・・・わかった」

俺は姫路の後についていく、まあ十中八九、明久のことだろうがな。

「俺は一度またこいつらを起こしに行かなきゃならんから手短にお願いする」

そう言っつて姫路はいろいろなことを俺に語り、質問し始めた。

俺はそれを聞き、質問に答えてやった。

「、ということだ。俺の口から言えることはこれが限界だ。

多分、姫路の想像は

間違っていないと思うぞ」

「まあ話はこれぐらいにしよう。俺はあいつらを起こさなきゃならないからな。」

「あ、はい！さようなら！」

.....  
.....  
.....

さてさて、あいつらを起こさなきゃならないな。

俺はそう思いながら、二人の死体がある廊下を歩いていた。

「ん？明久がいない。いつのまにか復活していたのか。雄二は……  
・死んだままだな。」

包丁は先ほど俺がバックに入れたので、凶器はなかったようだ。雄二は無事である。

「おい、起きろ雄二！」

そういつて俺は雄二の頬を往復ビンタする。

「う、うん……んん？なんで俺はこんなところで寝てんだ？」

「さ、さあな、まあいいじゃないか。とりあえずお前が言いたかったことは俺が言っただけだからな」

これでBクラスとはやりやすくなるだろう。」

「ん、そうか。明久はどうした？」

「知らない内に消え去ってたよ。俺らもとりあえず帰ろうか。」

「そうだな。」

そういつて俺と雄二は帰路についた。

7

第九問（後書き）

今日もまだまだ書きますよ。

## おまけ（前書き）

最近寝不足なのでなんか意識が朦朧としています。

誤字があったら申しつけてください。

おねがいします。

ちょっとだけフラグも立ててみたり。



## おまけ

「コードネーム アヴェンジャー コードネーム アヴェンジャー  
応答せよ。」

「はいはい聞こえてますよそんなに何回も言わなくてもさ。

で、なにかわかったのか？」

今現在夜中の3時25分。俺は警察の暗殺部隊からの命令で、大量  
殺人を犯し、強制わいせつ行為の常習犯の

高岡 たかおか 守 まもる 『36歳独身 男 マフィアのボス』の暗殺を任されてい  
た。

学業もやって暗殺もやっての、とても大変な主人公なのさ

実際、このことは世間一般に公開されてないし、もちろん明久や雄  
二たちも知らない。

遺族や被害者には理由を説明し、暗殺部隊のことは世間に話さない  
ように言っているため、

その存在は政府の人間と、部隊に属する人しか知らない。

もし仮に知ってしまったとしたら、本人に脅しをかける。

他言してしまつたらその人は社会的抹殺を受けてしまうため、知っ

ていても話すことはできない。

それだけ政府の人間は俺たちの存在を隠したがっている。

まあ、銃社会じゃないはずの日本で普通に銃やナイフを持っているやつがいたらそれこそ問題だろう。

「Aポイントに高岡 守を発見。他のグループも集結しているため、手を出すのは困難であると推定。」

判断はそちらにまかせます。 帰還するのであれば、無線で言うてください。

仕掛けるのであれば、ターゲット以外は気絶させてください。殺すことは認めません。以上です」

「何人いるんだ？正確な数を教えてくれ。やられる心配は全くないが、

俺らは見つかった時点でアウトなんだ。それも考えてくれ。」

Aポイントというのは、街から外れた場所にある海辺の埋め立て地にある廃工場のことだ。

そこでは、入口が一つしかなく、柵も高いため侵入しづらい。まあ俺ならいけるけど。

しかし、どこも平たんなため、忍び寄ることはほぼ無理。結果的に射殺することになるだろうが、

おそらくボスは建物の中にいるので、船で近付くしか方法はない。  
まあ結果的に無理と判断。

だが、配置されている場所と人数さえわかれば少しは変わってくる。

「入口付近に3人、柵には存在せず、経路一つ一つに一人ずつ配置  
されています。」

工場の内部に、ターゲットとその付近に5人です。」

「工場の天井は何でできてる？」

「コンクリートです。窓が数カ所にありますけど、どれも小さいです。」

まああなたなら入れそうですね。」

ふむ、コンクリートか……それなら足音は鳴らないな。

「閃光弾の使用許可と、サイレンス式のスナイパーライフルの使用  
許可、あと近くに俺が逃げられるように」

バイクを置いていてくれ。」

「了解しました……承認完了です。『そ  
のかわり絶対に一回で成功させる』」

との命令です。」

「わかってる」

俺はそういつと、足音をたてずに助走をつけ、ジャンプする。

柵に脚を引っ掛け、ジャンプして音をたてないように屋根の上に乗っかる。

誰にも発見されることなく、屋根に上ることを成功させた。

「ふう・・・まず第一段階成功。ここからは慎重に行かなきゃならぬ  
い」

屋根の上は全体をみわたしやすい代わりに、見つかりやすいという、  
難点がある。

服装は黒なので発見されにくいだろうが、それでも見つかる時は見  
つかる。

俺は慎重に行動をし、窓のある場所を探しだす。

「あそこか」

俺は窓を見つけると、ロープを屋根の中心にある避雷針に絡ませて、  
少しずつ降下し、

窓の目の前まで行く。そこに聞き耳をたてて、中の様子がある程度  
想像する。

「で、良いんですよ」

「がね、また」

「ん？何かの取引をしているのか？」

「　　ですか。　　ですね。　　つてくれま　　」

俺は確認のため、窓をそつと開け中の様子を確認する。

何かの取引をしているのは当たっていたが、そこにいるものを見て俺は驚愕した。

‘人’である。そこに転がっていたのは‘人’だった。

それもよく見てみると、俺と同じ学校の文月学園の女子生徒だった。今は泣いているため目を閉じている。

俺はこのことから気持ちが早まってしまい、いつのまにか、身体が勝手に動いてしまっていた。

ポケットから閃光弾を取り出し、赤外線ゴーグルをはめ、スナイパーライフルを用意する。

閃光弾を相手に投げつけた瞬間、光が内部全体を襲う。

俺はゴーグルを付けているため、相手がどこにいたのか、まるでわかっていない。

まずターゲットから射殺。ピシユン、と小さな音をたてて、ターゲットの頭を撃ち抜く。

相手の目がくらんでいるうちに、内部に侵入。

取引相手とその周りの四人の後頭部をスナイパーライフルで殴りつけ気絶させる。

異変に気付いたやつらが何人か入ってくるが、もう一発閃光弾を投  
げること沈黙させ、

追加で、煙玉を投げる。

そのうちに、女生徒のロープをきり口のガムテープを剥がし、無理  
やり抱え上げ、

工場の窓を叩き割り、逃げ出す。

工場内から走って逃げだし、近くに置いてあったバイクに乗り込み、  
女生徒を無理やり乗せて、逃走に成功した。

しばらく逃げてから、俺は一応、本部に連絡を入れる。

「こちらアヴェンジャー、こちらアヴェンジャー、本部、応答せよ」

「なんですか？工場の中でドンパチしてくれちゃったアヴェンジャ  
ー君」

明らかに怒っている。まあ当然だろう、暗殺には成功しても、かなり  
危険なところまで追いこまれたのだから。ばれるかもしれないし。

それも人助けのためというところが一番ダメである。

「任務は成功したけど、これからはこんなふうにはいきませんから  
ね。次やったら仕事増やしますよ。」

「すみませんでした」

「ということ、今日はもう帰っていいよ。じゃあね」

プチ、プー プー プー

「ねええ、これはどうゆうことなの？」

無線での会話が終わると、後ろから声がかかってきた。

運転しながらなので、あまり後ろは向けないが、いったんゴーグルを外し、後ろをふりかえる。

そこには、何回か顔を合わせたことがあるだけだが、いくらか接点のある木下優子がいた。

「「えっ？」」

「木下……さん？Aクラスの木下優子さんですか？木下秀吉の姉の……。」

「……え、ええそうだけど。あなたは天咲鋼侍……？」

まさかのばれてはいけない人トップテンに入る人がそこにいた。

「あ、あははははははは……はあっ」

もう笑いしかこみ上げてこない。

「まさか（シルバーナイト白銀の騎士）がこんな危なっかしいことやってるなんて・・・」

「そんなこと言う前になんか言うことあるんじゃないかな？」

「あ、ああごめんなさい。助けてくれてありがとう。ほんとに死ぬかと思っただわ」

「死ぬかと思っただわと言ってる割には案外静かだな。ツウか怪我とかないか？」

「なんにもないわ。で、私はこれからどうすればいいのかしら？」

「ん？普通に家に帰ればいいだろう？俺が送ってってやるから道教えろ」

「へええ・・・いい度胸じゃない。こんな夜遅くに帰ってきて、それも男づれ」

「これを親や秀吉が見たらどうおもつかしら？」

「・・・家に来るか？」

「それも何だかまずいと思っただけど、こつこつってまず警察に連絡しない？」

俺はその答えに何も言えなくなってしまった。

「・・・実は俺・・・警察なんだわ・・・学生もやってのね」



「それってどういふこと？」

「そのまんまだよ。だから家に来るってことは警察が身元を預かっているのと同じ。」

それにお前は交番で寝泊まりしたいとおもつか？」

「……泊めてちょうだい。けどなんかしたら殺すわよ。」

「はいはい、わかりましたよお姫様」

そう言っただけで俺と木下は俺んちへの帰路に着いた。

「はあ、試召戦争やったばっかで眠いのになんでこんな面倒なことばかり」

そう愚痴った時間はすでに5時半だった。



おまけ（後書き）

なんかめちゃくちゃですが、

とりあえず木下優子と主人公をくつつけてみようとしたりしつつなりました。

めちゃくちゃな文章ですいません。

がんばりたいとおもいます。

**第十問（前書き）**

今回は問題を書きません

すいませんでした。

## 第十問

「さて、昨日（本当は今日）の出来事のせいで、俺たちは一睡もできなかつたわけで……」

「ZZZ……ZZZZ……ZZZ」

「……寝てやがるよ木下さん。俺の部屋で俺の愛しのエリーちゃん（ベッド）を奪って、

爆睡してやがりますよこのお姫様！」

正直怒りが頂点に達しそうな勢いだった。

昨日（今日）俺の暗殺対象に捕まっていた木下優子は、俺の家に泊まることになって、

警察に保護されているのと同じ状況になった。

本当はいろんなことを聞きださなければならぬのだが、さすがにかわいそうだと思い、

警察署にはいかず、俺が本部に適当なことを言った。

それで納得してくれたのか、向こうからの連絡はいつさいない。

そのことを話したら流石に緊張の糸が切れたのか、そのまま寝てしまった。

それも爆睡。遠慮という言葉はないのかとも言いたくなかったが、今はそんなことを言っている時間すらなかった。

現在、朝の8時、学校までは十分とかからない距離に俺の家（一軒家）はあるが、

まだ木下は爆睡したまんまだだったので、流石に焦ることになった。

「おい！木下起きろ。このままじゃあ遅刻するぞ！」

「まにやねみゆいに。もうすよしねかしえねによ」

おそらく、（まだ眠いの。もう少し寝かせてよ）と言ったのだろう。

いつも学校ではしっかりとしたイメージがあるので、これは完全にキャラ崩壊だな、とか思ってしまった。

俺は木下の耳元に顔を近づけ、Aクラスにとって屈辱的な言葉を言う。

「お前、遅刻とかしてるとく観察処分者>にされてFクラスまで急降下だぞ……」

それを言った瞬間、木下の目がパチリッ、と開き、

まるで時間の流れに逆らうような高速な動きをして起き上ったと思えば、

「天咲君なにやってるの！？遅刻するわよ！？」とか言って、すで

に玄関前で靴を履いていた。

ちゃんと身だしなみも整っていて、しわだらけだったはずの制服が新品のようにスツと

綺麗に伸びている。

目も泣き腫らした跡とクマがあつたのに、いまではもう絶好調ですと言わんばかりの目をしていた。

あれは人間業なのか？もはや神の領域である。

「……………わ、わかった。今すぐ行く」

考えても無駄だと思い、俺も学校へ行く準備をした。

- - -  
- - -  
- - -

「あと何分で鐘が鳴るんだ！？木下、時間わかるか？」

「うん……後三分よ！」

俺たちは今現在絶賛登校中である。

それも全力疾走で。

それも木下をお姫様だっこしながら。







キーン コーン カーン コーン

ドガツ！明久のぶつ飛ぶ音。ヒューン・・・明久が宙を舞っているところ。

パリーンツ・・・明久が窓に直撃し、窓が砕け散った音。ドゴツ！明久がベランダの柵にぶつかった

音。バタリツ！明久が崩れ落ちた音。ドクドクドク・・・明久から血が出る音。

ペタン・・・俺が膝をつき、手を廊下に当てた時の音。

いろんな音が俺の遅刻を祝ってくれていた。

「コッコッコ・・・」

教室内が沈黙で包まれた。

「うあー・・・づがれだー」

頭を包帯ぐるぐる巻きにした明久が机に突っ伏す。

とりあえず4教科の試験が終了した。

俺は別に受けなくてもよかったのだが、皆が受けていて、自分だけ

受けないのは不公平な気がしたので

俺も受けた。

「うむ、疲れたのう」

いつのまにか秀吉まで来ていた。おっ、今日はポニーテールにしてるな。俺と島田とおそろいだ。

明久はそんな秀吉を見て少しだけ顔を赤くしたと思ったら、首をブンブンと振り始めた。

自分に言い聞かせているんだろう。秀吉は男であると。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

いつも無口のムッツリーニもいる。

「よし、昼食を食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

雄二よ。お前の胃袋はいつたいどうなっているんだ？

まあこれで主要男子は全員そろったな。

「ん？吉井たちは食堂に行くの？だったら一緒に一緒にいい？」

「ああ、島田か。俺たちは別にかまわんぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうわね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

ムツツリーニがうなずいているのは下心のせいだろう。まあ脚の綺麗な島田を見るのも悪くはないな。

「天咲はウチをほめているような気がするけど、吉井。あんたはウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません」

あいかわらず恐ろしいほどの勘だな。

「じゃあ僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを」

「それってただの塩水だよな？英語で言ったって無駄だぞ明久」  
俺が突っ込む。

「確かに塩水じゃな」俺の意見に秀吉も同意する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・所詮水でしかない」ムツツリーニでさえも同意する。

「うわーん！姫路さん。みんなが僕のことを虐めるよお」

「え？え、え」と・・・・・・・・明久君を虐めちゃだめですよ」

「そうよ！虐めていいのはウチだけなんだから。」

そこに爆弾発言が投下されたが、しかし、誰も気づいていないよう

だ。

「え、えと、あの、お弁当の約束なんですけど……」

「そっだよ！今日は姫路さんが弁当を作ってくれる約束があったんだ！」

「そっだったな、ありがたうござい」

「そ、そうですか？よかったあ」

といった瞬間、俺や須川君たちが死神のような服を着て、明久を木で作った十字架に張り付ける。

「え、ええ何これ？どういことなの鋼侍！？」

「私は鋼侍などではない。FFF団団長の天咲だ、そしてこちらが副団長の須川だ……」

そこで俺は木槌をたたき言う。

「これより異端審問会を行う。罪状、被告 吉井明久は、女の子にお弁当を作ってもらったというFFF団

の血の盟約に背く行いをした。相違はないか？」

『ありません』FFF団の皆が言う。



「そうか。それならおまえらは先に行つてくれ」

「そうだ！ここで雄二についていけばある程度の時間死をまぬがれることができる！」

「ここでいかない手はない！」

「ん？雄二はどこかに行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「じゃあ俺もいっく」あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れな  
いでしょ？」・・・グスンッ」

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

思わず涙がこぼれてしまった。

「きちんと俺たちの分をとっておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

そういつて雄二と島田が教室から出て行った。

「さてと、ワシらも屋上に行くところか？」

ああ、始まってしまおうのか。死へのカウントダウンが……。  
屋上につくと晴天が俺らを包みこんでいた。ああ、これが天国への  
階段なんだね。

いろいろな準備を終えると、姫路が弁当を開けた。

『おおっ！！』

一応これには乗っておく。面倒事は御免だからな。

見た目は……うんかなり良い。うまそうだ。中身があんなのでは  
なければ。

「それじゃ雄二には悪いけど、先に」

「……………(ヒョイ)」

「あ、ずるいぞムツツリーニっ」

ああ、最初の戦死者はムツツリーニか。いままでありがとう戦友よ。

そして流れるように海老フライを口に運び

「……………(パク)」

バタン

ガタガタガタガタ



豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

秀吉と明久と顔を見あわせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路があわてて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

ムツツリーニが起き上った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・(グッ)」

そして、姫路に向けて親指を立てる。

多分、『凄く美味しいぞ』って伝えたいんだろう。ムツツリーニ、お前は男の中の男だよ!

「あ、お口に合いましたか?良かったですっ」

ムツツリーニの言いたいことが分かったのか、姫路が喜ぶ。

しかし、ムツツリーニの身体には明らかに異常が出ていた。

未だに足をプルプルさせている。まるでK.O寸前のボクサーのようだ。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

明久たちはムツツリー二の先ほどの様子から、姫路の弁当の危険性に気付き始めたのだろう。

食べるのをためらっている。

(秀吉、鋼侍。あれ、どう思う?)

姫路に聞こえないぐらいの小さな声で俺と秀吉に話しかけてくる。

(………どう考えても演技には見えん)

(だよ。ヤバイよね)

(俺は一応アレのことは知っていたんだがまさかここまでとは……)

(どういうこと)(じゃ)(?)

(俺が中学生のころ、校外学習で姫路たちがお弁当の見せあいっこをしててな、

そのとき、姫路の弁当を食ったやつがどんどん倒れて、終いには病院送りになったんだ)

(………どうして今の今まで言わなかったんだよ)(じゃ)(!)( )

(仕方ないだろう!あの笑顔をみて断れると思っっているのか!?)

(………無理だね)(じゃな)( )

(こうなったら雄二たちを待って、無理やり雄二に食べさせるしかない！)

二人とも手伝ってくれるか？)

(わかったよ)

(そうするしかないようじゃのう)

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」  
勝手に自滅してくれた。

「あつ、雄二」

止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク　　　　　　　　　　　　バタン　　　　　ガシャガシャン、ガタガタ  
ガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの！？」

遅れてやってきた島田が雄二に駆け寄る。

ムツリーニと同じ反応を見せた雄二は俺らに向かって目で訴えて

いた。

『毒を盛ったな』と。

『『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』』

俺と明久が目で返事をする。まあ伊達に親友やってないしな。これまでも何回かやってるし。

「あ、足が………攣ってな………」

姫路を傷つけないように雄二がフォローを入れる。優しいやつだな。

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りをしたからじゃないかな」

「うむそうじゃな」

「そうだぞ雄二ちゃんと運動はしておかなきゃ俺には勝てないぞ」

「そうなの？坂本ってこれ以上にないくらいに鍛えられてると思うけど、天咲はともかくとして」

事情のわかっていない島田が不思議そうな顔をする。

「ところで島田さん。その手についてるあたりにさ」

「ん？何？」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

まあ嘘だろっけどな、面倒なことを言い出さないようにしたんだろ  
う。良い判断だ。

「ええっ！？早く言ってよ！」

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方が良いよ」

「そうね、ちょっと行ってくる」

「なかなか食事に取りつけないでおるのう、島田は」

「「まっただな（だね）」

はっはっは、と男四人で朗らかに笑う。

一方その後ろで僕らは作戦会議を行っていた。

（明久、お前が逝け！）

（む、無理だよ！僕だったらきつと死んじゃう！それに漢字が違  
じゃないか！）

（流石にワシもさっきの姿を見てしまつては決意が鈍る……）

（雄二が逝きなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ）

（そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）

（俺もそう思うぞ）

(もう乙女心をわかってないな二人とも)

(いや、わかってないのはどちらかというとお前のことだと  
)

(行くよ！秀吉、鋼侍！)

(おう！)

「あつ！姫路さん、アレはなんだ!？」

明久が指した方向に姫路が向く、よしっ！今がチャンスだ！

(おらあつ！)

(もごああつ!！)

その隙に明久が弁当を口に流し込み、秀吉が顎を咀嚼し、俺が暴れないように、腕に関節技を決める。

「ふう、これでよし (じゃ) (だな)」「」

「ごめん、見間違いだつたよ」

「あ、そうだつたんですか」

あまりにも古典的な罠にかかってくれたことに感謝をした。

「お弁当おいしかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「うまかったぞ」

雄二の大活躍により、お弁当は無事処理完了。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』ってすごい勢いで

隅のほうで死にかけている雄二が力なくフルフルと首を振る。

「そうですかー。嬉しいですっ」

「う……………う……………あ、ありがとうな、姫路……………」

ヤバイ。目が虚ろだ。

「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が」

「ああ、あの店じゃな。確かに評判がいいな」

「え？そんな店があるんですか？」

「うん。今度今日のお礼に雄二が何かおごってくれるってな」

「てめ、勝手なこと言うな」

「なんか文句あんのか ーごらあ！」

俺がそう言って威嚇すると、

「すみませんでした、喜んでおごらせていただきます」

と言ってくれた。うんうん良い子は僕好きだよ。

姫路の弁当の話題からそらす作戦は成功したようだ。どうやら危惧した事態は避けられそうだ。

とりとめのない会話が続く、ほのぼのとした時間が過ぎてゆく。

「あ、そうでした」

姫路がポンっ、と手を打った。

「実はですね ー」

ーごそごそと、鞆を探る。

「デザートもあるんです。」

「チキチキじゃんけんたいかい ー じゃんけんが一番弱いのは誰？  
選手権！ー！」

俺はいつの間にかそんなことを叫んでいた。

『いえーいー！』



ドンドン パフパフ

皆も乗ってくれたみたいだありがたい。

「ルールは簡単。この中でじゃんけんに勝ったやつがどんどん抜けていき、

最後の二人になった瞬間終了だ。負けた二人はもちろん仲良くあれを食べるんだ、わかったな？」

俺は姫路に聞こえないように皆に忠告をする。

「いくぞ！最初はグー、じゃんけんポンッ！」

俺<sup>グー</sup> 雄二<sup>パー</sup> 秀吉<sup>グー</sup> ムツツリーニ（パー） 明久<sup>パー</sup>

………ま、負けた！

「だ、大丈夫じゃワシの胃袋はジャガイモの芽を食べても大丈夫だった」

『鉄の胃袋』を持ってるんじゃない？」

「死ぬしかないというのか」

きちんと姫路には聞こえないようにつぶやく。

「スプーンを使って食べてくださいね？」

俺と秀吉にスプーンが渡される。

俺たちはヨーグルトに果物をスライスして作ったと思われる液体に近いものを

恐る恐る口にくわえる。

「むぐむぐ、なんだ（じゃ）意外と普通だと（じゃと）ゴぼあっ！」「

そう言っつて俺と秀吉は夢く散った。

「……………雄二」

「……………なんだ？」

「……………さっきは無理やり食べさせてごめん」

「……………わかってくれたらいい」

「……………合掌」

俺が意識を保っていたのはこれまでが限界だった。



第十問（後書き）

FFF団は僕個人が好きだったのでだしてみました。

また何回か出てくると思いますので

その時はよろしく願います。

## 第十一問（前書き）

寝不足気味なので今日はおそらく

二回しか更新できません。

睡眠時間がないんです。

## 第十一問

問 以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good - better - best

bad - worse - worst  
』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest  
』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に -erや -estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太



「相手はBクラスなの？」

「ああ、そつだ」

昨日、雄二の代わりに言ったこと。Dクラスの窓の外に設置されている、

Bクラス専用エアコン室外機に用があることだ。

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう」

まあ言ってることは、理解できるが……

「正直に言おう」

雄二が急に神妙な顔つきになる。

「『どんな作戦でも、ウチに戦力じゃAクラスには勝てやしない』」

俺と雄二が声をそろえていう。

「どんなに俺が遠くから射撃しても、頭に当たらなければおそろく  
少しだけ点数が残ってしまう。」

まあ当てることは造作ないが、人数が多すぎる。俺が殺れるのは  
精々十人ぐらいだろう。

それに仮に、姫路が前線に行ったとしても、相手も姫路と同じく  
らしい点数なんだ。



集団で襲いかかられたら、必ず負ける。これだけは絶対に言えることだ。

また向こうにも十人ほど厄介な相手がいる。まず代表霧島翔子、久保利光、木下優子などだな。

それ以外にもいるけどまずこの三人が一番厄介だ。俺らじゃ絶対に倒すことはできない。」

俺が話に釘を刺しておく。

まあそうじゃないと逆におかしいんだけどな。

「鋼侍の言うとおりだ。しかし、最終目的は変えるつもりはない。

最後はAクラスだ。」

「どついつこと雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

「クラス単位では絶対に負ける。だから一騎討ちを挑むことにする」

「一騎討ちに？どつやって？」

「Bクラスを使う」

ここでも俺と雄二の声が被る。ホントにこいつとは良く息が合うな。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合は設備がどうなるか知っているな？」

「え？も、もちろん」

絶対わかってないなこいつ。

（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）

姫路が明久に耳打ちしている。やれやれだな。

「設備のランクを一つ落とされるんだよ」

「………まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

さっき姫路に教えてもらったやつが何を言うかと思えば。

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」 明久の爆弾発言。合っていると言えば合っているが、意味が違う。

「ムツツリーニ、ペンチ」

「いや、ここは俺に任せろ。再起不能にしてやる。」

俺が指をゴキゴキ鳴らすと、明久は顔を真っ青にした。

「ちょ、ちょっと待ってよ、僕はまだ死にたくない!!」

「相手クラスと設備が入れ替わっちゃうんですよ」

「またも、姫路がフォローを入れる。」

「ちっ、命拾いしたな明久」

「ありがとう、ホントにありがとう姫路さん」

明久は姫路にすがりついている。マザコンなダメな子とその母親にしか見えないな。

「吉井！あなたなにやってんのよ！瑞希が嫌がってるでしょ」

「え、え？いや、その……」

姫路は姫路で真っ赤になってるしな。

「まあ、コントはそれぐらいにして、そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」姫路は明久の頭をよしよし、となでながらしゃべっている。明久は幸せそうだな。

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。」

設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。

「まずうまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどね」

「じゃが問題もあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ち

よりも試召戦争のほうが確実であるのは確かじゃからな。それに

「

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるじゃろうか？こちらに姫路や鋼侍がいることは既に

「知れ渡ってることじゃろう？」

「それについては考えがある。俺はAクラスの霧島翔子と小学生からの

「幼馴染で、家も近かったから何回も遊んだことがある。それを利用していく。」

「それを言った瞬間、俺や、須川君たちが死神のような服に一瞬で着替え、

皆、鎌を持っていた。FFF団ここにあらわれる。

雄二は前回の明久と同じように、木でできた十字架に鎖で張り付けられている。

「うおっ！な、なんだこれは！？はずれねええ！」

俺が木槌を使ってコンツ、と机を叩く。

「これより異端審問会を行う。今回は臨時に吉井殿も入っているぞ。

さて始めよう。罪状、被告 坂本雄二は異端審問会の血の盟約にそむき、

女の子と幼稚園のころから仲良くし、今も仲が良いとの、許すまじき大罪を犯した。

相違はないな。」

『相違ありません！』

コンツ、と乾いた音が教室に鳴り響く。

「被告、言い残すことは？」

「なんで弁護の前に遺言を吐かなきゃならないんだ！？この野郎！外れやがれ！」

雄二は鎖をはずそうとするが、全く意味はなかった。



ため息交じりに俺が呟くように言う。

「失礼な！365度どっからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「二人なんて嫌いだっ」

そういつて明久は教室を飛び出していった。

「さて、明久も逝ったことじゃし、ワシらはここでゆっくりしてお  
くかの」

「秀吉」

俺は秀吉を呼ぶ。

「ん？なんじゃ鋼侍？」

「かなり重要な話がある」

俺はかなり真剣な顔で言ったことだろう。それが伝わってくれると  
いいんだが。

「……………わかったのじゃ。廊下か屋上で話さんか？」  
「……………じゃろっし」

「ありがとう、じゃあ屋上に行くぞ」

そう言っただけで俺と秀吉は教室をあとにした。

「さて、重要な話とはなんじゃ?」

秀吉が話を切り出してくれた正直ありがたい。

「お前の姉、木下優子のことなんだが……」

「お主まさか……姉上に惚れたのか?やめておくんじゃ!姉上は見かけによらず

ダメ人間なんじゃぞ。」

「そういう甘ったるい話じゃない」

「……どういことじゃ?」

「昨日、木下優子は家に帰ってこなかったよな」

秀吉は驚いたような顔をする。

「な、なぜ知ってるんじゃ?姉上に何かあったのじゃな!?」

「ああそうだ。お前の姉、木下優子は昨日、あるマフィアのボスに誘拐された。」

「っ!?!?どういことなんじゃ!?!?それになぜそんなことを鋼侍が知っておるんじゃ!?!?」



秀吉はわけがわからないといったふうに俺に質問を投げかけまくってくる。

俺は秀吉に落ち着くように言い、俺は胸ポケットからあるものを取りだす。

「?なんじゃこれは? (政府非公式暗殺部隊隊長 CN アヴェンジャー 天咲 鋼侍)

「ってこれは!?!」

秀吉は信じられないものを見るかのような目で俺を見てくる。

「それに書いてあると通りだ。そして文月学園2年F組 天咲 鋼侍でもある。」

「まあ両方本物なんだけどな。」

「しかし、これがなんだというのじゃ?これはつながってこないじやろ」

「俺はその木下優子を誘拐した犯人の暗殺を頼まれていたんだ。」

そこで、とらえられているお前の姉を救出し、同時に任務も終わった。

そのあとは、いったん木下優子を俺の家に泊めて、今日一緒に登校してきたわけだ」

「そうじゃったのか・・・いつものB.L雑誌を秋葉まで買いに行き、そのまま読んでしまい

ホテルに泊まって帰ってくるという話ではなかったんじゃない。」

俺はその話を聞いて、苦笑いをしてしまった。

「実質三日間は家に泊めてなければいけないんだが、俺が無理やり上の連中に

認証してもらったから、今日はもうそっちに帰すことになる。」

「すまんかったのう、姉上が世話になってしまったようじゃ。助けなくて礼を言わせてもらう。」

「いやそれに関しては別にかまわないさ、あと俺が暗殺部隊に所属していることは他言無用だ。」

これは絶対に守ってくれ。じゃないと面倒なことになる。」

「まさか、そんなことをワシがすると思うてるのか？大丈夫じゃ誰にも言わん」

俺はその言葉を聞いて安心した。

「そうか、ありがとうな。さてそろそろ明久が帰ってきてるだろう。行こうか秀吉」

「そうじゃのう。ぼこぼこにされた明久を見て笑うのもいいじゃろ」

俺と秀吉は談笑しながら教室に戻って行った。

## 第十一問（後書き）

なんかあまり進みませんでしたね。

次はオリジナルの話にしようと思います。

## おまけ 2 (前書き)

髪を切ってさっぱり

けど睡眠不足は変わらないTT

一応今日はこれが最後です。

おそろく。。。。。

## おまけ 2

「・・・・・・・・・・・・・・・・言いつきを聞こうか」

午後のテストが終了し、明久が一人でBクラスに宣戦布告をしてきた。

帰ってきたと思えば制服はボロボロ、顔は痣だらけ。髪はボサボサ、酷い状況だった。

「まあ、予想通りだな」

復活したばかりの雄二に先ほどこのことを話したら、「アイツは死んで帰ってくる」といった。

死んではないが、もはや死にかけの戦士にしか見えなかった。

「くきいー！殺す！殺しきるーっ！」

「落ち着け」

俺が顔面を、雄二が鳩尾を殴る。

「ぐふぁっ！」

明久が妙な悲鳴を上げ、崩れ落ちる。

「そついえば、前に俺が夕食作ってやるっていったよな？」

雄二、秀吉、ムッツリーニに島田、姫路 今日この後用事がなかつたら来ないか？

別に泊まってくれてもいいし」

あえてここで明久は省く。まあ理由はアレしかないが。

「俺は別にかまわんど。あとそれと翔子も連れてきていいか？」

「ん？どうしてだ？」

「……俺が殺される」

雄二はなにか恐ろしいものでも見るかのように遠い目をしていた。

「……了解だ」

「ワシは別にかまわんど。姉上も連れてくるが、いいかの？」

「ああ、構わないぞ」

あのこともあったので正直来てもらわないと困る。

「……行かせてもらっつ」

「ムッツリーニもOKか。あと姫路と島田は？」

「ウチは構わないし、天咲の料理も食べてみたいしね」

「わ、わたしも特に用事はないですし……」





「どうして僕のことを無視するの!？」

「早く来ないかのう。はやく鋼侍の家に行ってみたいものなのじゃが」

「ああ、俺たちまだ行ったことなかったな。どんな家なのか楽しみだ。」

「……………(コクコク)」

皆で明久のことを無視しようとする。理由はみんなアレ(姫路の弁当)のことだろう。

「ね、ねえ皆僕なんか悪いことした？」

「……………した」

「まあいい。来るんだったら飯の手伝いをしろ。あと、お前は何回か来たことあるんだから、

皆を案内しろ。待ち合わせ場所はそっちで決めてくれ。

泊まるんだったら、服とかが必要だからな。今日そのまま帰るやつは俺についてくれば良い。」

「……………」

「……………布団足りるよな……………?」



睡眠時間を削り、家を掃除している。始めはお手伝いさんがいたが、俺はその人達に他の仕事を

するよう勧めた。他の人に掃除されると、どうしても埃が少し残ってしまう。

家の中ぐらいは自分で掃除したいのだ。無駄にきれいになりすぎて逆に目立ってしまったが、

俺としては別にかまわないので、気にすることはない。

それよりも問題があった。

「このままでは俺がどこかのお坊ちゃまだと思われてしまう。それだけは絶対に避けなくては」

俺は家がでかいだけでお坊ちゃま視されるのが大っきらいだった。

もともと転生する前はアパートに住んでいたので、別に金持ちとかそういうのじゃなかった。

それどころか、少し貧しい一般人だったのだ。あまりいい気はしない。

親からの仕送りも、暗殺で稼いでる金もほとんど貯金をしている。

今、銀行には5億円の貯金がたまっていて、利子が半端じゃない。

まあほとんど暗殺で稼いだ金なんだがな。

しかし、俺にはもっと重要な問題があった。

「俺の癒し（ぬいぐるみ）たちをどうやって隠しきるかが一番の問題だ」

そう、俺は転生前からぬいぐるみが大好きだった。

それはもうベッドにはたくさんぬいぐるみが並んでいる。

幸い、木下が来たときは模様替えをしようと思っていたので、大丈夫だったが、

今現在は身体が勝手に動き、ぬいぐるみたちを並べている。

身体を止めようとしても反応はなく、どんどん自分の部屋がリフォームされていくのだった。

もはや本能の動きである。

ぬいぐるみをどこかにしまおうとすると、身体が突然痛み出し、発作が出る。

多分もう病気の一つとして捉えていいと思う。

「風呂入ろっかな。今日は姫路の弁当のせいで余計な冷や汗掻いちやったし。」

でもメールきたら面倒だしな……」

「バカも通せば男伊達 僕らの常識非常識？ ルールは無用さこ



見慣れた顔のほうが多いが、見慣れない顔も何人かいる。

しかし、そろいもそろって皆かなりでかめのバックを背負っている。

ここは修学旅行の宿じゃないんだけどな。

「へえー、君があシルバーナイトの（白銀の騎士）の天咲君かあ。

僕は工藤愛子だよ。今日はよろしくね」

まず始めに話しかけてきたのは、黄緑色のボーイッシュな髪をして、身体に凹凸の少ない

子だった。一見ぱつと見少年にも見えなくもない。

「………私は、坂本、翔子。今日はよろしく。」

次は黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女。物静かな雰囲気を保ち、整った容姿を持ち、

穢れを近づけないような神々しさを放っている子だった。

「ああ、二人ともよろしくな」

俺は二人と握手をする。

「おい、待て翔子。お前何気なく入籍してないか？」

雄二が霧島さんの腕をつかみ話しかける。確かにそうだな。

「……………大丈夫、あとで必ずこうなるから」

霧島さんは雄二に笑顔を放ちながらそう言った。

「待て！？俺の未来を勝手に変るんじゃない目、<sup>ブスッ</sup>目があああああああああああ！！！！！！！！！！」

霧島さんが雄二の目に指を突っ込み、それを食らった雄二が目をおさえて転げまわっている。

さすが霧島さん。原作どおり雄二一筋だな。

「さて、転げまわっている雄二はほつといて、中に入ってくれ。」

荷物は一番広い和室に置いていってくれ、案内する。」

俺は家の中に入り、皆が玄関で靴を脱ぎ終わるのを待っているうちに、スリッパを用意しておいた。

「皆入ったか？最後のやつは鍵を閉めてくれ。」

俺がそう指示すると、明久がドアのカギを閉めた。

「案内するぞ。皆付いてきてくれ。」

俺がそういつと、皆がぞろぞろと付いてくる。これ結構めんどくさいな。

そんなことを考えているうちに、この家で最も広い和室につき、皆





「なあ、明久。お前は何が食べたい？」

今俺たちは台所にいる。一般家庭からしたら考えられないぐらいの広さだが。

「うーんそうだね。カロリーの高いもの！」

「ああ、実にお前らしい答えだな明久。しかし、それじゃあ質問した意味がなくなってしまう。」

「じゃあ、うーん……そうだ、いつも鋼侍が夜食べてるものでいいんじゃない？」

それなら鋼侍も慣れてるはずだし簡単でしょ？」

もっともな意見が明久の口から出た。

「まあそうだな。よしそれにしよう。俺が魚をさばっていくから、明久は盛りつけていってくれ。」

あと味噌汁つくるから、それはお前に任せるぞ」

「わかったよ」

そうして順調に、料理は進んでいった。

「しかし、量が半端じゃないなこれ」

「そうだね。盛りつけていってる僕も疲れてきたよ。」

料理の大半は終わったが、それでも全員分終わったわけではないので、やらなければいけなかった。」

「明久、お前何人かに来てもらって料理を持って行ってもらえ。」

「じゃないと、魚が傷んできちまう。先に食っていいからとも言っとけよ」

魚は新鮮だからこそ美味しいわけで、傷んでしまっただけは元も子もない。

ただの生ごみである。

「・・・うんわかったよ。じゃあ行ってくる」

食べるものがなくなっていく様子を想像したのか、明久は少しへこんでいた。

そして、トボトボとした足取りで向かっていこうとする。

「明久」

「ん？まだなにかあるの？」

「あとでまたお前用に何か作ってやるから元気出せよ」

そういうと、明久の顔がみるみる明るくなっていく。

「わかったよ。鯛侍！じゃあいつてくるね！」





## おまけ 2 (後書き)

まだ少し続きそうです。

今日中におまけを終わらせたいと思います。

## おまけ 2 続き(前書き)

眠いけどがんばって書きます。

ーっだけエロい描写があるような気がしますが、そこは放置の方向で。

## おまけ 2 続き

俺と明久の二人で侘しいけど豪華な食事が終わり、

今は皆で楽しい雑談タイムだ。

ああ、人とのふれあいつてこんなにも温かいものだったんだな……。

「鋼侍、風呂はどこじゃ？ワシは入ってきておらんのじゃ。」

姉上のせいだな」

「あら？そんなこといっていいのかしら秀吉。あんたの腕が曲がらない方向に曲がるわよ」

「木下、家でそんなグロッキーなことをするのは止めてくれ。」

秀吉、俺も風呂に入るからついてきてくれ。

他の皆はどうする？風呂入るか？」

そういうと、明久とムツツリーニがピクツ、と動きを見せた。覗く気だなこいつら。

「私はもう入りましたから大丈夫です」 姫路

「ウチも入ってきたわ」 島田

「僕も入ってきたよ」 工藤

「私ももちろん入ったわ」 木下、つてお前、秀吉は入ってないのにお前だけ入ったのかよ!?

「……私も入った……雄二と」 霧島、つてお前、凄い爆弾発言だぞそれ。

「おい!翔子。俺はお前と風呂に入ったおb」

コンツ 俺が木槌を叩く音。

俺と明久とムツツリーニはFFF団の制服(黒いローブ)に着替え、鎌を持っていた。

「ま、まさかこの音は!?!」

そう雄二がいった瞬間、俺たちは雄二を木の十字架に鎖で縛り付けた。

「これより異端審問会を開く」

「ば、バカな!?!なんで証拠のないことでこんな目に逢わねばならんのだ!?!」

コンツ

「罪状、被告 坂本雄二は異端審問会の血の盟約に背き、

女の子と一緒に風呂に入り、乳繰り合うという大罪を犯した。





「ふんっ、馬鹿ばっか」

「まあいいや、うわっ雄二の血がかかったよ、早く行こうぜ  
秀吉」

「……わかったのじゃ」

そういつて俺と秀吉は部屋をあとにした。

.....

「なあ秀吉」

「なんじゃ、鋼侍」

「絶対これ覗かれてるよな」

「うむ、言われなくてもわかっておる」

俺と秀吉は現在洗いつこをしている。俺が今、秀吉の身体を洗っているところだ。

まあ明らかに男の体質じゃない気がするが、そこは気にしない方向で。

「あいつらから、鼻血をださせて見ないか？」

「ん？どうやってやるんじゃない？仮にもワシらは『男』じゃぞ。胸はないんじゃない。」

「自分で言うのもなんだが、俺たちの体つきは明らかに普通の男とは違う。」

「なぜだかわかるか？秀吉」

「顔……かのう？違うのか鋼侍？」

「まあ確かにそれもある。しかし、決定的に違う場所があるんだ。」

「それは……くびれだ」

おそらくムツツリーニや明久の視線はくびれに行ったことだろう。

「くびれ？た、確かにワシらにはあるな。しかし、それがどうしたというんじゃない？」

「普通人間は異性を見るとき、自分にはないものを見て興奮するんだ。」

男子なら女子の胸、香り、腰のくびれ、顔、太ももなどを見る。

男子は身体がどちらかという骨ばっていて、筋肉が付きやすいため、身体は逞しく見える。

しかし、女子の場合はどちらかという脂肪のほつが多く、身体が細く見える。

俺らは完全に後者のほうに属していることになる。

そんな俺たちが乳繰り合って、顔を赤くして、高くて女みたいな声を出したらどうなるか……

もちろんわかるよな」

俺は秀吉に向かってにやりと笑う。

「そういうことじゃったらワシも力を貸そう。いつもワシを女のよ  
うに扱うあの二人に

仕返ししてやるのじゃ。」

「じゃあ作戦開始だ。」

「わかったのじゃ」

俺たちは湯船の中に入り、わざとチラリズムを作るようにする。

「それにしても秀吉の肌って綺麗だよな。なんかこうすべすべして  
て」

俺は秀吉の鳩尾辺りを優しく指でなぞる。

そう言った瞬間、入口側に赤いものが見えた。第1段階は成功した。  
おそらくムツツリー二だろつ。

「きゃっ！何をするんじゃ鑑侍！ならこっちもお返しじゃ！」

秀吉は顔を赤くしながら俺に向かってくる。や、やばい、なんか俺一瞬ときめいたような……。

秀吉は俺の首筋を優しく滑るように指で撫でまわした。く、くう！これはまずい……

俺が変な方向に目覚めそうだ。

「んんっ！はあっはあっ……止めるよ秀吉。変な声が出ちまったじゃないか！」

俺がそういつた瞬間、赤いものが二つほど見えるようになった。片方はかなりの量だ。

死ぬんじゃないか？

俺は奴らにトドメをさすために、秀吉の耳たぶを甘噛みをした。

「あ！んんっ！そ、そこはあんまり強くないのじゃ！やめて！」

そう秀吉が言った瞬間、入口付近から、ブシャーッ、と音がした。水漏れか？いや奴らだろう。

「ふうっ、討伐成功だ秀吉。ちょっとやりすぎたような気がするが……」

「はあっはあっ、そ、そうじゃな……これで一矢報いたようじゃな……」

秀吉を確認してみると、顔が真っ赤になったままだ。耳まで赤くな

っている。

「大丈夫か秀吉？顔が真っ赤だぞ」

「大丈夫じゃないんじゃないかよこれが、あつやく変な方向へ目覚めるとこじゃったぞ！」

「じ、実は俺もなんだけどな」

俺と秀吉は息を乱しながらも、倒れている二人を見る。

「これ、死ぬんじゃないかな？明久はまだ貧血レベルだけど、ムツツリーニは失血死しそうだよ」

「とりあえず、この二人をここからだすんじゃない。ムツツリーニが輸血パックを持つてるはずじゃから、

それで応急処置をするんじゃない。」

「了解した」

そういつて俺と秀吉のお風呂の時間は終了した。

なんかエロかった気がするが、そこは放置しておこう。

.....  
.....  
.....

風呂からあがり、明久とムツツリーニの応急処理を終えると、

俺と秀吉は皆のいる和室へ向かった。

「だれもおらんようじゃのう」

「一体どこいったんだ？あいつら……ま、まさか！？」

俺は猛ダツシユで自分の部屋へと向かう。

まずい、まずいぞこれは！？

ばれてしまったら一巻の終わりだ！

「お、おい。待つんじゃ鋼侍！」

後ろからなんか秀吉が呼んでいるが、そんなことは気にしない。

ただただ自分の部屋へと向かうだけ。

俺は自分の部屋にたどり着く。扉の前には鋼侍の部屋と書いてあるので丸わかりだろう。

俺は自分の部屋の扉を開けはなつた。

バンツ！

扉を開いた瞬間、目の前には和室にいるはずだった、みんなの姿が見えた。

ペタンツ、俺は膝をついた。

「おお、鋼侍じゃないか。お前ってけっこうかわいい趣味してんだな。」

「ねえ天咲君！僕このぬいぐるみ気に入ったんだけどもらっちゃダメかな？」

「……………なかなかかわいい趣味をしている」

「そんなに落ち込むことじゃないですよ、天咲君、誰だって隠したいことはあるんですから」

「そうよ天咲。別にこういうの持ってたっていいじゃない。かわいいと思うけどなウチは」

ああっ！なんとということだ！俺の・俺の・俺のキャラがあああああああ！！！！！！

「もうだめだ……死のう・俺なんか死んじゃえばいいんだ……そうだよ死ねばいいんだ……」

アハハハハハハハハハハ！！！！

「まずいぞ！？このままじゃあ鋼侍が自殺しちゃう！みんなで鋼侍の動きを封じるんだ！！！！」

「わ、わかったわ！！このままじゃまずいもの！！」

「ああもう！なんでこんなことになるの！？わかったわよ！私も手伝うわ！！」



「……私も手伝う。せつかくできた友達に死んでほしくない」

「わ、わわわ、ど、どうすればいいんでしょうか？」

「鋼侍！？大丈夫か？ワシも手伝うぞ」

そうやって俺は6人の力によって自殺をあきらめることになった。

「うつつ……みんな笑わないの？」

俺は涙目で皆を見つめる。さぞかし格好悪いことだろう。

「大丈夫だ鋼侍。別に俺らは笑わないぞ」

「僕もわらわないよ」

「別に笑うことなんかないでしょう？しゃきつとしなさいよ」

「そうよ、特に悪いことなんて何もないんだから」

「そうですよ天咲君、かぁいいじゃないですか」

「そうじゃぞ、別にいいではないか」

「うん……わかったよ。みんなありがとう！」

俺はありったけの笑顔をみんなに向けた。

そのあと皆の顔を見たら、皆して赤くなっただけとどうしてだろうな？

「さて、もう夜も遅いしねるとするか！」

そう雄二が切り出してくれた。

『うんっ！』

皆でそう返事をして、和室に向かい、軽く談笑してから寝た。

うん。今日1日充実した日だったな。

二人をのぞいて……………。



## おまけ 2 続き（後書き）

なんか滅茶苦茶ですけどおまけを書いてみました。

次は本編に戻ってBクラス戦のとちゅうまで書きます。

こんな糞小説を読んでくださってありがとうございます。

できれば感想も送ってほしいです。

## 第十二問（前書き）

さて、今日も頑張っていきましょう！

始めのほうは、おまけ2の続きです。

## 第十二問

昨日はいろいろあつて疲れたが、俺は家の掃除のため早起している。

現在時刻は午前4時、寝たのは12時ぐらいだから4時間ほどしか眠っていない。

最近、睡眠時間が著しく低下しているのは気のせいだろうか？

俺は皆を起こさないように、掃除機を使わず、はたきと雑巾である程度の掃除をした。

そして終わったのが現在の5時だ。普通の人なら何時間とかかるところを、

無駄なく、しかもあり得ないぐらいのスピードでこなしていったため、

そんなに時間がかからなかった。

そろそろ起きているやつがいるだろうと思い、俺は和室に向かった。

そっと、引き戸を開けると、そこにはカメラの整備をしているムツツリーニの姿があった。

「……………(ダラダラダラダラ)」

鼻血を流しながら、写真のでき具合を調べている。ここまでしてや

ることか？

俺はそつとムツツリー二に近付き小さな声で声をかける。

(何鼻血流しながら、カメラの整備してんだよ)

(……………これを見ればわかる)

そついつて俺にカメラを渡してくる。ん？どれどれ？

『パンチラバージョン  
姫路の寝顔』

『木下と島田が向かい合つて寝ている写真』へソチラバージョン

『工藤の寝姿(へソチラパンチラ両方バージョン)』

『パンチラバージョン  
霧島の寝顔』

(……………どうやってたらこんなアングルで撮れるんだ) 永遠の謎である。

(……………マニアックな人用、又は島田、姫路、久保用にこんなのも撮つてある)

『明久の寝顔(よだれ垂らしバージョン)』

『明久の寝顔(幸せそうな顔バージョン)』

『明久の寝顔(なぜか泣いているバージョン)』

‘秀吉の寝顔’ などなど他多数。

(・・・実を言うところの明久たちの写真のほうが高値で取引できる)

まあ、あの三人がいれば、いくらでも買い取ってくれるだろう。

それに、秀吉の写真はバカみたいに売れる。女の姉より売れるってどういうことだよとか思う・・・。

(・・・最後はトップシークレット)

(ん？期待していいってことか？それは楽しみだ)

そして俺は最後の画像をプレビューする。そこにあったのは・・・！

‘俺と秀吉が、風呂で顔を赤くしながら絡み合ってる写真’

(・・・(グッ))

ムツツリーニは俺に向かってグッドサインをしてくる。

・・・さあて、どうやって焼却炉にこいつ(ムツツリーニ)を持っていくのか？

ムツツリーニは身の危険を感じ取ったのか、身体をこわばらせて俺から遠ざかってゆく。

顔を振っていやいやしているが、俺はどんどんムツツリーニとの距離を縮めていく。





耐えられる」

もしかしたらこのメンバーの中で俺の次に強いのは雄二ではなく、ムツツリー二なのかもしれないな。

俺はここで負けを認めることにして、ムツツリー二に近付いていく。

「完敗だよムツツリー二……その写真は好きにすればいいさ。俺はもう何も言わん」

俺はムツツリー二に握手を求めた。

「……ありがとう。がっぱり稼がせてもらっつ。」

ここに俺とムツツリー二の親友宣言？が成された。

「ねえ……あなたたち……」

声のしたほうを向いてみると、修羅のような顔をした、木下が立っていた。

周りのみんなも、さっきの轟音で目が覚めたようだ。

みんなにも少なからず怒っている様子が見える。

あ、あれ？これって、も、もしかしてもものすごい勢いで死亡フラグじゃない？

ここで選択肢発動!？



「さて、皆、総合科目テストごころうだった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて、皆の方向を見ている。

「ってあれ？いつのまにテスト終わったの？俺受けてないんだけど！？」

さっきまで死んでいたせいで、今日のテストは受けられなかったみたいだ。

まあ点数は減ってなかったから大丈夫なだけだな。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

相変わらずモチベーション高いな。まあこれが俺らの最大の武器と言っていていいだろう。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要となる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は

絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで前線部隊には姫路と天咲に行ってもらい、その二人に指揮を任せる。

野郎ども、きつちり死んでこい！」

「が、がんばります」

男のノリについていけない姫路は、若干引きながらも一步前に出た。

俺も身体中にある包帯をすべてほどき、一步前に出る。

『うおおーっ！』

一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしていた。

今回は廊下での戦いに勝たなければ話にならないから、

Fクラスの50人中40人を送り込むことになった。

まあかなりの犠牲は出るだろうが、絶対に負けることはないだろう。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響く。いよいよBクラス戦の開始だ。

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

俺らは全力でBクラスへと向かう廊下をかけた。

しかし、それにしても腹減ったな……朝昼何も食ってねーや。

<観察処分者>の召喚獣は、その召喚主の身体の状態や、心境がそのまま出てしまう。

そのぶん、こっちも疲れるし、召喚獣も疲れてしまう。

どんなに点数が高くて、へろへろだったら意味がないということだ。

今回のこちらの主武器は数学。Bクラスは比較的に入試系が多く、なぜか長谷川先生の召喚可能範囲は

広い。そのため、一気に勝負をかけたいときにはありがたい先生なのだ。

他にも英語のライディングの山田先生と物理の山田先生もいる。

立会いの先生を多くして一気に駆け抜ける。

俺は比較的に入試系で、英語、化学、物理、数学、英語が得意である。他にも現代国語も得意である。

今回は、比較的に入試系で戦えることになる。腹が減ってさえないなれば。

「いたぞ、Bクラスだ」

「高橋先生を連れてくるぞ！」

正面を見ると、向こうからゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる姿があった。

人数は十人程度。あくまで様子見といったところか。

「生かして帰すなーっ！」

物騒なセリフが皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男 VS Fクラス 近藤吉宗』

総合 1943点 764点

ほう？なかなかの数字だな。まずFクラスの点数じゃ敵わないな。

『Bクラス 金田一裕子 VS Fクラス 武藤啓太』

数学 159点 69点

『Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博』

物理 152点 77点

圧倒的な戦力差に第一陣がごとくやられていく。止めを刺される前にフォローしないと

戦力が激減してしまう。

「仕方ない！俺が出るぞ！！」

「来たぞ！天咲鋼侍だ！」

Bクラスの誰かが叫んだ。ちっ！俺の情報はやっぱり持ってやがったか。完全に警戒されてやがる。

声を聞き、Bクラスの連中の目つきが変わる。まあ警戒しても結果は変わらないが。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラスの天咲鋼次君に『  
試獣召喚！！』  
サモン

つてえ？」

「第一の腕輪共鳴Link、

つづいて第二の腕輪—NO restriction in te  
reference《制限のない干渉》！」

俺は二つの腕輪を同時に開放する。

『Bクラス

岩下律子&菊入真由美

VS

Fクラス



天咲鋼侍

数学	189点&151点	602
点	『	

「どうしていきなり戦闘になってるの！？それになんで二つも腕輪を持ってるとよー！」

「私までまきこまれちゃったじゃない！？どうして先生に言う前に戦闘が始まるのよー！」

いまさら言うが、実を言うところの第二の腕輪はけっこう便利だったりする。

先生にいちいち言わなくても、召喚可能範囲内にいればいつでも召喚ができて、

同時に何人もの相手と強制的に戦闘することが可能だ。

まあ第一の腕輪は、もともと<観察処分者>じゃない人用のものだけど、

<観察処分者>つけると、精度が格段に上がって、そのかわりにフールドバックが大きくなる。

どちらも戦闘を一瞬で終わりたいときにはもってこいの代物なのだ。

まあ説明はこれぐらいにして、っど。

「しゃよ〜なりや〜」

俺はそういうと、俺の召喚獣のポケットの中に入っているナイフを相手の召喚獣に向かって投げた。

ぷすっぷすっ。二人の召喚獣の頭にナイフが突き刺さり、同時に0点になる。

「きゃああ!!」

「まあこれも勝負だからな。怨むなよ」

そういつてBクラスの連中に近付く。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ!」

「な!そんなバカな!?!」

「天咲鋼侍、噂以上に危険な相手だ!」

Bクラスの連中が吠える吠える。いや〜見ていて楽しいねこれ。

「す、すみま・・・せん・・・お、遅れ、ました」

後ろから息をきらした姫路がやってきた。

「よし、姫路。悪いけどお前の力を借りるぞ。一気にたたみかける

」!

「は、はい!」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚」

姫路はそう言っつて、自分の召喚獣を召喚した。腕には一つだけ腕輪が付いている。

「ほう？姫路も腕輪持ちか。ただし今回はそれは使わなくていいからな」

「わかりました」

「ま、まずいぞ！？あの二人が来る！！」

Bクラスの一人が召喚可能範囲から逃げようとする、が。

「あ、あれ？でれないぞ！？どうなってやがる！！」

『Bクラス 八人 VS Fクラス 天咲鋼侍 & 姫路瑞希』

数学 合計1026点 602点  
& 412点 『』

「俺が5人引き受けるから、姫路は後の三人を頼む！」

「わ、わかりました」

俺の召喚獣がナイフをまず二本投げて、二人を戦闘不能にする。

残った三人は肉弾戦に持ち込み、ポケットからナイフを取り出し、

胸に突き刺す。

姫路のほうは大剣を振り回し、力でなぎ倒していた。

「よし、視察兵は全滅だ。第一陣はいったん回復試験を受けて来い

中堅部隊はBクラスの連中をよくみておけ」

『わかりました！天咲將軍！』

『この命に代えましても！その命、果たさせていただきます！』

『姫路さん愛してます！』

「よし！最後の以外は良い返事だ。さっそく行動に移れ」

俺がそういうとFクラスのみんなが自分たちのするべきことを行い始めた。

「明久、鋼侍、ワシらは教室に戻るぞ」

「ああ、わかってる」

「ん？どうして二人とも」

明久は何のことかわかっていないようだ。

「Bクラスの代表はあの根元恭二だ」

「え？根元って評判が悪いことで有名なあの根元？」

「そうだ」

根元恭二は評判が悪いことで有名で、カンニング常習犯、喧嘩には刃物が当然装備など他にも

たくさんのことについての噂がある。

「なるほど、戻ったほうがよさそうだね」

「雄二に何かあるとは思えんが、念のためにもの」

そうして俺たちは姫路に一言言ってから教室に戻って行った。



## 第十二問（後書き）

今日はもう一つ書きます。

なかなかBクラス戦は終わりそうにないです。

第十三問（前書き）

頑張ります。





天咲鋼侍の答え

『百合』

教師のコメント

……っは！一瞬君がそっちのほうへ目覚めてしまったのかと  
思いました。

変なことを言ってますみませんでした。実は私、そういうのに興味が  
あつたりなかつたり……。

- - -  
- - -  
- - -

「……うわ、こりゃひどい」

「まさかこつくとのはのう」

「卑怯、だね」

「……」

俺らを迎えたのは、穴だらけになった卓袱台、引き裂かれた座布団、  
折れたシャーペン、

屑になった消しゴムだった。

「酷いね、これじゃあ補給ができないよ」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「……………」

「あまり気にするな。修復には時間がかかるが、作戦に大きな支障はない」

「雄二がそう言うならいいけど」

「……………」

「どうしたんじゃ？鋼侍、さっきからだんまりして」

周りから見たらどう考えてもおかしいだろう。

いつも騒いでいるようなやつが、いきなりだんまりしているんだ。

「い、いや……………なんでもない」

俺は言葉を濁しながら言う。

「それはそうと、どうして雄二は教室がこんなになっているのが付かなかったの？」

まあ確かに昼休みまでこんなふうになってなかったから、戦闘開始から今までの間に実行された

嫌がらせだろう。ずっと教室にいた雄二が気づかないわけがない。

「協定を結びたいとの申し出があつてな。調印のために教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。4時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。」

その間は試召戦争に関する事柄の一切を禁じるつてな。」

「それ、承諾したの」

「そつだ」

「雄二、それはFクラス全体にとっては確かに好条件かもしれない。

でも何か臭わないか？絶対にこれには裏がある。俺たちを陥れるような何かがな」

正直ここまでこっちに有利な点多すぎると、何かがおかしいような気がするんだ。

それに、相手の代表は根元だ。絶対に何か仕掛けてくるはず。

「それは考えすぎだ鋼侍。確かにこんなことやってきたあいつらのことだから、」

また何か小細工をしてくることは確かだろう。

しかし、それ以上にこの条件は俺らにとっていいんだ。結ばない手はないだろう?」

確かに雄二の考えにも一理ある。考えすぎなのかもしれないが、それでもやはり警戒しておくべき

だと俺は思った。

「今日はBクラスの連中を教室に押し込んだら終わりになるだろう。

今回は鋼侍と姫路が十人も片づけてくれたから、ある程度までは攻め込める。」

しかし、どうしても決定打に欠けるから、本番は明日になるだろう。

その時は姫路と鋼侍の個人の戦闘力のほうが重要になる」

「簡単に言うと、雄二は姫路さんが万全の状態で勝負できるようにしたいんだね」

「まあそついうことだ。何度も言うがこの協定は俺らにとってかなり都合がいい。」

まあ、まず皆が回復試験を受けられるよう、鉛筆と消しゴムの補給が先だな。

「明久、とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうで何かされて

いるかもしれん」

そういうと、秀吉は駆け足で教室を去って行った。

「俺は雄二と一緒にシャーペンと消しゴムを補給しておくから、明久は行ってくれ」

「ん。わかったよ」

そういつて明久も前線に戻って行った。

「さて雄二、俺は少しやらなきゃならないことがある。補給は雄二に任せるからな。」

金が足りなくなったら俺に行ってくれ。」

俺は真剣な顔で雄二に言う。

「……………なにかあるのか？」

もっともな質問だ。だが……………

「それは言えない。かなりまずいんでな」

「……………わかった。補給は俺に任せる。明日にはすべてそろえておく」

俺は精いっぱい笑顔を向けた。

「ありがとう……………またあとで会おう」

俺はそう言っただけで教室を後にした。

明久 side

僕は教室をでて、すぐに秀吉の姿を発見することができ、追いついた。

「なんか、まだまだ色々やってきそうだね」

「そうじゃな。鋼侍の言う通りこの程度で終わると思えん。気を引き締めたほうがよさそうじゃ」

次はどんな姑息な手段で来るのだろうか。全く、そっちのほうが戦力が上なんだから、

正面から来てくれてもいいのに。

っと、そろそろ戦場が見えてきた。

「ではくれぐれも用心するんじゃぞ!」

「秀吉もね!」

互いに警告し合い、それぞれの部隊に戻る。

「吉井!戻ってきたか!」

出迎えてくれたのは須川君。あれ？部隊は島田さんが指揮をとっているんじゃないんだ。

「待たせたね！戦況は？」

「かなりマズいことになってる」

「え！？どうして！？」

向こうから本隊が来たわけでもないし、戦力としては負けるはずないんだけど、どうしてだろ？

「島田が人質にとられた」

「な！？」

今度は人質か！卑怯な手段の王道じゃないか！

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

現在、僕の部隊はそのせいで敵と睨みあいになっているらしい。

「……………そうだね。とりあえず状況を見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川君が前を歩き、僕が後に続く。

僕の部隊の人垣を抜けると、そこには須川君の言とおりの二人のB



クラス生徒と捕らえられた

島田さん及び召喚獣の姿があった。

そして、そばには補習担当講師もいる。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

何だかドラマみたいだ。

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣にトドメを刺して、

この女を補修室送りにしてやるぞ！」

島田さんを捕らえている敵の一人が僕を牽制してくる。

そうか。数少ないウチの女子を戦死させるわけではなく、人質にとつて補修室送りをちらつかせ、

こちらの士気を挫く作戦か。うまいやり方だ。

けどちょっともうひとひねり足りないな、この作戦には決定的な穴がある。

「総員突撃準備いーっ！」

「隊長それでいいのか！？」

この奇襲がかかったらまず相手は戸惑うだろう。

敵だからといって女子をやるのも気が引けるだろうし、正直人質の意味はない。

「ま、待て、吉井！」

敵から待ったコールがかかる」。往生際が悪いな。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

そんなの簡単だろう？誰だってわかることじゃないか。この人たちバカなのかな？

「馬鹿だから」

これ以外どう探ったってないだろう。実にFクラスらしい答えだ

「殺すわよ」

え？何？どうして人質にされてる島田さんに僕が気圧されているの？

「コイツ、お前が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

なんだって!？

「島田さん」

島田さんの顔は心なしか赤い。

「怪我した僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよー！」

恐ろしい。これじゃオチオチ保健室で昼寝もしてられない。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？これでも心配したんだからね！」

え．．．．．？

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ぷいっと顔を背ける島田さん。

コンッ！

え？え？ま、まさかこの音は！？

「これより異端審問会を開く」

「ってやっぱり！？どうしていつの間にか僕は木の十字架に磔にされてるの！？」

コンッ！

「罪状、被告吉井明久は、数少ないFクラスの女子、島田美波に心

配をされ、保健室まで

向かわせるといふ、完全に好意のある行動をとらせた。

これは異端審問会の総勢も考えもしなかった事実だ。これは重大な罪である。

被告何か言い残すことは

「やっぱり弁護の前に遺言なんだね！？どうして僕がこんな目に！？」

「有罪！死刑っ！！」

「敵が目の前にいるのにどうして僕がああああああああああああああああああ！！！！！！！」

そうして僕は一時戦闘不能になった。

「さて、Bクラスのお二人、島田さんに余計なことを言わせてくれたね？」

須川君がBクラスの二人に威嚇をすると、そこにいるFクラスのみんなも威嚇をした。

「「ひ、ひいつ！！！」」

僕がぼこぼこにされるのを見て、腰を抜かしたのだらう。完全に怖がっている。

「もちろん、貴様らにも罪がある。ここは補修室に行ってもらおうか」

「な、何を、こつちには人質がいるんだぞ！こいつがどうなっても・  
・・」

「総員かかれええーっ！！」

黒いローブを着た召喚獣集団が二人の召喚獣に襲いかかる。

『Bクラス      鈴木二郎 & 吉田卓夫      VS      FFF団      たく  
さん』

英語W      33点 & 18点      50点 ~ 60

点台がたくさん』

「「そんなのアリかよ!?!」」

「「う、うわああああああああああああああああああ」」

二人の断末魔の叫びが聞こえた。

そのあとの記憶はない。そのまま気絶しちゃったみたいだ。

廊下戦 Fクラス WIN!!



第十三問（後書き）

夜中もう一つ書こうと思いますが、わかりません。

もしかしたら明日の朝か昼になるかもしれない。

第十四問（前書き）

もうほとんど書くことないや。

できればご感想お願いします。





天咲鋼侍の答え

『Engel coefficient』

教師のコメント

なぜ君はこうやって英語で答えることが多いんですか？

あってはいますけどね。

「さて、どういふことが説明してもらおうか？根元」

「どういふこともクソもないだろう？メールに書いてあつたらう？」

俺はお前たちに脅しをかけてるんだ」

今俺が、根元と話している場所は新校舎側の階段の中二階だ。

ここは、AクラスやBクラスなどの上位クラスの間しか通らないため、

Fクラスの間なんてだれ一人いない。今ここに俺を除いて。

先ほど根元が言っていたメールの内容はこれだ。

TO 根元

sub 無題

本文 お前の面白い証明書と、姫路瑞希のラブレターは俺が持つてる。

あの女のはともかく、お前のこれは知れ渡ったらずいんだろっ？

条件付きで返してやるから、新校舎側の中二階の階段まで来いよ。

ただし、お前一人でだ。他のやつが来たのなら、そいつにコレのことばらすぞ？

といった具合のメールが、Bクラスの十人を倒しているときに来た。俺は約束通り、誰も連れてこないで一人で来たわけだ。罨だとわかっていてもな。

「相変わらず、ウジ虫みたいなことしやがるなお前は。

俺は昔、お前に忠告したはずなんだがな」

俺は嫌味をこめて根元に言う。

「ふんっ！そのウジ虫の作戦にまんまと引っ掛かるやつは一体何なんだ？」

世の中ズル賢いやつが生き残っていくんだよ！お前みたいなのはいつまでたつても

下っ端のままだろうがな。政府非公式暗殺部隊隊長 コードネーム アヴェンジャー君」

根元は俺に向かって証明書をひらひらとさせながらニヤニヤ笑っている。

俺はその行動に本気で腹を立てそうになったが、

文月学園の生徒をその手にかけてはいけないという、鉄人 西村先生との約束を思い出し、

手をかけなかった。

「まあそのことはいい。俺がお前をここに呼んだのは、ある条件を出すためだ」

「条件……だど？」

なにか罠があるのかと思えば、ただ条件を言うだけだった。

しかし、その条件を聞かない限り、なにもわからない。俺はとりあえず聞き返す。

「なに、簡単なことだよ。今回の試召戦争でお前と姫路が手を引けばいい。簡単だろ?」

「な!?!」

この条件が通ってしまったら、雄一の作戦は根っから立て直さなければいけない。

この条件は何としても通させるわけにはいかなかった。

「おおっと、良いのか?お前の情報が校舎全体に回ったらどうなるか?」

わかってるんだろう?ま、お前はこの条件を飲むしかないわけだ。

俺にはどうすることもできなかった。なんて無力なんだ・・・俺は。

「・・・了解した」

「交渉成立だ!これでお前たちに勝機はなくなった!お前達は教室で指でもくわえて

自分たちのクラスのゴミどもが負けるところを見届けるんだな!  
ハハハハハ!」

根元は高笑いをしながら教室に戻って行った。

「・・・なあ明久、そこに隠れてないで出て来いよ。気配が丸わかりだぞ」

俺がそういうと、階段下からピクツ、と何かが動いた。

物陰から、人影が出てきて、階段を少しずつ上がってくる。

「……………いつ頃から気付いてたの？」

「お前が現れて、その物陰に入ったところから」

「全部じゃないか……………ねえ鋼侍」

明久は俺に話を振ってくる。言いたいことは山ほどあるんだろう。同じ立場だったら俺も言ってる。

「バカやる才おおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
おおオ!!!!!!!!!!」

明久が俺を全力で殴ってきた。しかし、俺は何も言わない。いや言えないんだ。言う権利なんてない。

「どうして……………どうしてあんな奴の条件なんて飲んだんだよ  
!?」

鋼侍なら力づくでもなんとかできたでしょ!? どうしてなんだよ、  
鋼侍!？」

明久が俺に向かってわめき散らしてくる。しかし、俺の意見も言わせてもらつとしよう。

「ああ。確かに力づくで奪うことも可能だった。

けどな、俺はそんなことよりも試してみたいことがあったんだ」

「試してみたいことってなんだよ！？この話よりも重要なことなのかよ！？」

「アイツは俺らFクラスをバカにしやがった。しかも俺と姫路がいなけりや楽勝だと？」

笑わせやがって、こっちはお前や島田、秀吉にムツツリーニ、雄二がいるんだ。

もちろん須川たちもそうだ。確かに頭は悪いかもしれねえさ。だからFクラスにいる。

けどな、俺らはいつらが持ってないのを持っているんだ。

それを全面否定されて俺が普通でいられると思うか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明久は無言になったが俺は構わず続ける。

「俺らには何も失うものがない。ただ前に突っ走ることが俺らのやるべきことだ。」

その障害になるものは自分たちで振り払うべきなんだ。

そこにちょうどいい材料が今回あっただけのこと。

俺はふざけているわけでも気違いになつたわけでもないぞ。

俺はただお前たちの力を信じて、いったただけだ」

俺が喋り終わると、明久は俺に向かって笑顔で話しかけてきた。

「鋼侍にそこまで言われたら、僕たちもちゃんと期待に沿わなきゃね。」

それにしても鋼侍がそこまで僕たちのことを考えて、僕に向かって熱いセリフ

を言うとはおもわかつたな。」

俺はその言葉を聞いて、顔が赤くなつた。

「う、うるさい！早く教室に帰るぞ。雄二たちが待っているからな」

「そうだね」

俺と明久は一緒に教室へ戻って行った。

「っというわけで、鋼侍と姫路さんを前線から外してほしいんだ」

「おい明久。何がというわけで何だ？なんにも理由を話してないうえに、



なにトンチンカンなこといつてんだ？殺すぞ？」

「理由なら 書いてあるじゃないか。もう雄二、ちゃんと読んでから言つてよ」

「 ってなんだよ！？何にもねえじゃねえか!？」

雄二は天井を見てからそんなことを言う。まあ当然の反応だな。

「まあいい、わかった。それなら明日鋼侍と姫路がやるはずだったことをお前一人でやれ

いいな？」

「うん、わかったよ」

明久は力強くうなずいた。ああっ！俺って良い親友を持ったんだな。

これからはもつと大切に殺そう。。。。。

「ねえっ鋼侍・・・なんかさつきからただならぬ気配を君から感じるんだけど気のせいかな？」

「気のせいだぞ、明久」

俺は笑顔で答えたが、明久は逆に顔が真っ青になってしまった。ん？どうしてだ？

「そついえば雄二、Cクラスの様子が変なんじゃが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「Cクラスの様子が変だと？漁夫の利を狙っているのか？いやらしい連中だな」

Cクラスといえは、代表の小山友香と根元が付き合っていたよな？これは言ったほうがいいだろう。

「確か根元とCクラス代表の小山が付き合ってるって聞いたぞ。多分それに関係しているはずだ」

「それは良い情報だ鋼侍。おそらく、根元はCクラスと何かしらを結んでいるだろう。」

ならその矛先を変えるまでだな。秀吉、ちょっとこっちに來い」

雄二は秀吉を呼び、なにかごによごによと喋っている。何をするつもりだ？

「おそらく、それならあるじやろう。明日調達してくるぞい。」

そう言ってもとの位置に戻って行った。

「さて、今日はこれぐらいにしよう、明日のために皆ゆっくり休んでくれ。解散！」

そういうと、みんなそろってぞろぞろと教室を出て行った。

さて、俺も帰るとしましようかね。





第十四問（後書き）

なんかすげーぐだぐだになっただけどまあいいや。

どれもこれも寝不足のせいだー！

僕は悪くないんだー！

すいません。すべては僕の文才の無さです。

感想おねがいます。

第十五問（前書き）

今日もまた張り切って行きましょう。



女の子は食べ物ではありません。

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校した俺たちに雄二は開口一番そう告げた。

「Cクラスの件だろ？ いったい何をする気なんだ？」

正直何の話をしていたのか聞き取れなかったため、何をするのかわからなかった。

「秀吉にこれを着てもらって、木下優子としてCクラスに喧嘩を吹っ掛けてもらう」

雄二が鞆から取り出したのはウチの学校の女子の制服。

赤と黒を基調としたブレザータイプで、他校にもオトナのオトモダチにもかなり人気がある

垂涎の逸品だ。

「正直あまり乗り気じゃなかったんじゃがのう。それでも勝たなければいけないこの状況で

文句いつてる場合じゃないし、ワシは引き受けたんじゃ」

秀吉はしぶしぶ着替えを始めた。それも目の前で生着替えだ。俺は



一回見ているので何とも思わないが、

明久とムッツリーニが鼻息を荒くして秀吉を見ている。お前らは変態か？

「確かに声と髪型と、制服さえ変えれば木下にしか見えなくなるな。

一番効率のいい作戦じゃないか。よくこんな思いついたな雄二」

「ん？まあな。とりあえず秀吉が着替え終わったらCクラスに行くぞ」

「……！！（パシャパシャパシャパシャパシャパシャ）」

雄二がそういうが、ムッツリーニは指が擦り切れるんじゃないかというくらいにすごい速さで

カメラのシャッターを切り続けている。そこまでしてやるか？普通。

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

明久とムッツリーニ、雄二までもが複雑そうな顔をしていた。

「さあな？俺に聞かれてもわからんよ」

「おかしな連中じゃのう」

まあ確かにこれでは女子にしか見えない。なぜか色っぽいのはなぜだろっ。

まあ俺はこの程度じゃときめかないけどな。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

俺と雄二が秀吉をつれて教室を出る。

「あ、僕も行くよ」

そういつて、明久も付いてきた。

しばらく歩いてから、Cクラスの扉を目の前にして立ち止まる俺達。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

ここから先は俺たちは入っちゃいけない。Fクラスの使者だとばれたら大変だからだ。

「やはり気が進まんのお……………」

「そこを何とか頼む」

俺と雄二が申し訳なさそうに頼み込む。実際これが成功しなければ前に進めない。

「むう……………仕方ないのお……………」

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。」

お前ならできるはずだ」

秀吉は演劇部のホープで、演技が達人だったりする。勉強は苦手だが、他の面に抜群に秀でているのだ。

「はぁ………。あまりは期待せんでくれよ………」

ため息と共に力なくCクラスに向かう秀吉。本当に気が重そうだ。大丈夫だろうか？

「また今度なんかうまいものでも作ってやるからさ。今回は頼むぞ俺がそういうと、少しだけやる気が出たみたいだ。」

「雄二、鋼侍、秀吉は大丈夫かな？別の作戦を考えておいたほうが……」

「大丈夫だと信じたい」

「心配だなぁ………」

「シツ。秀吉が教室に入るぞ」

雄二が指を口に当てる。ここからは聞こえないだろうが、一応指示に従っておく。

ガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉をあける音が聞こえてくる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

……うわあ。

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上ない挑発だね……」

「ああ、そうだな」

もうこれ以上何も言わなくてもCクラスの敵意はAクラスに向かっただろう。

教室内が既に殺気立っている。

『な、何よアンタ！』

この声はおそらく代表の小山だろう。怒っているのが顔を見なくてもよくわかる。

いきなりブタ呼ばわりだもんな。そりゃ怒る。

『話しかけないで！豚臭いわ！』

自分から来たたくせに豚臭いって。流石に言いすぎなうえに、突っ込みどころが満載だ。

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちよつと点数いいからって良い気になってるんじゃないわよ！何の用よ！』

知名度としては秀吉より木下のほうが上だから敵意はAクラスに向

くだろう。

それに今の秀吉は女装をしているわけだし、見分けがつくわけがない。しかも相手をうまく

怒らせているので、冷静な観察力も奪つてある。完璧な作戦だ。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！』

あなたたちなんて豚小屋で充分だわ』

別にFクラスとは一言も言っていないんだけどな……悲しくなっちゃうじゃないか。

『手が穢れてしまうからホントは嫌だけど、今回は特別にアンタ達に相応しい教室に送って

あげようかと思うの』

演劇部ってウチの暗殺部隊の連中よりできるじゃないか。

演劇部ってここまでできないと入れないのか？それとも秀吉が異常なのか。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。』

近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！』

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉は教室をでてきた。

「これでよかったのかのう?」

どこかスッキリとした表情で秀吉が近寄ってくる。

「ああこれ以上はない素晴らしい仕事だったぞ秀吉」「

俺と雄二は声をそろえて同じ感想を述べた。

『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始めるわよ』

ヒステリックな声をあげる小山の声が聞こえてくる。やはり俺らを狙ってくるつもりだったのか。

「作戦もうまくいったし、根元の考えてることもだいたいわかった。俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

「俺は参加できないけどな」

後十分で試召戦争が始まる。

アレを奪還する計画を立てなきゃな。

俺らは早足でFクラスへとむかっていった。







## 第十六話（前書き）

もうひとつ更新しようと思います。

できれば感想ください。お願いします。



## 教師のコメント

そういうと思っていました……。

明久side

「ドアと壁をうまく使うんじゃない！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

あの後午前九時よりBクラス戦が開始され、僕らは昨日中断されたBクラス前という

位置から進軍を開始した。

雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込める』とのこと。

今回は根元君の妨害により、姫路さんと鋼侍がいない。

これはかなりの痛手だが、昨日の二人の活躍により、ある程度楽になっている。

昨日のアレがなければ、こっちに勝気はなかっただろう。

昨日僕は雄二に、姫路さんと鋼侍がやるはずだったことをやれと言われた。

それは、タイミングを見計らって、根元君に攻撃をしかけること。言うだけなら簡単だけど、実際はそうもいかない。

教室の出入り口は今の状態のまま、戦闘は必ず一対一になり、それを全部押し切るには、かなり圧倒的な火力が必要となる。

それもこの作戦が失敗したら、こちらの負けは確実となる。失敗は許されない。

雄二はこの後、Dクラスに行って指示を出すと言っていた。おそらく室外機のことだろう。

僕は雄二が色々やってる間に、作戦を考えなければならなかった。

「くっ！何かいい方法はないのか!？」

そう考えている間にも、教室前での戦闘での戦死者が増えていく。正直まずい状況になってきた。

一応、方法はあるが、あまりやりたいとは思えないものだった。

「でもこのままじゃあまずい。やるしかないのか?」

考えてる時間さえもつたいない。ここはやるしかないようだ。

「美波！武藤君も君島君も、協力してくれ！」

今ここで説明するのもなんだけど、美波とは島田さんのことだ。昨日の帰り道、

これからはそう呼べと、関節技を決めながら言ッていたため、僕は命のほうに惜しかったので、

そう呼ぶことにしたんだ。べ、別に深い意味はないんだよ!?

まあ話に戻るけど、僕は近くにいた三人を呼んだ。

「どうしたの?」

「なんか用か?」

「補給テストがあるんだけど」

この三人は既に昨日の戦闘で点数をかなり減らし、今日の戦闘でまた減らしてしまったので、

当面は補強テストを受けるのが任務になっていた。

「補給テストは中断。そのかわり、僕に協力してほしい。この戦争の力を握る大事な

役割なんだ」

「……………随分とマジな話みたいね」

「うん。ここからは冗談抜きだ」

「で、どうすればいいの？」

「僕と召喚獣で勝負をしてほしい」

鋼侍 side

俺は今ムツツリー二と共に、保健体育の先生を探していた。

いまさら言うが、ムツツリー二はその名前の如く、保健体育では学年一位をとるほど、

点数が高い。他の教科は明久の次に悪い。まあ保健体育以外バカと  
いうことだ。

今回は俺と姫路は試召戦争に介入行動がとれないため、

止めをさすのはムツツリー二ということになる。

俺も保健体育は普通にAクラスの上のほうの成績を収めているため  
腕輪持ちである。

しかし、言うほど高くはないので、腕輪は第一の腕輪Link《共  
有》のみとなる。

まあそれでも充分なんだろうけどな。

まあ最初に戻るが、俺たちは明久の奇襲が成功した瞬間に、Bクラ

スに入りこむということになる。

奇襲が成功する前に先生を確保しておかなければ、その時点で奇襲は失敗、俺達の負けになる。

「・・・・・・・・・・できれば鉄人が良い」

「鉄人？それなら補習室にいるんじゃないか？でもなにゆえ鉄人？」

「・・・・・・・・・・すべての科目の承認ができるうえに、行動範囲も広い」

「なるほどな、じゃあ補習室に向かおう。そろそろ明久が何かをし始めるころだ。」

ドゴーンッ！

音が鳴り響くことで、地響きが起こる。明久のやつ何かを始めやがったな。

「ムツツリーニ。急いっ」

「・・・・・・・・・・了解」

そういつて、俺とムツツリーニは補習室に急いだ。

補習室に入り、鉄人を捕獲すると、俺たちは屋上に向かい、柵にロープを縛り付けた。

「まったく、お前たちは何をやるかと思えば、ロープを伝ってBクラ

スに直接入りこむ

なんて荒業を……まあいい。これで勝てなかったらお前たちを呪うぞ」

鉄人がそういつた瞬間、

ドゴオツ!!!

何かが崩れる音がした。

「くたばれ、根元恭二いーっ!」

明久の声が屋上まで響く、あいつの声はこっぴつという時に限って響くんだよな。

「さて、行きましようかお二人とも」

俺がムツツリーニと鉄人に声をかける。

「……………了解」

「まあいい。やってやるっ」

俺たちはロープを伝って、Bクラスの窓に一直線につっこんだ。

ダンッ、ダンッ、ダンッ!

Bクラスへの窓からの侵入を成功させ、周りを見渡す。



穴のあいた壁の所に明久と島田、教室の出入り口の所に雄二たち本隊。秀吉もいる。

本隊が動かないとまずいくらいに追い込まれていたのか。間に合っ  
てよかった。

「……………Fクラス、土屋康太」

「同じく、天咲鋼侍」

「き、キサマら……………！」

「Bクラス根元に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイーツ！」

明久達が近衛部隊を引きつけてくれたので、丸裸の根元恭二。  
もはや逃げ道はない。

「サモン試獣召喚」

「第一の腕輪共有Link！」

俺が言うと俺の召喚獣の腕輪が光る。

「き、貴様あああ！！これがどうなってもいいのか！？」

俺に向かって証明書を見せ、吠える根元。しかし、やはりこいつは  
詰めが甘い。

「いまここで貴様を倒せば返ってくるだろう？そんなこともわからないのか？」

お前の方がFクラスよりもよっぽど頭が悪い。幼稚園からやり直すんだな」

『Fクラス 土屋康太&天咲鋼侍 VS Bクラス

根元恭二

441点&358点

20

3点

』

「ムツツリーニ、殺れ」

「……………承知」

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

「ぐ、ぐああああああああああああああああ!!!!!!」

根元の召喚獣が切られた腹部を、根元が自分自身の腹部を抑えて倒れる。

皆、この状況を見て何が起こったのかわからないような顔をしていた。

「……………ね、ねえ鋼侍。さっき鋼侍が腕輪を発動させたけど、戦わなかったよね？」

「なんかこれに関係あるの？」

明久が俺に質問してくる。まあ誰だって俺を疑うだろうな。

「その通りだ明久。俺は腕輪をつかって通常自分に効果を与えるところを、

根元に向けてつかったんだ。だからさっきムツツリー二に切られたときに根元は

フィードバックを受けて倒れたんだ。これは俺からの根元に対する罰だからな」

俺は根元を蔑むように見る。

「さて、鉄人、コールをしてもらおうか。じゃないと終わったことにならないからな」

「・・・はあ、まあいい。もうこの技は使つなよ。使ったらその時点で負けとみなすからな、天咲。」

鉄人は俺に言い聞かすように、そしてもう次はないと脅すように言った。

「わかってる。今回は本気で腹を立てたからこんなことをしただけだ。もうしねえよ」

「わかった。・・・勝者、Fクラス！」

そうしてBクラス戦は終わった。

## 第十六話（後書き）

今回は短いです。

まあとりあえずBクラス戦終わりました。

次はAクラス戦です。

できればご感想ください。待ってます。

## 第十七話（前書き）

今日はこれで最後です。

読んでくださってありがとうございます。

これからも頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

あといまさらですが、説明します。

天咲鋼侍

身長 明久>鋼侍>秀吉、ムッツリーニとなっている。

第十七話

-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

ずいぶん急な話ですね。

天咲鋼侍の答え

『・・・・・・・・・・・・・・・・キャツ?』

教師のコメント

・・・・・・・・恥ずかしいなら職員室まで来てください。

そこで答えを聞きます。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、

初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、  
体重が43?

に達するところに初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。

日本人では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境

栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。



「明久、随分と思いきった行動に出たのう」

終戦後、明久はすぐに秀吉に声をかけられた。まあ俺もここまでするとは思ってなかったけどな。

「うう………。痛いよう、痛いよう………」

明久の手は血に滲み真っ赤になっていた。100%とでないにしろ、フィードバックでこのダメージだ。

壁は相当固かったのだろう。まあコンクリだし、当たり前か。

「根元よりはましだろう？あの点数の攻撃のフィードバックを受けているんだ。」

「一月は痛み続けるだろうな」

正直やりすぎたか、と思ったがあいつのやってきた今までのこと全部がああの痛み程度だと

思うと軽いぐらいだ。それぐらい根元はかなりやってきていた。

「……ま、まあそうかもしれないけどさ」

「まあなんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思つよ？」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素

晴らしい作戦じゃな」

「……………遠まわしにバカって言ってない？」

学校の壁を破壊するなんて、問題にもほどがある。

鉄人も顔に手を添えて、『またあいつか……問題児にもほどがあるぞ』なんて言っただけで黄昏ていた。

まあ、明久の職員室行きは免れないだろう。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二はそういつて、明久の肩をバンバン叩いている。

まあ確かに明久の場合はバカという称号が、マイナスではなくプラスになるからな。

それが明久の強みでもあった。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表……って死んでるんだったな」

根元は俺とムツツリー二のコンビネーションアタックにより撃沈している。

当分起きないだろう。

雄二はBクラスのみんなのほうを見てから言った。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、

今回は特別に免除してやってもいい」

そんな雄二の言葉にBクラスの連中やFクラスのみんながざわざわと騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

その言葉でウチのクラスは皆どこか納得したような表情となった。

Dクラス戦でも言ったことだし、雄二の性格を理解し始めているのだらう。

「条件はなんなの？」

Bクラスの誰かが聞いてくる。

「条件？それはこいつのことだよ。負け組代表、こいつを好きにさせてもらおう」

「代表が条件？どついつこと？」

「ああ。こいつは散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目ざわりだったんだよな」

凄い言いようだが、実際こいつは言われるだけのことはやってきた。何回か俺も見かけたことあったし、その行動に介入したこともあった。

だから俺は前からこいつのことを知っていたんだ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

何を取引の材料にするのか聞いてなかったから、なかなか楽しみでもある。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができてると宣言して来い。」

そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。

すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の医師と準備ができている

「とだけ伝えるんだ」

「……そ……それ……だ、だけで……いい……のか……？」

さつきまで死んでいた根元が起きた。ちゃんと話を聞いていたみたいだ。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言ったとおりに行動してくれたら見逃そう」

そう言つて雄二が取り出したのは、先ほど秀吉が着ていた女子の制服。

これはおそらく明久が取り入れたものだろう。俺の証明書と姫路のラブレター奪還のためだ。

かなりありがたい。

「ば……バカなこ……とを……言うんじゃ……」

・ない……どうし……て……俺が……そんな……こと」

腹が痛すぎて、まともに声も発することができないだろう。ふんっいい気味だ。

それにまだ俺は精神的にあいつを殺していない。今がチャンスだろう。

「根元恭二の恥ずかしい思い出part1!」

俺がそうやって言うと、全員の視線が俺に向かってきた。よし、いいぞ。

「小学五年生のころ、好きな子に告白しようとして、緊張しすぎてその場でおもろしを

してしまった」

「な!？」

根元が驚いている。まあそうだろう、いきなり自分の恥ずかしい過去を勝手に暴露されたら

皆こうなる。

「小学六年生のころ、悪友と一緒に万引きをしたところ、途中で転んで一人だけ捕まった」

『ははははははははははははっ!!!!!』

皆も根元を見て笑っている。俺も思い出し笑いしそうだ。

「そ・・そんな・・ことは・・嘘だ・・ふざけた・・こ・・と  
言っつてんじゃ・・ねえ」

根元がそんなこと言ってるが俺は気にしない。

確かこのBクラスに根元と同じ小学校の繁盛さんがいたはずだ。

「繁盛さん。俺の言ってることには嘘はないよね？」

「え!?!・・確かにそういうことがありましたね・・皆で爆笑していたような気がします」

繁盛さんは思い出しながらそう言った。

「根元。これ以上言われなくなければ、おとなしく俺らに従え、わ

「かつたな？」

「ああ・・・ああ・・・わかったから・・・もう何も言わないでくれ・・・」

そう言って根元は折れた。よし。精神的にも殺すことができた。おれはもうやる必要はないな。

「では、着つけに移るとするか。明久任せたぞ」

「了解っ」

明久は、精神的にも肉体的にもぐったり倒れている根元に近付き、制服を脱がせる。

ものすごい嫌な顔をしながら着付けを始める。

「うーん・・・。。これ、どうするんだろっ？」

明久は、男子の制服と違う仕組みをしている制服に困惑していた。

そうやって困っている。

「私がやってあげるよ」

Bクラスの女子がそう提案してくれた。

「そう？悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台から腐ってるから」

根元、お前には誰一人として味方がいないんだな。彼女がいるけど、今回でそれもなくなるだろう。

「じゃ、よろしく」

そういつてから明久は根元の制服をあさる。何かに当たる感触があったのか、ごそごそとし始めた。

「……………あつたあつた」

明久は見覚えのある封筒をとりだし、もう一つの俺の証明書を取り出した。

そうして、明久は俺に近寄ってくる。

「はい。これ鋼侍のでしょ？」

そういつて、俺に証明書を渡してきた。

「ああ、ありがとうな明久、この借りはいずれ返すからな」

「うん、楽しみにしておくよ」

そういつて、明久は根元の制服を持っていき教室を後にした。

俺はその行動が気になり、気付かれないように、後ろについていく。

そうすると、明久は根元の制服をゴミ箱に投げ捨てる。



きちんと蓋までして見えないようにしてから、Fクラスの中に入って行った。

近くには姫路がいるが、明久は気づいていないようだ。

ここは二人きりにしてやったほうがいいだろう。

俺はそう思い、その場を去って行った。

## 第十七話（後書き）

感想をお願いします。

さびしくて死んでしまいそうです。

だれかなんでもいいから、感想を！

### おまけ 3 (前書き)

オリキャラ登場です。

一回だけ名前が出たことありますよ。

最初のほうにたった一回だけ。

### おまけ 3

明久と姫路の会話が終わったあと、俺たちはそのまま各自帰宅をした。

「はぁ・・・今日はなんか無駄に疲れたな」

Bクラス戦での俺の働きはなかなかしんどいものだった。

姫路と一緒に無双して、根元に脅しをかけられて、ロープを伝ってBクラスに侵入して、などなど、

根元をどうやって殺すかなどのことも考えていたら、いつの間にか身体が重くなっていた。

「今日は家に帰ったら癒し（ぬいぐるみ）でモフモフしてから寝よつと」

家の前に着き、玄関の扉に鍵を差し込む、が微妙に扉が開いていることに気付いた。

空き巣か？そう思いながら玄関に上がる。

玄関には俺のとは別物の靴が置いてあり、ますます謎が深まった。

（どづいつことだ？空き巣なら普通、靴とか気にしないだろうし、それ以前にこの靴は女物。

姫路とかならわかるが、こんな時間に入ってはこないだろう。）

俺は慎重に廊下を進み、各部屋へまわっていく。が、何もあさった跡はないし、入っても来ていない。

結局、何もわからぬままりビングルームに行った。

しかし、答えはここにあった。

「ん？だれよあんた？」

そこには俺と同じ白銀の髪をして目は俺と対照的な紅色、少しきつめの目、色白なのは一緒だ。

鼻も高く、唇は整っている。俺と同じなで肩で、鳩胸気味。

そのせいか胸は強調されて見た目ではDぐらいに見える。

身長は俺よりちょっと低い程度。精々5?ぐらいしか変わらない。

髪はツインテールになっている少女がいた。

「お前こそだれだ？勝手に人の家に入りこんで、不法侵入罪で訴えるぞこらあ」

少しヤンキーみたいな口調で言ってみた。しかし、あまり効果は見られない。

「ん？俺ん家？てことはアンタがあたしの兄貴ってこと？まっさかーっ！こんな弱っちそうな奴が」

あたしの兄貴なの！？信じらんない！？」

ぎゃあぎゃあ喚く少女。かなりの勢いで俺をけなしている。殺してやるうかコイツ。

「ってことはお前が朱美か？天咲朱美であってるよな？」

「ああ、あってるよ。じゃあアンタは天咲鋼侍なの？もっとこいつい兄ちゃんかと」

「思ってたんだけどなあ、ちょっとげんなり」

「お前はマッチョな奴のほうが好きなのか？変な趣味してんなお前」

「別にマッチョになんて興味ないし、実際アンタがマッチョだったら大笑いしてるとこだよ」

こいつはいったいなんなんだ？ここまでとっつきにくいやつは初めてだぞ。

「まあいい。それよりも聞きたいことがある。なぜお前がここにいる？」

「両親はどうした？」

「つい先日までこいつは外国のどこかに両親と一緒にいたはずだ。」

「こいつがいるということは、両親も帰ってきているはず。」

「仮に、こいつが単独でここに来たとしても何か理由があるはずだ。」

じやなきやこつちに

おくつてくる意味がわからない。

「両親は今仕事がありえないぐらい忙しくて、あたしにかまってる暇なんてないんだとさ。」

で、私がいつも一人になっちゃてて、可愛いそうだからという理由でここにいるわけ

You understand?」

「いちいち英語で言わなくていい。はあ……また悩みの種が一つ増えた」

「じゃあアタシこれからお風呂に入るから、そこにある荷物、適当な部屋にかたづけといてね。」

「ふざけんな。自分で片付ける。俺はお前の後でいいから風呂に入らせてもらおう。」

そういえば飯は食ったのか?」

これがわからないと一番困ることだ。多分こいつはずっと甘やかされて生きてきたんだろう。

めちゃくちゃ文句が多い。それに生意気。これで作ってなくて怒られた時にはたまらんからな。

「もう食べたわよ。カップラーメン一つと、お菓子」  
チョコボール

なんて最悪な食生活をしてるんだこいつは。徹底的にしごかなければいけないなこれは。

「もういい。わかった。早く風呂に入ってくれ。俺が片づけておく。

だが、明日からは全部自分でやれよ。わかったな」

「ふぁーいっ」

そういつて朱美は着替えを持って風呂場に向かっていった。

「さて、片付けと整頓を始めるか」

リビングに山積みになっている荷物を、リビングに一番近い部屋へと持っていく。

一つ一つを開封していき、まず大きいものから取り掛かる。

ベッド、タンス、勉強机、本棚、一人用ソファなどなど大きいものから整頓をしていく。

次に、タンスに入るもの、衣類などの箱を開封し、タンスに次々と丁寧に押し込んでいく。

タンスにはクローゼットもついてるようだったので、中に入っていたハンガーを使い、

上着やジーパンなどを入れていく。



あと本棚にマンガや雑誌を入れて、参考書などは勉強机に並べる。パソコンを勉強机に置く。ぬいぐるみと抱き枕はベッドに投げる。

「ふうっ……ひとまず終了」

通常の人ならば何時間とかかるところを、わずか三十分で終わってしまっただ。

それだけ、能力が高いのだ。

しばらくすると、朱美が風呂からあがってきて、部屋に入ってくる。

「へえ……アンタなかなかやるじゃない。お手伝いさんがこれをまとめるのに」

「何時間もかけたものをこんな短時間で終えちゃうなんて。」

本気で俺に関心を抱いたようだ。普通こんなに早く終わるわけないからな。

「まあいい。俺は仕事して疲れた。詳しい話は明日聞かせる。俺は風呂に入ってそのまま寝る。」

「さすがに今日は疲れたからな。」

「あっそう。じゃあ私も寝るから。Good night」

そう言って、朱美は電気を消して、布団の中に入って行った。

俺も早く風呂入って寝よう。飯はもういいや。

そういつて、俺の一日は終わった。

## 次の日

「さて朝だ。今日も張り切って掃除をしよう」

現在時刻午前四時。朱美はまだ寝ている。長旅で疲れたんだろう。

まあこんな早く起きるのも俺ぐらいだと思っけどな。

俺はゆっくり掃除を終えると、朱美を起こしに行った。

現在午前七時三十分。

そろそろ起きてもいい頃だろう。俺は朱美の部屋の扉を開く。

抱き枕に張り付いて寝ている朱美の姿があった。

こうしているうちは可愛いものにな。どうして起きるとあんなになるんだらう？

「おいっ！朱美起きろ。そろそろ良い時間だぞ」

俺はそう言っつて朱美の肩を叩く。

「むにゃむにゅ。もうこれ以上アリの脚はないよ？もう全部あたしが扱いちゃったもん zzzz」

「……どういつ寝言言ってた？』もう食べられないよ』ならわかる。」

「だがなぜここでアリが出てくる？それも全部足を引っこ抜いただと？」

「どんだけエグイことしてんだこいつは。」

「おい！朱美起きろ。そろそろ時間だ」

「俺はそう言っつて朱美の肩を揺らしまくった。」

「ん、んん？なに？つてアンタだれ？」

「お約束のポケをありがとつ。早く起きろ。俺は学校に行かなきゃなんないからな」

「俺は先に部屋をでて、朝食の準備をした。」

「ふあああゝつと、もう飯できてる？」

「そついつて朱美はパジャマ姿で部屋から出てきた。」

「ああ、できてる。食パンだけどかまわらないよな？」

「うん。それでいい。食べられるなら」

「俺は朱美に食パンを渡し、席に着く。」

「で、お前学校はどうするんだ？もちろん行くんだろ？」

「まあそれはお楽しみってことで」

「ふうん。まあいいや。お前に鍵を渡しとくな。じゃないと出ていくとき何かと面倒だろ」

そう言っつて、家にある合いカギを朱美に向かって投げる。

「あんがとさん。アンタもう時間まずいんじゃないの？もう八時だよ？」

時計を見てみると確かにもう八時を回っていた。

こいつのせいなのに、まったく自覚がねえなこいつは。

「そうだな。走っていけば間に合うだろうけど結構きついな。」

戸締りは頼んだ。俺はもう行く」

「はいはい。いってらっさい」

俺は適当な感じで言っつてくる朱美に苦笑しながらも、初めての『行っつてらっさい』を

言われたことに少しだけ感動していた。

「ああ、いってきます」

俺はそう言っつて家を後にした。

「さてあたしも用意しなきゃね」

そうして二日ほど過ぎて、だんだん朱美との生活に慣れたきた。

今日は補給テストをし終えて、残すはAクラスとの戦いのみになった。

「まず皆に礼を言いたい。周りの連中は不可能だと言われてたにも関わらずここまで

これたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

壇上にいる雄二がらしくもないことを本気でやっていた。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

そんなことを言っている雄二を見ると、心が温かいもので満たされていく気がした。

まあ確かにこの弱小クラスでよくここまでこれたなんて思う。

「ここまでできた以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいって

もんじゃないという現実を、教師どもにつきつけてやるんだ！」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになっている。そんな気がした。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だがこれは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

先日の昼食時に聞いた話なので、特に驚かなかったが、皆は驚いているようだ。

『どっついうことだ?』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

?なぜ代表の霧島と戦うんだ?まあ何か策があるんだろうけどな。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ!？」

雄二が明久に向けてカッターを投げつける。

「次は耳だ」

「いや、鼻だろう」

俺もそれに乗ってみた。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにより合えば勝ち目はないかもしれない」

「だが、Dクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう?まともによりあえば俺達に勝ち目はなかった」

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝利は

揺るがない」

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を今見せてやる」

『おおおーっ!?!』

皆の意思を確認する必要はないようだ。全員が雄二を信じている。

「あのー、盛り上がってるところすいませんが、今日は転校生を紹

介したいと思います。

どうぞ入ってきてください」

福原先生が無理やり話しに入ってきて、無理やり転校生を連れてきただけだ？　こんな時期に

転校なんかしてくる奴は。

はいってきたのは白銀の髪をした少女だった。もちろん見覚えがある。あいつは、あいつは！！

「天咲朱美です。どうぞよろしく願いします」

そう言って笑顔で入ってきたのは俺の妹だった。





おまけ 3 (後書き)

もう寝よう。

なんか無理やり感のある今回でしたが文字数の事情より

予定より少し短くなりました。

すいません。

できればご感想をください。よろしくお願いします。

第十八問（前書き）

今日はこれ一個で終わりです。

## 第十八問

いきなりの転校生、それは俺の妹だった。まだ知りあって三日しか経ってないが、

正真正銘の血のつながった妹である。

さてここで問題があがった。

今現在 天咲朱美は十三歳、通常中学一年生をやっているはずだ。

しかし、あいつはここに転校してきた。俺はこの状況が全く理解できなかった。

「天咲朱美です。よろしくお願いします」

そう朱美が言った瞬間、クラスの視線は俺に移った。

まあ名字が一緒だからこうなることは予想していたが。

「おおっ、兄貴もここなんだ。じゃあ兄貴の近くに座らせてもらおうと」

そういって、俺の近くにいる小池君をどかして、勝手に席に着きやがった。

常識はずれにもほどがある。

俺は思わずため息をついてしまった。

「ねえ君、ここの席使ってもいいよね」

そういつて小池君にお願いをしている。少し上目づかいで。

「あ、は、はい。どうぞお好きに使ってください」

そういつて、席から外れた。小池君、君、席はどうするんだい？

そんな簡単に譲っていいのか？

『なんだあの美少女は？』

『天咲のことを兄貴って呼んでたよな』

『が、眼福じゃああああああ』

『萌えええええええ〜』

だんだん状況に追いついてきたのか、騒がしくなり始める。

おい。最後のやつ出て来い。良い眼科を紹介してやる。

「一応、得意科目は英語。多分英語は兄貴にも負けないと思う。

数学は微妙で他の科目は日本語読み書きできないから無理。

趣味は身体を動かすこと、まあそんなもんでしょ。

けど試召戦争だっけ？それには今回は参加できないよ。テスト受

けてないからね

よろしく」

そういつて席に着いたまま自己紹介を終えた。ざわめきはまだおさまらない。

「おい、朱美。お前はまだ十三歳のはずだ。なぜ高校に入っている？

それになぜ俺に言わなかった。話してもらおうか」

俺が十三歳といった瞬間、一気にざわめきが広がった。

当然だな。まだ中学生の始めたばかりのやつがもう高校二年生をやっているんだ。

だれだって戸惑うだろう。

「ん？あ、そのこと。もう向こうで跳び級しまくってたらしいの間にかこうなってたの。」

話すのはめんどかったから。以上」

「ってことはAクラスレベルがまた一人増えたってことか!？」

「でも今回は参加できないって言ってたぞ」

「それでも眼福じゃああああああ」

なんか会議がめちゃくちゃになってしまった。

俺は雄二にアイコンタクトをとり、この状況を沈めるように言う。

「皆、静かにしろ！転校生が来て騒ぎたいのはわかる。けど今はAクラス戦

の作戦会議中だ。騒ぐのは後にしろ！」

そう雄二が一喝すると、さっきの喧騒が嘘のように収まる。

「話を戻すが、俺と翔子の一騎討ちの話だ。」

具体的なやり方は、まずフィールドを限定する」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

秀吉が言う。さっきまで驚いた顔をしていたが、今は作戦会議に考えを戻しているようだ。

「日本史だ」

なぜ日本史なのかは分からないが、雄二には何か考えがあるんだろう。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、

召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生程度のレベルで上限あり？

その条件の場合、満点が前提となって、ミスした方が負けるという  
注意力勝負となる。正面からぶつかるとはよりはまだまだましかもしれない。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？そうになったら問題のレ  
ベル

も上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない  
？」

さっきまで、朱美を見ていた明久だが、姫路と島田の黒いオーラを  
感じ取り

見るのをやめて、雄二に質問していた。

だんだん、姫路もFクラスに染まってきたな。

「確かに明久の言う通りじゃ」

秀吉も明久の意見に同意する。まあ確かに言われてみればそうだな。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運  
に頼りきった

やり方を作戦などというものか」

「雄二、おまえは何か霧島の集中力をかき乱すことを知っているの  
か？」



「いいや。あいつなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら」

何の問題もないだろう」

まあそりゃそうだな。先生の監視がある中での妨害程度で、あの霧島が揺るぐことはない。

だが、いったい何をするっていうんだ？

「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

クラスみんなも一旦、俺と朱美を見るのをやめて、秀吉の言葉にうなずいていた。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

かぶりを振って、雄二は改めて口を開いた。

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると」

知っているから」

ある問題？

「その問題は 『大化の改新』」

「大化の改新？そんな問題ずつと外国にいた私でもわかるわよ？どうして

大化の改新なの？」

ここで、朱美も会話に入ってきた。

「その理由は俺が昔間違った答えを教えたからだ。

翔子は一回覚えたものは決して忘れない。

俺はアイツに645年に起きたところを、625年と間違った答えを教えたんだ。

まあこんなの明久でさえわかるだろう」

皆の視線が明久に跳ぶ。明久は「僕をみないで！？」と言わんばかりの顔をしていた。

多分わかってなかったんだろう。

「それは幼馴染としての経験上のことなんだな雄二」

「ああ、そうだ。とにかくこの大化の改新さえ出れば俺らの勝ちは確実だ。

そうして俺らの机はシステムデスクに代わる！

わかってくれるかみんな！」

『おおーっ!』

そういつて、Fクラスは一致団結した。

ノリのいい朱美も手を挙げて楽しんでいた。

「一騎討ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である雄二を筆頭に、明久、姫路、秀吉にムツツリーニ、俺や朱美と首脳陣勢ぞろいで

Aクラスに来ていた。朱美は面白そうだからと言ってついてきただけだ。

「うーん。何が狙いな?」

現在雄二と交渉のテーブルにしているのは木下優子。面識はあっても、

今はFクラスとAクラスの話。私情を持ち込んではいけない。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

木下がいぶかしむのも無理はない。下位クラスに位置する俺らが学年トップの

霧島に挑むこと自体が不自然なんだからな。なにか裏があると思うだろう。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、

だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな」

予想通りの返事。ここからが交渉の本番だな。

「ところでCクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

雄二が腕を組み、顎に手を当てながら聞く。

「時間はとられたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。その勝負は半日で決着がつき、

今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやり合う気はあるか？」

「Bクラスって……昨日来ていた死にかけのあの……」

・・・

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていらないようだが、

さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三か月の準備期間をとらない限り

試召戦争はできないはずだね」

明久が雄二に聞くがここは俺が答えておこう。

「Dクラスにしても、Bクラスにしても、どちらも対外的には『和平交渉にて終結』となっている。

規約にはなんの問題もない。」

「・・・それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

雄二がああ根元と重なるように見えた。まあ今回はこっちが悪役だしな。

「うーん・・・わかったわ。何を企んでるのか知らないけど、

代表が負けるなんてありえないもの。その提案受けるわ。

あんな格好をしたBクラスと戦うよりはましなもの。

けどこっちからも一つ提案。

代表同士の一騎討ちじゃなくて、お互い五人ずつ選んで、一騎討ち五回で

三回勝ったほうの勝ちっていうのはどう？それならうけてもいいわ」

これは俺と姫路を警戒しているんだろう。侮れないな、やはり。

「なるほど。こっちから姫路や鋼侍が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。多分大丈夫だとは思っけど、保険をね」

「わかった。その条件を呑もう」

「ホント！？それならいいや」

「けど勝負する内容はこちら側に権利をもらう。そのくらいハンデがあってもいいだろう？」

まあそうでもしないと、勝てる勝負じゃないしな。流石雄二。

交渉術は俺より長けている。

「え？うーん」

「またも悩む木下。まあこれで勝負を左右するからな。考えこむのも無理はない。」

「……………受けてもいい」

「うわっ！」

明久が素っ頓狂な声をあげた。失礼だなこいつ。

「……………雄二の提案を受けてもいい」

「霧島か。いいのかそんな簡単に」

俺は一応聞いておく。

「……………でも条件がある」

「条件だと？」

「……………負けたほうは勝ったほうの言うことを一つ聞く」

「……………（カチャカチャ）」

ムツツリーニは無言でカメラをいじり始めた。

「ムツツリーニ、まだカメラの準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！」

「一体明久は何を言ってるんだ？」

「じゃあこうしない？勝負内容の三つはそつちが決めて、

あとの二つはこつちが決める。これじゃあダメ？」

全部は譲ってくれなかったけど、木下が妥協案を入れた。まあ妥当だろうな。

そう木下がいうと明久は姫路とこそこそと話をはじめた。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか」

「心配すんな。絶対に姫路には迷惑をかけない」

自信満々のセリフ。どうして姫路が出てくるのかわからなかったが、まあいいだろう。

「……勝負はいつ？」

「そつだな。十時くらいでいいか？」

「……わかった」

相変わらず独特の雰囲気をもっているな霧島は。

「よし、交渉成立だな。一旦教室に戻るぞ」

「そつだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」



交渉を成立し、Aクラスを後にする。

「どうだ？この学校は？」

俺は教室に戻る時、朱美に聞く。

「なかなかおもしろいとおもつよ。試召戦争がどんなものなのかも見てみたいしね」

「そうか」

俺らの試召戦争の終結は、すぐそこまで迫っていた。



## 第十八問（後書き）

今日はもうこれで終わりです。

よろしければ感想を送ってください。

お願いします。

## 第十九問（前書き）

一応言っておきますが、朱美は使い捨てキャラですので、

話の途中で外国に戻るようになります。

朱美のキャラを気にしていた人には申し訳ないですが、

そこんところはわかっていただけだと思います。

## 第十九問

## 第十四問

問 以下の問いに答えなさい

水泳の個人メドレーの種目を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『1、バタフライ 2、背泳ぎ 3、平泳ぎ 4、自由形』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

解答は合っていますが、姫路さんは実際に泳ぐのが苦手なようです  
ね。

水泳は全身運動で心肺機能を鍛えることにも役立ちます。

苦手だからといって尻込みせず、積極的に水泳に参加しましょう。

吉井明久の答え

『アニソンメドレー、ナツメロメドレー、はとサブレー！』

教師のコメント

先生もはとサブレは好きです……。

「では、両名共準備はいいですか？」

今日はここ数日の戦争で何度もお世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任の

高橋先生が立会人を務めている。

「ああ」

「……問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス。こっちのほうがいし、腐った畳のFクラスじゃ

締まらないしな。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうからは木下優子。

対するは。

「ワシがやるっ」

弟の秀吉だ。まさかの姉弟対決だな。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ、姉上」

「Cクラス代表の小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

話がかなりまずいほうに転がってきた。

小山と言えば、前回のBクラス戦で、秀吉が罵倒しまくったやつのことだ。

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

「……………死んだな秀吉。」

『姉上、勝負は　　どうしてワシの腕を？む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人たちを豚

呼ばわりしていることになっているのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して  
あ、姉上っ！』

ちがつ．．．．．！その関節はそっちに曲がらなっ．．．．．  
『！』

ガラガラガラ

扉を開けて、木下が帰ってくる。

「秀吉は急用ができたから帰るってさ。代わりに人出してくれる？」

「い、いや．．．．．。討ちの不戦敗で良い．．．．．」

にこやかに笑いながらハンカチで返り血を拭う木下。

流石の雄二も何も言えないみたいだ。

「．．．．．ねえ．．．試召戦争ってこんなに残酷なものなの  
？」

初めて見る試召戦争で、いきなりグロッキーなものを見せられて、  
朱美は

顔が引きつっていた。

「．．．．い、いや。あれは特別だ。個人の私刑だろう」



俺も詳しいことは言えなかった。

「そうですか、それではまずAクラスが一勝、と」

高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁一面の大きなディスプレイに

結果が表示された。

『Aクラス      木下優子                      VS                      Fクラス      木下秀吉

生命活動      WIN    DEAD

』

いや、死んでないからね。腕を一本損傷しただけで。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは……佐藤美穂さんだっけ？まあいいや。Fクラスからは

「よし。頼んだぞ、明久」

俺と雄二は声をそろえて言う。やはりこういうときは明久だろう。

雄二もわかってるなあ。

「え！？僕！？」

めっちゃ動揺している。まあバカの中のバカがクラスを代表するとは思ってもみなかったんだろう。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たつぷりの俺と雄二の言葉。俺らの言葉を聞いて、明久は自信を持ったように、髪をフアサツ、とかきあげて言う。

「ふっ……。。。。やれやれ、僕に本気を出せたこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前  
の本気を

見せてやれ」

雄二はそんなこと言っているが、常に明久は本気なので、全く関係のないことを言うだろう。

『おい、吉井って実は凄いやつなのか？』

『いや、そんな話聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

味方であるはずのFクラスからはあまりいい声は上がらない。

まあ当然だろうな。今までの行動から推測してもバカでしかない。  
これからも永遠にだけどな。

「吉井君、でしたか？まさか、あなた……………」

対戦相手の佐藤さん？が明久を見て何かに気付いたようになる。

何に気付いたんだ？

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

明久は戦闘のためか、袖をまくり、手首を振る。軽い準備体操のつもりなんだろう。

「それじゃ、あなたは……………」

「そうさ。君の予想通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕

」

大きく息を吸い、この場にいる全員に聞こえるように言った。

「左利きなんだ」

『Aクラス                      佐藤美穂                      VS                      Fクラス                      吉井明久

物理                      389点                      62点

』

おおっ！ものすごい点数差だな。これは予想外だ。

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

まあ勝てるわけないよなこの点数差で。いくら召喚獣を使い慣れる身とはいえ、

点数差には勝てない。まあ常識だ。

「ねえ兄貴。吉井つてもしかしてバカ？」

朱美が俺に聞いてくる。俺はさも当然のように言い放つ。

「ああ。この学校を代表する究極のバカだ」

「そっちの二人は話してないで僕を助けてよ！？」

明久はHELP ME！と言わんばかりに、俺達に向かって手を伸ばすが全面無視する。

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った！雄二、鋼侍！アンタ達僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

どこまでも息ぴったりな俺たちだった。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ムツリーニが立ち上がった。

ここで初めて選択教科が活きてくる。

ムツリーニは前回のBクラス戦の通り、保健体育が最強だ。まず右に出るものは

いないだろう。ここは確実な勝利となる。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは工藤が出てきた。

「教科は何にしますか？」

高橋先生がムツリーニに尋ねる。

「……………保健体育」

ムツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。

「ムツリーニ君は名前の通り、随分と保健体育が得意みたいだね。」

「  
なにか余裕な感じのする雰囲気だ。工藤も保健体育の点数が高いのか？

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？・・・君とは違って、実技で、ね」

・・・なにかものすごい問題発言が聞こえたような気がするな？

おそらく気のせいだろう。

「吉井君と天咲君。僕でよかったですら保健体育の勉強おしえてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが」

明久を見てみると、悲壮感たっぷりの顔をして、独り言をぶつぶつと呟いていた。

「じゃあ、天咲君はどうかな？ボクでよかったですら相手になるけど？」

俺に火が飛んできた。俺は徹底的にこの手の話に弱い。

「えー!? え、え? . . . . . (ボフツ)」

俺は顔が真っ赤になりすぎて考えがショートした。

「まだまだウブみたいだね。その件はまたあとでね」

工藤はそういうと、ムツツリー二と向き合った。

俺の隣では朱美が「. . . . . ちよっとダサい」と言っていた。

俺も悲しくて死にそうだ。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣<sup>サモン</sup>召喚っ」と

「. . . . . 試獣<sup>サモン</sup>召喚」

二人に似た召喚獣が、それぞれ武器を手に持って出現する。ムツツリー二はBクラス戦でも

見せた小太刀の二刀流。一方工藤は、

「なんだあの巨大な斧は!?!」

見るからに破壊力抜群の巨大な斧。おまけに腕輪もしていた。結構まずいなこれは。

「実践派と理論派、どっちが強いを見せてあげるよ」

工藤が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光をまとわせ、ありえないスピードでムツツリーニの召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

そして、豪腕で斧を振う。普通なら避けられる攻撃じゃないな。

「ムツツリーニっ!」

明久がそう叫ぶが、俺は平常心を保っていた。あのムツツリーニが何もせず負けるわけがない。

斧が召喚獣を両断する

「・・・・・・・・・・・・・・・・加速」

と思った瞬間、ムツツリーニの腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

工藤の戸惑う顔。みんな状況が分かっていないようだ。

すでにムツツリーニの召喚獣は相手の射程外にいた。



なるほど。ムッツリーニらしい腕輪だな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・加速、終了」

ボソリと、ムッツリーニが呟く。

一呼吸置いて、工藤の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

『Aクラス                    工藤愛子                    VS                    Fクラス                    土屋康太

保健体育                    446点

572点

』

恐ろしい点数だなおい。もはや反則じゃねえのか？

「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからな」

雄二が明久に説明している。本気をだせばここまで強かったのか。

「そ、そんな・・・・・・・・！この、ボクが・・・・・・・・！」

工藤が膝をつく。相当ショックのようだ。

「これで二対一ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進める。自分のクラスが負けて気にならないのか？

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらからは姫路が出た。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから出てきたのは

久保利光！

「やはり出てきたか、学年次席」

そう彼の名は久保利光。

姫路に次ぐ学年四位の実力の持ち主で、振り分け試験を俺と姫路がリタイヤした今、

彼は俺らの学園で次席の座にいる。

「ここが一番心配どころだ」

久保の実力は姫路とほとんど変わらない。精々二十点程度だろう。

姫路が連戦で疲れている今、負ける可能性は否定できない。

「じゃあ、俺も出るか。木下！お前さっき秀吉殺してきたから試召戦争やってないだろう？」

「だったらでてこいよ」

俺が木下に挑発する。

「っ！？まあいいわ。うけてあげようじゃない、その勝負。私も暇していたしね。」

「ちよっどいいわ」

そういつて、俺と同じように前に出てくる。

「それでは今回は二対二でよろしいでしょうか？」

高橋先生は確認のため聞いてくる。

「ああ。それでいい」

「僕もその二人とはやりあってみたかったしちよっどいいだろう」

「お、お願いしますっ」

「はじめてくれ」

「科目はございますか？」

高橋先生が俺達四人に声をかける。

「総合科目でお願いします」

勝手に久保が答えていた。ふっ、おもしろい。恐怖を味あわせてやる。

「ちよっど待った！何を勝手に」

明久が声をあげるが、

「構いません」

「姫路さん？」

姫路が明久を止めた。

「それでは……………」

高橋先生が前と同じように操作を行う。

それぞれの召喚獣が呼び出され、一瞬でけりがついた。

『Aクラス 久保利光&木下優子 VS Fクラス 天  
咲鋼侍&姫路瑞希』

総合科目 3997点&3892点  
6293点&4409点 『』

『マ、マジか!?!?』

『いつの間にこんな実力を!?!?』

『この点数、姫路瑞希のは霧島翔子に匹敵する。天咲鋼侍のはそれを遥かに凌駕している!?!?』

至る所から驚きの声上がる。

まあこれぐらいできて当然じゃないかな？

「ぐっ……！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

あえて俺には聞いてこない。もう分り切っていたことなんだろう。少し悲しい。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる

このFクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

まあ確かに、Fクラスにいる姫路の姿は輝いていたな。まあ別の理由もあるんだろうけど。

そう思い、俺は明久をちらっと見る。俺に見られてわけがわからないと言った

顔をしていた。やれやれ、先が思いやられるな。

「これで二対二です」

高橋先生に若干の変化が見られた。これは珍しいものをみたな。

「最後の一人、どうぞ」

「……………はい」

Aクラスからは最強の敵、霧島が出てくる。

そして、うちからはもちろん。

「俺の出番になる」

「教科はどうしますか？」

雄二が言うのはあれしかない。

「教科は日本史、内容は小学生レベルので方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……………！

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確定じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ』

これで俺らに勝ちの可能性はでてくる。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。

少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出ていく。

「雄二、あとは任せたよ（ぞ）」

俺と明久はぐつと雄二の手を握る。俺らにできることはすべてやった。

あとは雄二の勝負ですべてが決まる。

「ああ。任された」

ぐつと力強く握り返された。

「……………（ピ）」

ムツツリーニが歩み寄り、雄二に向かってピースサインを向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フッ）」

ムツツリーニは口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に

来てください」

戻ってきた高橋先生がクラス代表二人に声をかける。

「……………はい」

短く返事をして、霧島が出ていく。

「じゃあ、行ってくるか」

そういつて雄二も霧島の後について言った。

「みなさんはここでモニターを見てください」

高橋先生が機械を操作すると、壁のディスプレイには、視聴覚室の様子が映し出された。

先に霧島が席に着き、つづいてやってきた雄二も席に着く。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分、満点は1000点のテストです』

画面の向こうでは日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しにしたまま

二人の机に置いた。

『不正行為は即失格となります。いいですね？』

『……………はい』

『わかっているぞ』



『では、始めてください』

二人に手によって、問題用紙が表にされる。

「吉井君、天咲君、いよいよですね……………」

「そうだね。いよいよだね」

「ああ、そうだな」

「これで、あの問題がなかったら坂本君は……………」

「集中力や注意力が劣る以上、延長戦では負けることになるだろうね」

「けど、あつた場合は……………」

「僕たちの勝ちだ……………」

誰もが固唾をのんで見守るなか、ディスプレイに問題が映し出される。

次の（ ）の中に正しい年号を記入しなさい

( ) 年 平城京に遷都

( ) 年 平安京に遷都

( ) 年 鎌倉幕府設立

( ) 年 大化の改新

「あ……………」

出ていた。

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私達っ……………」

「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

そろったFクラスの皆の言葉。

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおっ！』

教室を揺るがすような歓喜の声。

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島祥子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第十九問（後書き）

頑張ってAクラス戦終わらせてみました。

感想お願いします。

## 第二十話（前書き）

一巻終結の予感！

## 第二十話

.....  
.....第十五問.....  
.....

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはないです。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだ俺達に対する高橋先生の締めめのセリフ。

ああ、わかってるさ、わかってるとも。完全な俺らの敗北だ。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島が歩み寄る。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「あの世に送ってやる。安心しろ。二度と目は覚まさないからな……」

俺はあえてニコニコした顔で、いたる所をバキバキと鳴らしながら歩み寄る。

「吉井君、天咲君、落ち着いてください！」

「兄貴！？それはまずい！止めるんだ！」

明久は姫路に、俺は朱美に後ろから抱きつかれた。

「……だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに」

この点数だと

「」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ!」

「アキ、落ち着きなさい!アンタだったら30点もとれないでしょうが!」

「それについては否定しない!」

ああ、明久よ。お前は小学校レベルの問題でも赤点クラスなのか、おまえのバカさが、身にしみわたるようだよ。親友として悲しすぎて。

「それなら、坂本君を責めちゃだめです!」

「くっ!なぜ止めるんだ姫路さんに美波!このバカには喉笛を引き裂くという

体罰が必要なのに!」

「それって体罰じゃなくて処刑です!」

「大丈夫だ雄二。俺は手の小指から、ポキンポキンと折れていく骨の音と、

お前の絶叫を聞きながら、長い時間をかけて殺す体罰にしてやるからな」



俺は笑顔を崩さない。それとは別の意味で笑っている面もあるが。

「兄貴！それは処刑を通り越して拷問&死刑だ！」

朱美が頑張つて俺のゆく道を塞ごうとする。

「ちっ、命拾いしたな雄二。だが次は必ず……」

「「次なんてない（わよ）×2（です）！」」

三人の女子から否定された。愛されてるんだな雄二よ。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと

油断してなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

図星か。

「……ところで、約束」

そういえばそうだったな。負けたほうは勝ったほうの言うことを聞くって

約束が確かに存在したな。

「……！！（カチャカチャカチャ！）」

ムツツリーニが速攻でカメラの整備をし始めた。

一体何を撮ろうとしてるんだ？明久までなんかし始めたし。

「わかっている。何でも言え」

何を言うつもりなんだ？ムツツリーニや明久に関係のあることなのか？

「……………それじゃ

」

霧島がなぜか姫路に一度視線を送り、また雄二を見てから、息を吸う。

「……………雄二、私と付き合って」

言い放った。

コンツ。木槌で机を叩く音が教室中に響き渡る。

「こ、この音は!?!」

「これより異端審問会を開く。今回はFFF団の未ならぬ、Aクラスの男子生徒も混ざっているぞ。」

さて始めようか」

雄二はいつの間にか、鉄の十字架に張り付けられ、鎖で動けないように固定され、教壇の上に立っていた。

もちろん俺達は、死神の鎌を持った状態で、俺と須川は議席に、他のみんなは

議席を囲むようにたっていた。

「罪状、被告 坂本雄二は、霧島翔子と幼馴染な関係だけでなく、男と女の付き合いをしようとしている。」

「これは、異端審問会の血の盟約に背く行いである。相違はないか？」

「相違ありません！」

「俺達の霧島さんを返せええーっ！」

「そっだそっだー！」

「皆、静粛に！それでは被告に死刑のやりかたの選択肢を与えよう」

「ふ、ふざけるな！？俺はまだ翔子と付き合いなんていってないぞ！？」

「？焼死刑 ？集団リンチ ？串刺し さあどれが良い？」

「誰だつて？を選ぶにきまつてるだろう！？唯一死なないかもしれ  
ない

「選択肢なんだ！」

「総員かかれえーっ！」

『おおおーっ！』

「ちょ、こつち来んじゃねえっ、うわあああああああああああああああ  
あああああ……！！！」

迫りくる、皆の足や手、避けることもできず食らい続けるのみ。

「そろそろいいだろうっ、引けえーっ！」

俺がそういうと、異端審問会の連中が下がって行った。

でもまさか、ここで告白するとは、霧島もなかなかやるもんだな。

普通、恥ずかしくてこんな人のたくさんいるところではいえないだろうっ。

それに、殺されることも目に見えてるしな。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

いつのまにか速攻で復活を遂げた雄二が霧島に言う。

「私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

なかなか直球でいうな霧島は。なんか男らしいってゆうか。

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……………私には雄二しかない。他の人なんて興味ない」

「拒否権は？」

「……………ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに」

ぐいっ　つかつかつか

「霧島、ちょっと待ってくれ」

俺は教室を出て行こうとした霧島に声をかける。

「……………何？天咲。私にはこれから用事がある」

「こ、鋼侍！た、助かった。俺を助けてくれ！」

雄二は俺に向かってなにかほざいているが、俺はスルーした。

「メルアド教えてくんないかな？雄二監視用ってことで」

「……………わかった。天咲やっぱいい人。ご飯もとてもおいしかった」

霧島は、雄二の首根っこを掴んだまま、俺のケータイと赤外線通信をする。

「や、やめろ！そんなことをしたら俺の、俺の人生が!？」

「ああ。また家に食べに来てくれ。皆も一緒にな」

「・・・・・・・・わかった。それじゃあ私が行ってくる」

そう言って、霧島は、雄二の首根っこを掴んで出て行ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

教室にしばしの沈黙が訪れる。

皆、あまりの出来事に言葉が出ない。

あ、そうだ。前に雄二が姫路の胸を凝視してたって送ったかなきゃ。

俺は携帯を開き、霧島に向かってメールを送る。

よし、送信っと。

ポチッ

『雄二、浮気は許さない』

『え？いきなりなんだ？翔子って目が、目があああああああああああああ  
ああああ！！！！！！！！！』

断末魔の叫びが、学校を包みこんだ。

「さて、Fクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ」

呆然と立っている、皆の耳の中に野太い声がかかる。

音のしたほうを見やると、そこには生活指導の西村先生（鉄人）が立っていた。

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

え？我がFクラス？

「おめでとう。お前らが戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。」

これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ！』

クラス男子生徒全員の悲鳴が上がる。

生活指導の西村先生、通称鉄人は、『鬼』の二つ名を持つほど厳しい教育を

する先生だ。まあ俺は別のことであの人に慣れてるから、

いまさら苦じゃないんだけどね。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。」

でもな、いくら『学力が全てじゃない』と言っても、人生を渡っていく上では

強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、

ないがしろにしているものじゃない」

皆は絶望したような顔で鉄人を見ていた。まあ俺もはっきり言って嫌だが、

そこまでじゃない。これからFクラスがどうなっていくのかも見てみたいしな。

「吉井、天咲（兄）。お前たちと坂本は念入りに監視してやる。」

なにせ、開校以来初の 観察処分者 二人とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通り楽しい

学園生活を過ごして見せます！」

「……………お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

ため息混じりのセリフ。明久のあまりのやる気の無さにあきれているようだ。



「とりあえず、明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやるわ」

まあ予想通りの展開だな。ああ、俺のつかの間の休みの時間が!?

「さあ〜て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも

食べに行きましょうか？」

「え？美波、それは週末って話じゃ

」

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ!?! 姫路さん、それは話題にすら上がってないよ!?!」

向こうは向こうで楽しそうにハーレムやってるな明久は。

「に、西村先生！明日からとは言わず、補習は今日からやりましょう！」

思い立ったが仏滅です！」

「『吉日』だバカ」

俺は一応突っ込んでおく。

「そんなことどうでもいいですから」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが」

言葉を区切って、明久達を見る鉄人。

「無理することはない。今日は存分に遊ぶといい」

鉄人はニヤニヤしながら明久に言い放った。

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には

伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待っ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「アキ、こんな時だけやる気を見せて逃げようだなんて、そうはいかないからね！」

「ち、違っよ！本当にやる気が出たんだっば！」

「吉井君！その前に私と映画です」

「姫路さん、それは雄二じゃなくて僕となの！？」

そういって、明久たちは去って行った。

「さて、俺らも帰るか。朱美」

「うん。そうだね」

俺が朱美に帰るように言うと、後ろから声がかかってきた。

「ちょっと、待ちなさい。天咲」

後ろを見てみると、木下が俺の前にたっていた。

「ん？どうした木下？俺になんか用か？」

俺の隣を見てみると、朱美がなぜかニヤニヤしていた。なんだこいつは？

「この後あいてる？この前のお礼がしたいんだけど・・・」

多分、お礼というのはマフィアから助け出したときのことだろう。

「別にお礼なんかいいよ。そっちに何もなかったんだし

俺はそれだけで充分だ。」

そういうと、木下は少し困ったように眉をひそめた。

「それじゃあ、私が納得いかないの！つべこべ言わず付いてきなさいよ！」

そういって、俺の腕をとった。こいつお礼をしに来たんじゃなかったっけ？

「兄貴、アタシ先に帰ってるから。お二人で楽しんできてね」

「お、おい！朱美逃げんじゃねえ！戻ってこい！」

しかし、もう俺の視界には朱美はいなかった。どんだけ脚早いだあいつは？

「さっさとついてきなさいよ！」

そういつて、俺の頭を殴ってきた。

「いてえな……なんでそんなに怒ってるんだよ……」

まあそんな感じで、Aクラス戦を終えた。

まあいつか。

## 第二十話（後書き）

やっとAクラス戦ならびに一巻目が終わりました。

なかなか長いですよね一巻って。

まあ次は二館に突入します。

感想待ってます。

## おまけ 4 (前書き)

今回もおまけです。

ここで鉄人がなぜ鋼侍のことを知っているかが明らかになります。

## おまけ 4

今日はあのAクラス戦から一日たち、初めての補習を受けることになった

俺達Fクラスは、日曜日だというのに学校に来ていた。

「は〜・・・おなかすいた」

近くで明久がダウンした。飯の時間はとっくに過ぎているはずなのに、

先生は補習を止めようとはしない。

「俺も腹減った。早く終わらせてくれないかな？とっくに約束の二時間越してるじゃん」

「こら、吉井に天咲（兄）、お前らがさっきから愚痴ってるから、補習が終わらんのだぞ？」

わかつたら、さっさとノートに書き写せ」

「くへ〜い」「」

今、教壇の上にいるのは生活指導であり、俺達の担任でもある西村先生、通称鉄人である。

この人は教え方は上手いのだが、厳しすぎる。『鬼』と謳われるほど厳しい。

俺と、明久がつい癖で愚痴ってしまうのだが、それを注意されることで

授業は止められ、俺達は叱られる。

もちろん、周りからの鋭い視線も痛いほど伝わってくる。

「よし。これをノートに書き写した奴から補習は終わりだ。もう帰っていいぞ。」

もちろんここで飯を食ってからでもいい。それは各自の判断にかせる。以上だ」

そういつて、教室を出て行った。

「あーづがれだ、腹へっだよ」

明久は完全に伸びきっている。朝もまともに食ってこなかったんだろつ。

明久の腹から愉快的な音が教室中に鳴り響く。

「ワシらも疲れているんじゃ。特にお前たちのせいでのう」

「そうだよ兄貴。兄貴たちが愚痴ってばかりだったからまともに

寝れなかったじゃないか！どうしてくれるのさ、私の大事な睡眠時間！」



少し離れた席からやってきた秀吉と、隣の席の朱美が俺達に向かって文句を言ってきた。

「お前はホントに寝てばっかだなおい。夜中なんかやってんのか？」

実際、俺は任務がなければ、風呂入って飯食ってそのまま寝るとい  
うのが当たり前だから、

夜中のこいつの行動は知らない。ここは聞いておくべきだろう。

「うん。ゲームとか、勉強とか、ネットゲとか、スカイプやりながら  
やってるよ」

「ほう、徹底的にダメ人間かと思ったら、一応勉強はしてんだな。  
明久も見習えよ。」

ゲームばっかやってないで」

明久に話を振ってみる。

「ふっ……僕には昨日の出来事のせいで生活費がなくなって、

ガスも水道も電気すらない状態なんだ。勉強なんてしてる暇はな  
いのさ」

歯をキラリッ　と輝かせながら言う。

「それではまともに生活すらできんではないか！？　かっこつけてる  
場合じゃないぞい」

秀吉は呆れながら、明久に言う。コイツよく生きてるよな。

「まあ自業自得だな」

雄二もそんなことを言っていた。

「……………（コクコク）」

ムツツリー二も同意見のようだ。

そんなことをぺちやくちゃ話していると、俺の携帯が鳴った。

授業中だったため、携帯はマナーモードにしてあったので、ブルブル震えるだけだったが。

「はい。もしもし？……………了解。すぐそちらに向かいます。」

武器は……………SSGとMP5K、閃光弾、サバイバルナイフでお願いします……………はい……………

はい……………わかりました。学園付近にバイクの手配をお願いします。それでは……………」

ポチッ

『……………』

教室内が沈黙した。

「え………？あ、うん………それじゃあねっ」

俺は少しおちゃらけて、ウインクをして脱走を試みた……が、

『まていつ！』

肩を雄二に、腕を明久に、腰を朱美に、足をムツツリーニ

（おそらく朱美のパンツを見るためだろう）、頭を秀吉に抑えつけられた。

「ちょ！こ、これはまずいんだってば！早く行かせろって！」

しかし、誰も放そうとはしない。それどころか力を強くしてくる。

島田は何が何だかといった顔で、姫路はあわあわしているだけだったが。

「鋼侍、なぜ途中の会話にスナイパーライフルとサブマシンガンの名前が

入ってきているんだ！？詳しく話せ！」

これは雄二。

「そっだよ鋼侍！君はどこへ行く気なんだ！？まさか死ぬ気じゃないだろうっね！？」

これは明久。

「やめるんじや鋼侍！いくらお前の戦闘力でも無理じゃ！」

これは秀吉。まあ言わなくてもわかるだろうけど。

「兄貴！やめる！？何の事だか全然わかんないけど、止めるんだ！」

これは朱美。ノリでくつついてみただけだろこいつは。

「……………危険すぎる」

これはムツツリーニ。

さあどうやって言い訳をしたものか。

ここで選択肢発動！！

？正直なことを話す

？みんなを振り払って逃げ出す。

？適当にごまかす

？は論外。秀吉は知っているとはいえ、皆に教えるわけにはいかない。  
い。

？は危険すぎる。先生が来たら余計面倒だ。

ここは？を選ぶしかない！！

「じ、実は……………」

『実は？』



った。

「おお、君か。今さっき CN スティールマンがそっちに向かって、

さっき潜入したよ。あの人だけでも大丈夫だろうけど、念のために君を呼んだんだ。

ミッションは後藤信也（年齢25歳 独身 元暴力団長）の抹殺だ。

おそらく配下を連れてると思うけど、あの人が多分排除してくれてると思うから、

君は本命を狙ってくれ。わかったな？」

「了解です。今ターゲットはどこにいますか？」

これを聞かない限り、俺は行動ができない。情報があってこそその暗殺者だ。

「前回同様、建物の最深部にいる。遠距離からの狙撃は難しそうだね。

それにあの人が一人で入って行って、一人で蹴散らしてるだろうから、

もう彼は見つかったはず。警戒しているはずだよ。それじゃあ気をつけてね」

「了解つと」

俺は無線を切り、スティールマンのいるところまで向かう。

あの人が特攻すると、敵が虫けらのように跳んでいくから、わかりやすいつたらありゃしない。

スティールマン、その名の通り『鉄男』だ。強靱な肉体をして、

防弾チョッキなしで銃撃の中を走り回り、弾があたってもかすり傷しかできないことから、

そのコードネームがついた。まあウチの支部では最強の男だ。俺でも勝てない。

おっと、そんなことを考えてるうちに、スティールマン発見。

相変わらず敵が跳んでいつている。もはや化け物だな。

「じゃまだぞ貴様等！死にたくなければどけええい！」

そんなことをいって、巨大な棍棒を振りまわしていた。

見た目からして、棍棒の重さは軽く200?を越しているだろう。

それをそこらへんに落ちている棒を振りまわすようにして攻撃しているんだ。

人間業じゃない。

スティールマンが無双をしていると、入口付近に穴ができた。

俺はその穴付近まで近付き、SSGを構える。

銃を構えた俺を見たことで恐怖したのか、ターゲットは腰を抜かしていた。

今がチャンスだ！

パンツ

乾いた音がして、ターゲットの頭を銃弾が貫いた。

バタツ

ターゲットが倒れた。それを見ていた集団は、スティールマンになりぎ倒される。

「ふうっ……ミッションコンプリートと……怪我はないっすよね、

政府非公式暗殺部総司令官 西村 宗一 CN スティールマン

であり、文月学園、生活指導の鬼であり、俺達Fクラス担任 西村先生 通称鉄人さん」

「なぜ、いちいちそんな長ったらしいことを言っているんだお前は？

それにしても今日は来るのが遅かったな」



鉄人は困った奴を見るように言った。

「だってひどいんですよ。いきなり電話がかかってきたと思えば、本部からで、

皆の前で電話しなくちゃなんなくなつて、気付いたらみんなに取り押さえられている

という状態ですよ？ちゃんと間に合ったことをほめてくれと言いたいぐらいです」

鉄人は愉快そうに笑った後、俺に言ってきた。

「そうかそうか。それはご苦労だったな。本部には俺から連絡をしておくから、

お前は先に帰ってていいぞ」

「わかりました。それではお先に失礼します。

一旦学校に戻って荷物取りに行かなきゃいけないけど」

俺はその場を離れ、学校にバイクで戻った。

教室に帰ったら、行きと同じようなことが起こり、俺の体力はごっそりと削られてしまった。

とほほ………。



## 第二十一話（前書き）

やっと二巻に到着です。

長かったなああああ……。

まあそんなこんなでやっていこうと思います。

## 第二十一話

.....  
..... 清涼祭アンケート .....  
.....

### 『第一問』

学園祭の出し物を決める為のアンケートに

協力ください

『あなたが今ほしいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良  
いかもしれませんね。

写真館なども候補になり得ると覚えておきます。

『土屋康太の答え』



俺らの通う文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

今現在、Fクラスの状態は……。

「天咲団長！こいつ！」

「勝負だ、須川副団長！」

「絶対にアンタを超えてやる！見せしめに場外だ！」

「言っただな！？俺の魔球でお前を三振にしてやる！！！」

準備もせずに野球をEnjoyしていた。

サツとマウンドを足で均し、ミットを構えている雄二のサインを待つ。

神童とまで呼ばれるほどの頭脳を持った悪友のことだ。

作戦に関しては俺よりも上だから、ここは雄二に任せるべきだろう。

『次の球は』

きた。雄二のサインだ。まず最初は球種の指示が来るようになってくる。

さて何を投げればいい？親友よ！

『お前の豪速球を』

ほう、球種は豪速球か。さてどこに投げる？

『バッターの頭に』

「それ退場しろってことか!？」

確かに場外まで飛ばされることはないが、それは何か違うような気がする。

まあ一応、雄二の指示に従うように投げようかと思っていると、

「貴様等、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

怒髪天をつく勢いで俺らの担任である西村先生、通称 鉄人が校舎内から走ってきた。

捕まったら最後。あの鉄拳によって殺されてしまう!!

「吉井！貴様がサボりの主犯か！」

なぜか守備をしていた明久が怒られている。ピッチャーは俺なのにな。

まあありがたいからいいけど。

「ち、違います!どうしていつも僕を目の敵にするんですか!？」

明久は逃げているが、全く振りきれていない。さすがは我が支部の総司令官。

鍛え方が全くと言っていいほど違うな。

「雄二と鋼侍です！クラス代表の坂本雄二と天咲鋼侍が野球を提案したんです！」

ちっ、余計なことを言いやがって！後で半殺しにしてやる！

まあ確かに野球をしようなんて言い始めたのは俺と雄二だけだな。

だっつつまんないんだもん

俺と一緒に逃げてる雄二に視線を送る、アイツは俺に視線でこう言ってきた。

『フォークを 鉄人の 股間に』

「違う！今は球種なんて聞いてない！それやったら余計に怒られるよな！？」

「全員教室に戻れ！この時期になってもまだ出し物が決まってないなんて、

ウチのクラスだけだぞ！」

魂まで届きそうな鉄人の恫喝が響き、俺らは小汚い部屋に戻されてしまった。



「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない」

時期が来たんだが

野球を中断された後、Fクラスの代表である雄二は床にござを敷いて座る

俺達を見下ろしながらそんなことを言ってきた。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねる

ので、後は任せた」

心の底からどうでもよさそうな態度の雄二。

あの様子だと、興味が無いから他の人に押し付けて寝る、という最低な行動をとるつもりだな？

野球の話も、もとは雄二が言って俺が乗ったら皆も乗ったって感じなので、

全くやる気がないんだろう。

そんなことを思っていると、姫路と明久が話を始めていた。

顔が赤かったりしているので、よほど明久と喋るのが楽しいんだろう

う。

しかし、途中で咳をしたりしていた。やはりこの環境は姫路にとって悪いものなのか。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

不意に飛び込んできた雄二のセリフで今の状況を思い出す。

まだつづいていたのかこの話。早く終わらないかな。

あくびをして、少し周りを見渡すと、朱美が幸せそうに寝ていた。

殺してやりたい気持ちがふつつつとわきあがってくる。

「え？ウチがやるの？うん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよっと困るかな」

島田は突然指名されて、少し困っているようだ。

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんのほうが適任じゃないの？」

明久はそんな提案をしていた。まあ確かに人一倍楽しみにしているのは姫路だしな。

「え？私ですか？」

話を振られて姫路が小首をかしげる。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

眠たげに返事をする我らがクラス代表。

まあそれが、姫路のいいところであり、悪いところでもあるだろう。しかし、こういうときには速効性をもとめた奴がやるのが適任だ。

「それにね、アキ。瑞希も召喚戦争に出るのよ」

「??そうなの?」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりです」

「学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ」

今回の『清涼祭』では『試験召喚戦争』という企画が催されるらしい。

これはこの学園の『試験召喚システム』の宣伝のためであるらしいがな。

「へえ・・・二人も出るのか。俺らも出るんだよ。この寝ぼすけ野郎と一緒にな」

俺は寝ている朱美を指差した。一体いつまで寝てんだこいつは。

「そつなの?それじゃあライバルね。良い勝負をしましょう」

島田が俺に握手を求めてきた。

「ああ。望むところだ」

俺も握り返すことで、肯定を見せた。

「でもウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってばお父さんを見返したいって

言ってきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

まあ当然の質問だな。俺も聞いてみたかったので、耳を傾ける。

「うん。家でいろいろ言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！』

って怒ってるの」

「ふーん。姫路が怒るなんて珍しいな」

「だって皆のことを何もわかってないくせに、Fクラスっていう理由だけで

バカにするんですよ？許せませんっ」

「「「「「「「「「「「」

すまないな。姫路。お前のお父さんの言ってることはあっているよ。

このクラスはバカが集まりだと俺も思う。

「だからFクラスのウチと組んで、召喚戦争で優勝してお父さんの鼻を明かそうってワケ」

なるほど。実力学年三位の姫路と、問題さえ読めればそれなりの点数が取れる

島田と組めば、優勝だって不可能じゃないかもしれない。まあ俺達がいなかったら

話になるが。

「四人とも。こっち話を続けていいか？」

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だよな？」

「だからウチは召喚戦争に出るって言ってるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう？」

雄二はチラッと明久を見た。ほう、無理にでも明久にやらせるつもりだな？

「ん〜……………。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど……………」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その

中から島田が

「二人選んで決選投票をしたらいいだろう」

皆もいいな、と雄二がクラスメイト達に告げる。

すると、教室内からちらほらと推薦の音が聞こえてきた。

『吉井が適任だと思っ』

『やはり坂本がやるべきじゃないか？』

『姫路さんと結婚したい』

『朱美ちゃん萌えええええええ』

『ここは須川にやってもらった方が』

そろそろ姫路と朱美にラブコールを送ってるヤツをハッキリさせた方がいいかもしれない。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

そうやって、明久に一票を投じたのは秀吉だ。

「俺も明久が適任だと思っ」

俺も明久に一票投じる。めんどいことは御免だからここは明久が最もいいだろう。

「って、秀吉に鋼侍。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな〜なんて」

「それは他の皆とて同意見じゃ。ならば適任の者にやってもらったほうが良いじゃろっ？」

「むう……………。それはそうだけど……………」

「そうだぞ、明久。お前ほど適任な奴は他にいない。だからやれ」

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね〜。それじゃ……………」

ある程度候補の名前が挙がると、島田はボロボロの黒板に決選投票候補者

の名前を書き連ねた。

『候補？……………吉井』

おっ、明久だ。

『候補？……………明久』

これも文字通り明久だ。

「さて、この二人のどちらがいいか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない」

「そつだぞ雄二。どちらも人類の底辺じゃないか。こんなの選んでどうする?」

俺は付け加えを入れる。

「ひどいよ鋼次っ!さすがに人類の底辺までは入ってない!」

「じゃあ、逆三角形の頂点」

「うん。それなら安心だ」

逆三角形の頂点。それは下向きになっている部分のことなんだが、

明久は気付いていないようだ。さすがバカだな。

『どっつする?どっちがいいと思っ?』

『そつだなあ…….…….どちらもクズには変わりないんだが…….』

「こらあっ!真面目に考えてるふりして、人をクズ呼ばわりするんじゃない!」

やっぱりここはノリの良いクラスだ。楽しいよ。

「ほらほら、アキつてば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まっただから」

前に出て議事やらないと」



「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじ引かされてる気がするよ」

そういつて、明久は渋々と席を立ち、前に出た。

「んじゃ、あとは任せたぞ。ふぁ〜……………」

入れ替わりに席に戻っていく雄二。あくびをこらえる気もないようだ。

全身からだるいオーラが立っている。

明久と島田がなにかを話してから再開される。

「それじゃ、ちゃちゃっと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば

挙手してもらえろ?」

島田がそう告げると、始めにムツツリーニが手を挙げた。

「はい、土屋」

「……………(スクツ)」

「……………写真館」

「……………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

まあそうだろうな。男子にとっては楽園、女子にとっては地獄の写真館ができあがりそうだ。

一応、明久はその意見を黒板に書く。

『候補？ 写真館「秘密の覗き部屋」』

「次、はい、横溝」

「メイド喫茶」と言いたいけれど、流石に使い古されていると思うので、

「ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

中身はただの喫茶店だが、着ている服が違うのか。確かに斬新で面白そうだが、

金がかかりすぎるな。

『斬新ではあるな』

『憧れる女子も多そうだ』

『でも、ウェディングドレスって動きにくくないか？』

『調達するのも大変だぞ』

『それに男は嫌がないか？人生の墓場、とか言うぐらいだしな』  
そんな意見に、クラスが少しざわめく。

そんななか、明久はただ黙々と意見を書いていた。

『候補？ ウエディング喫茶「人生の墓場」』

「さて、他に意見は はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。」

そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってわけじゃない。そもそも、食の起源は

中国にあるという言葉があることからわかるように、こと『食  
べる』という

文化に対し 「

なんか壮絶なことを語っている須川。おまえとただこのことに固執してんだよ。

明久もわけがわからないといったふうに、黒板に書き始めた。

『候補？ 中華喫茶「ヨーロッパ」』

明久が書き終わると、鉄人が入ってきた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

島田がそういうと、鉄人はゆっくりと黒板のほうを見る。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

「……………補習の時間を倍にしたほうがいいのかもしれんな」

俺もいまさらになってそう思いました。

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです』

『僕らがバカなわけではありません』

補習の時間を増やされたくない皆が必死になって明久のせいにして  
いる。

さすがにここまでくると哀れだな。

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝により、背筋が伸びる一同。しかし、朱美は寝ているままだ。

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言ってるんだ！」

もはや、味方がいないな明久。

まあこうして、色々やっているうちに中華喫茶に決まったわけなんだが。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

そうやって、須川が立ち上がる。まあ意見を言ったやつが何もできないいいんじゃない

話にならないからな。

「……………（スクツ）」

それと、なぜかムツツリーニも立ちあがった。

「ムツツリーニ、中華料理なんてできるのか？」

俺は一応聞いてみる。

「……………紳士の嗜み」

中華料理ができることが、紳士の嗜みなんて聞いたことない。おそらくチャイナドレスが見たくて、

中華料理店を回っていたら、いつのまにか作り方をおぼえていたとかそんな感じだろう。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ

ホール班はアキのところに集まって」

いつのまにか、明久がホール班のトップにされていた。

「それじゃ、私は厨房班に」

「ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと！」

「そつだぞ姫路！おまえは可愛いんだからホール班に回ってもらわないと」

俺は追加で、姫路が厨房班にならないよう仕向ける。じゃないと、死人が出る。

『明久、鋼侍、グツジョブじゃ』

『・・・・・・・・・・・・・・・・！！（コクコク！）』

その破壊力を知っている秀吉とムツツリーニのアイコンタクト。

一番の被害者だった雄二は寝ているせいかきずいていない　　は  
ずなのに小刻みに

震えている。おそらくまだ起きてるんだな。

「え、えと、ありがとうございます。私ホールでも頑張りますねっ」

そういつて、姫路はガッツポーズをとった。ふう、危機回避成功。

あれ？いま『も』っていわなかった？

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

おそらく、島田もかわいって行ってほしいんだろう。しかし、

「うん。適任だと思う」

まあこうなるよな。

「それなら、ワシ（俺）も厨房にしようかの（な）」

「秀吉、鋼侍、何をバカなことを言ってるのさ。そんな可愛いんだから、もちろんホールに決まってる」

みぎやああっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命にかかわる大事な骨が！

「島田、こうやってもうちよつと捻ってみな、もつと楽しいことがおこるから」







## 第二十一話（後書き）

感想よろしくお願いします。

## 第二十二話（前書き）

バカテスのアニメが終わってしまいましたね。

でもまあ二期やるんだろっけど。

## 第二十二話

. . . . .  
. . . . .  
. . . . .

以下の問いに答えなさい

『バルト三国と呼ばれる国名をすべて挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数があっていないことに違和感を覚えましょう。

天咲朱美の答え

『トヨタ、三菱、ホンダ』

教師のコメント

それは車のメーカーです。場所ですらありません。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「なあ。雄二」

「うん？なんだ鋼侍、俺に何か用か？」

俺は帰りのHRホームルームが終わった後。暇そうに寝ていた雄二を起こす。

「おまえ、完全に清涼祭に興味がないだろ」

「ああ。だって面倒くさいだろ？明久を弄るためならなんでもやるが」

「よし、お前には死んでもらおう」

俺は、拳に息を吹きかけ、殴る体制に入る。

「ちょ、お前止めろって！お前のパンチを食らったら俺の意識が吹き飛ぶだろう！」

そういつてから雄二はとっさに身体を起こし、俺を見る。

俺は殴る手を、腰まで下げて、話を続けようとする。

「あまり面白くはないが、大事なことがある」

俺が真剣な表情で雄二を見ると、雄二も少し真剣な表情をした。

「おそらく姫路は、今回の清涼祭が上手くいかなければ転校することになるだろう。」

明久もさつき島田に呼び出されていたから、そのことについて話しているだろうな

「姫路が転校？どういうことだ？」

よし、食らいついてきたな。これできちんと話を聞いてくれるだろう。

「姫路の父親が、この環境に腹を立てているらしい。」

まず一つ目が、用意されている道具。ござとみかん箱という貧相な設備。

これはウチにたんまりある金を使えば何とかなるし、おそらく出し物の収入でも

何とかなるだろう。

二つ目の問題が、老朽化した教室。これもウチの金で何とかなるが、

学校の承認を得なければ、できないことだ。

三つ目の問題は、競争のできるライバルが少なすぎることに、

英語なら朱美が最強だが、他は俺しかいない。神童と謳われていた

雄二も勉強すれば何とかなるが、やはり少なすぎる。」

「それじゃあ喫茶店だけでは不十分だな」

雄二は話に納得したように、結論を述べる。

「ああ、そうだ。けど今回の大会で、姫路や島田が先に対策を

練っていたみたいだし、三つ目の問題は大丈夫だろう。

俺と朱美も出るし、アピールにはなる。」

これで、一応Fクラスにも、姫路以上も奴がいたり、

渡り合える奴がいるということを知ってもらえる。

「そうか、まあ翔子が参加するようだと、なかなか難しいかも知れないが、

英語なら絶対に勝てるな。他の連中は眼中にないだろう」

Aクラスの霧島や木下、久保などが出てきたら面倒だが、

それ以外なら一瞬でけりをつけられるだろう。

確実ではないが、確率としては俺らが優勝する確率は非常に高い。

「それに俺らが優勝すれば、喫茶店の宣伝にもなるし、一石二鳥というわけだ」

「あとは、二つ目の問題だが、これは学園長に直訴するしかないだろう」

雄二がそう言うが、二つ目の問題が最も難しい問題だ。

教室の質を上げてしまうと、

何のためのクラス分けか、わからなくなってしまうため、

学園長の許しを得るのは非常に困難だ。しかし、それ以外に方法はない。

「まあそうするしかないな。生徒の健康に害を及ぼすような

状態であるなら、改善要求はできるだろうが、



あの学園長は頭の固いことで有名だ。簡単に要求が通るか？」

現在の学園長、藤堂カヲルは、自分の利益になること以外は動かない頑固者だ。

要求を呑むにしても、絶対にこっちは何かをやらなければいけない。そついう面倒な人だ。

「まあ難しいだろうが、やってみなけりゃわかんないだろ？」

雄二は腕を組みながらそついった。

「そつだな。明久たちの話が終わったら、あいつらも誘って、

学園長に会いに行こう」

しばらく待っていると、明久と島田、秀吉が教室に入ってきた。

俺達は先ほどまでの話を三人に聞かせて、

明久、俺、雄二が学園長室を目指して教室を後にした。

『……………賞品……………として隠し……………』

『……………こそ……………勝手に……………如月ハイラン

ドコ……』

声が聞こえてきた。

賞品？如月ハイランド？何の話をしているんだ？

「どうした、明久、鋼侍」

「いや、中で何か話をしているみたいんだけど」

「俺もなんか聞こえてきたぞ。如月ハイランドがなんとか」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。」

「さっさと中に入るぞ」

取り込み中かどうかは向こうが判断することだから、別にはいつても構わないだろう。雄二の言うことはもっともだ。

「失礼しまーす！」

学園長室のドアをノックしてから、俺達は中にずんずん入って行った。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

室内で俺らを迎えたのは、長い白髪の学園長様だ。試験召喚システム開発の

中心人物である。

「やれやれ、取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。

これでは話を続けることもできません。

「……まさか、貴方の差し金ですか？」

メガネを弄りながら学園長をにらんだのは教頭の竹原先生だ。

鋭い目つきとクールな態度で一部の女子からは人気が高い。

俺は大つきらいけどな。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を

使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長には隠しごとがお得意のようですから」

俺らにはわからないやり取りをしているが、正直どうでもいい。

早く要件を済ませたい。

「教頭、アンタ邪魔だからとつとと出て行ってくんないかな？」

「こっちは要件があるんだ。嫌味の言いあいなんてしてる暇があったら」

仕事でもしてる」

「なっ!?!」

教頭は俺の発言に心底驚いているようだ。

だんだん顔が険しくなっていく。

「アンタも良いこと言っじゃないか。ガキ。まあこの話はまた明日でね」

学園長は教頭にそんなことを言っている。

俺達のことはどうでもいいけど、教頭と喋ってるよりはいくらかましのような。

「……………そうですか。そこまで言われたのなら私は引きます。

天咲君、あなたはこれから気をつけることね」

そう捨て台詞を吐いて、学園長室から出て行った。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい?」

教頭がでていったことが嬉しいのか、少しトーンが高めの声だ。

「今日は学園長にお話がありました」

学園長の前にたち、雄二が話を切り出す。

「私は今それどころじゃないんでね。学園を経営することなら、教頭の

竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀って

モンだ。覚えておきな」

まあ言ってることは正しいが、こんなババアに敬語なんて使いたくない。

「失礼しました。俺は二年F組の代表の坂本雄二」

「俺が二人目のく観察処分者>天咲鋼侍。そしてこいつが」

「く」 学年を代表するバカです」

俺と雄二の声がピッタリ重なった。考えてることは一緒か。

「ほう……………。そうかいアンタ達がFクラスの坂本と天咲と吉井かい」

「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言ってますよね!？」

さっきの紹介でもきちんと伝わったか、やはり全校公認なんだな。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

まるで映画の悪役のように口の端を吊り上げる学園長。

なにか、向こうにもあるらしいな。

「ありがとうございます」

「礼を言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

雄二、よく切れないでいられるな。いつもならこんな大人な奴じゃないのに。

「Fクラスの設備について改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

やはりこうなるか。まあわかっていたことだから、雄二も大人な行動の

ままだろう。

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、

隙間風が吹き込んでくる酷い状態です」

あ、冷静じゃなかった。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、

今の普通の高校生にはこの状態は危険です。

健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

丁寧な口調の中にかすかな罵倒が含まれている。雄二もキレ始めたか。

「まあ要するに、死にたくなければ教室の設備を改善しやがれこのクソババア。」

こっちは身体の弱い生徒もいるし、体調を崩す奴だつてでてくる。

首が飛ぶ前に了承しやがれ、つてことです」

俺が結論を述べる。

「あの、学園長………?」

明久が思案顔になっている学園長に声をかけた。

「………ふむ、丁度いいタイミングさね………」

小声でなんか呟いていた。まあどうせ良からぬことを考えているんだろう。

「よしよし。お前たちの言いたいことがわかった」

「え?それじゃ、直してもらえますね!」

明久が期待を込めた口調で、学園長の次の言葉を待つ。

「却下だね」

「雄二、鋼侍、このババアをコンクリに詰めて捨ててごよう」

「いや、日本海にセメント固めにして捨てよう」

「……………明久に鋼侍。もう少し態度には気を遣え」

うぐむ。いい判断だと思ったんだがな。

「まったく、バカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「じゃないと串刺しにしますよ ババア」

「そうですね。教えてくださいババア」

「……………お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思っているのかい？」

学園長があきれ顔で俺らを見る。俺らが何かおかしいことでも言ったか？

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。」

ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

本当に死にたいのかこのババア……………！

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」



「と、いつもなら言ってるんだけどね」

明久の言葉を遮り、ババアが顎に手を当てて話を続ける。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなり、相談に乗ってやるうじゃないか」

やはり交換条件か。ここは呑むしかないな。

「その条件とは？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知っているかい？」

「もちろんだ。俺も出るしな」

「じゃ、優勝賞品と準優勝賞品と三位用賞品は知っているかい？」

「優勝賞品と準優勝賞品と三位用賞品だと？」

賞品があるなんて知らなかった。ただの大会だと思っていたんだが。

「学校側から送られる賞品は、賞状とトロフィーと

『白金の腕輪』が手に入る。

準優勝賞品は、『金剛の首飾り』が、

優勝賞品は、『琥珀の指輪』と、

『如月ハイランド、プレオープンプレミアムペアチケット』

が手に入るようになってるんだよ。

それに決勝は、最後に残ったペアの二人が戦うことになってるのさ」

ペアチケットと聞いて、雄二がピクツと反応した。霧島のことでも考えたのか？

「はぁ………。それと交換条件に何の関係が」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を

知らないのかい？」

慌てる乞食は貰いが少ないのことだろう。まあそつだな。

「この優勝賞品のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。

できれば回収したいのさ」

「回収？それなら賞品に出さなければいいじゃないですか」

明久の意見はもつともだ。だが、

「それをするにはできないだろう。一応正式な契約なんだろう？ババア」

「まあそうさね。こっちは『白金の腕輪』や『金剛の首飾り』」

『琥珀の指輪』で手がいつぱいだったから、気付かなかったのさ。

それに知ったのは最近だしね」

学園長は眉をしかめる。口調とは裏腹に責任を感じているようだ。

「それで悪い噂とはなんだ？」

「如月グループは如月ハイランドに一つのジnkス作るうとしていのさ。」

『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っというジnkスをね。

それにやり方が、プレミアムチケットを使ってきたカップルを

結婚させるコーディネートするつもりらしい。企業として

多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと!？」

雄二が突然大声をあげた。霧島のことを考えていたら怖くなったの  
だろう。

「どっしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

明久は事の重大さをわかっていないらしい。

「慌てるにきまつてるだろう！今ババアが言ったことは、

『プレオープンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グループ

の力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」

「う、うん言い直さなくてもわかってるけど」

「くそつ。ウチの学校はなぜか美人揃いだし、試験召喚システムという

話題性もたつぷりだからな。学生から結婚までいけばジंकクスとして申し分ないし、

如月グループが目をつけるのも当然ってことか」

悔しげに唇をかむ雄二。そこまで追い詰められているのか。

「ふむ。流石は神童とまで呼ばれていただけあるね。

頭の回転はまずまずじゃないか」

学園長が雄二の独白を受けてうなずく。随分と俺らのことを知っているな。

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画はそこまで悪いこと

じゃないし、第一僕らはその話を知っているんだから

行かなければいい話じゃないか」

明久は霧島の怖さを知らないらしいな。まあそろそろ知ってもいいころだけだな。

「……………絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……………」

行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……………」

俺の、将来は……………!」

雄二の目が虚ろだ。おおかた『一緒に行ってやる』なんて安受けしちまったんだろう。

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、ウチの可愛い生徒の将来を決定しようなんて計画が気に入らないのさ」

このババア、本当に生徒を可愛いなんて思っているのだろうか？

「つまり交換条件というのは」

俺は絶望している雄二の頭を殴って、戻ってこさせると、学園長に訪ねた。

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、

教室の改修ぐらいしてやるうじやないか」

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも

なしだ。私はお前たちに召喚戦争で優勝しろ、って言ってるんだからね」

まあ強奪なんてするつもりはさらさらないけどな。

「……………僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。

設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

やはりそうきたか、こんな取引で設備を導入したら、他のクラスに示しがつかないからな。

「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。

特別に今回だけは設備を変更することに目を瞑ってやってもいい」  
学園長からの提案。まあこっちにもたくさん利点があるし、結構いい取引だと思う。

「そこをなんとかオマケして設備の向上をお願いできませんか？」

僕らにとっては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」

「やめとけ、明久。これ以上はできない。教育方針のほうが

学園長にとっては大事だ」

「そういうことさね。で、取引には応じるのかい応じないのかい？」

「わかりました。その話、引き受けます」

「そうかい、それなら交渉成立だね」

学園長は『計画通り』といった顔をしてニヤリと笑った。

「俺も召喚大会にエントリーするつもりなんだがいいか？」

「別にかまわないさ。アレをとってさえくれれば」

「ありがとうございます」

そういって、俺は引き下がった。

「ただし、こちらにも提案がある」

雄二は学園長に話しかける。

「なんだい？言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。決勝はまた違ってくるが、

形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学、

といった具合に進めていくと聞いている」

一回戦の科目が数学と決まれば、一回戦に参加する全員が数学で戦う。

二回戦で科目が変わるのは、一回戦で消耗した点数でそのままやり合うと、

試合の派手さに欠けるからだ。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指示を俺にやらせてもらいたい  
ついでに、対戦表は、俺達と、鋼侍達を分けてくれ、最後に戦う  
形にしたい」

「ふむ………。いいだろう。点数の水増しだったら一蹴して  
ただ、

それぐらいなら協力しようじゃないか」



「……………ありがとうございます」

雄二の目つきが更に鋭くなった。まあ気持ちもわからんではないがな。

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で優勝できるんだろ  
うね？」

学園長が念を押してくる。

「無論だ。入賞者を二年F組で埋め尽くしてやる」

雄二の不敵な笑み。これは試召戦争の時にも見た、やる気全開の表情だ。

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「」「おつよっ！」「」

こうして、文月学園最低コンビが誕生した。

負ける気はないけどな！



## 第二十二話（後書き）

金剛の首飾りと琥珀の指輪の効果は、また後日説明します。

ご感想まっています。

第二十三話（前書き）

今日最初の更新です。

## 第二十三話

- - - - -  
- - - - - 第三問 - - - - -  
- - - - -

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15?、胸元はエプロンドレスのように若干強調しながらも

品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返し

が得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5?程度のヒールを 』

教師のコメント

裏面までびっしり書かなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと思っています。

天咲鋼侍の答え

『モフモフした着ぐるみみたいのが良い』

教師のコメント

確かに面白いかもしれませんがコストが大きいです。

しかし、それにしても君にそんな趣味があったとは。

天咲朱美の答え

『タヌキ寝入りをするための布団』

教師のコメント

君は学校を何だと思ってるんですか。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「いつもはただのバカみたいに見えるけど、坂本の統率力って凄いわね」

「ホント、いつもはバカなのにね」

「お前に言われたらお終いだと思う」

清涼祭初日の朝。

俺らの教室はいつも小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「ひどいよ鋼侍！？僕以上にバカな人だってこの世にはたくさんいるはずなんだ！」

頑張って力説しているが、結局自分のフォーローにはなっていないかった。

「結局、バカっていうのは認めるんだな」

「うっ。まあいいや。けどこのテーブルも良くできてるよね。パッと見は

本物と区別がつかないよ」

教室のいたる所に設置されているテーブル。もとはただのみかん箱

なのだが、

クロスを何重にも積み重ねることによって、小汚い箱が立派なテールブルになっていた。

「あ、それは木下君と朱美ちゃんが作ってくれたんですよ。どこから綺麗なクロスを持ってきて、

こう手際よくテキパキと」

姫路は秀吉と朱美をを尊敬の目で見つめていた。

さすが演劇部だな。色々な道具を持っている。だが朱美はなんなんだ？

そんな家庭的なことができたのかアイツは。まああの本人は疲れて寝ていらっしやるが。

「ま、見かけはそれなりになったがの。その分、クロスを捲るとこっじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、そこにはみかん箱が。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

島田の言うとおり、このみかん箱を見られたらイメージダウンは確実だ。

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の



胸の内にはしまっておいてくれるはずさ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は  
いませんよ、きっと」

俺はつい考えてしまう。教頭が学園長室を出て行く時の捨て台詞。

なにか意味があるんじゃないかと。それに何やらさつきから教室の  
外から視線を感じる。

気のせいかな？

「どうしたの？鋼侍。何か考えごと？」

明久は俺が心配になったのか、顔を覗き込んでくる。

「いや、なんでもない。多分大丈夫だろ。これならうまくいくはず」

俺は、適当に話をはぐらかす。

考えすぎか？しかしあの執念深い教頭のことだ。絶対に何か仕掛け  
てくるはず。

方法はわからんが、警戒しておくことに越したことはない。

そんなことを考えていると、後ろから、ムツツリーニが木のお盆を  
持ってきた。

上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・飲茶も完璧」

「おわっ」

明久は気付いていなかったようで、驚きの声を上げた。

「ムツツリーニ、それは味見用か？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・食べてみればわかる」

そういつて俺達に差し出してきた。

「わぁ・・・・・・・・美味しそう・・・・・・・・」

「土屋、これ食べちゃっていいんだよね？味見用って言ってたし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

俺、姫路、島田、秀吉の四人で手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく

頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「今度、作り方教えてくれよムツツリーニ。なんか奢るからさ」

「……………エロ本を買ってきて欲しい。最新刊を頼む」

そういつて、了承してくれた。エロ本か、アレって結構恥ずかしいんだよね。

まあ、胡麻団子は大絶賛。やっぱり皆も女なんだ。甘いものには目がないな。

まあ、秀吉は男の娘だけだな。俺も例外じゃないが……………って何認めてんだ俺は!?

「お茶も美味しいです。幸せ……………」

「本当ね……………」

姫路と島田が目がトロンと垂れる。トリップ状態になってしまった。

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「……………(コクコク)」

そういつて、明久は残った胡麻団子のうちの一つを軽く齧る様に口に含んだ。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず

辛すぎる

味わいがとつても んゴパっ

明久の口からありえない音が出た。まさかこれを作ったのって……。

「あ、それはさっき姫路が作ったものじゃな」

「……………！！（グイグイ！）」

「む、ムツツリーニ！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に」

押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！」

ムツツリーニが無理やり団子の残り半分を明久の口に突っ込もうとしている。

あれは決して一般人が口にはいけない代物だ！

「うーっす。戻ってきたぞ！」

と、そんなところに雄二が帰ってきた。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？なんだ、美味しそうじゃないか。どれどれ？」

そして、躊躇いもなく雄二の食べかけのバイオ兵器を口に運ぶ。

「・・・・・・・・大した男じゃ」

「雄二ってこういう役がとことん多いよな」

「雄二。キミは今、最高に輝いているよ」

「？お前らが何をいつているのかわからんが・・・・・・・・。。。

ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。

甘すぎず辛すぎる味わいがとっても んゴパっ」

さつきから聞いてると、ただ単にめちゃくちゃ辛いだけの兵器だね、これ。

「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

床に倒れ伏した雄二に対しての明久からの、『これは姫路さんの料理だよ。』

まさか酷いことなんて言わないよね？』と目で訴えている。

「ふっ。何の問題もない」

床に突っ伏したままで、雄二から返事が返ってきた。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

それはおそらく三途の川だ。

「ゆ、雄二！その川はダメだ！渡ったら戻れなくなっちゃう！」

まさか、あの一口で致命傷だなんて。なぜ形が崩れないのか凄く不思議だが、

相変わらず恐ろしいキレだな。

「え？あれ？坂本君はどうしたんですか？」

さっきまで胡麻団子とお茶でトリップしていた、姫路がようやく気がついた。

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫？」

島田もいままでトリップしていたようだ。バイオ兵器以外の商品は売上を期待してもいいかもしれないな。

「大丈夫だ。ちょっと足が攣って、そのまま倒れただけだから。

おい、雄二。起きろ」

「そうだよ雄二。最近足攣ること多いな。鍛え方が足りないからだよ」

そんなことを言いながらも、手では、俺と明久が必死に心臓マッサージ

をしていた。やばい！？鼓動がだんだん小さくなって！？

「六万だと？バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まっ  
はっ！？」

よしっ！危険なところまで行っていたが、蘇生に成功。

また一つ尊い命が救われた。

「雄二、足が攣ったんだよね？」

明久がさかさ余計なことを言いだす前に畳み掛ける。

今回はアイコンタクトの余裕すらないようだ。

「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の

「もう一つ食べたいのか？」

「足が攣ったんだ。運動不足だからな」

雄二が頭のいいやつで良かった。

さすがにクラスメイトを気絶されるまではいっても、殺したくはな  
いからな。

(・・・明久、鋼侍、いつか貴様等を殺す)

(・・・上等だ。殺られる前に殺ってやる)

(・・・そのときは二度と這いあがれないようにしてやる)

笑顔を貼り付けて小声のやり取り。こんな俺らは仲良し三人組。

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね？」

島田がだんだん怪しんできている。ばれるのは時間の問題か。

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？そついう身体って、筋が攣り

やすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐべあっ！」

「俺が手を下すまでもなかったな」

「ああ。そうだな。あの二人はなかなかいいコンビだ」

どつからどう見てもお似合いのコンビであった。

男と女の関係は一切なさそうなやつだけだな。

「ところで、雄二はどこにいておったのじゃ？」

「ああ。ちよつと話しあいにな」

雄二にはどこか歯切れの悪いセリフだった。

俺は雄二に小声で話しかける。

（教科は何だ？）





「えー。それでは、試験召喚大会Bブロック第一回戦を始めます」  
校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

「三回戦までは一般公開もないので、リラックスして全力を出してください」

今回立会人を務めるのは数学の木内先生。勝負は俺の得意な数学になった。

朱美もそれなりに取れているらしいが、詳細は知らない。

「あんな奴らぶっ倒おそうぜっ!」

「どつちも弱そうなやつらだな。Aクラスの俺達にかかれば一瞬だ!」

なんか好き勝手言ってくれてるが、まあ気にしないことにしよう。

「ねえ、兄貴。あいつら私一人でやっていい?まだ召喚したことないから」

練習したいんだけど」

そういつて、朱美が前に出る。なんか目が輝いている。まあ初めてだしあたりまえか。

「くそっ!あの女舐めやがって、ちょっと可愛いからって調子乗んなよ!」

Aクラスの奴が吠える吠える。アレは三年か？ブサイクばっかだな。

「では、召喚してください」

「「サモン試験召喚っ！」」

相手の二人が呼び声をあげると、お馴染みの魔法陣が足元に現れて召喚者

の姿をデフォルメした携帯を持つ試験召喚獣が呼び出された。

『Aクラス 赤田寛太

&

鈴原圭吾

数学 276点

282点

』

まあ腐ってもAクラスか。普通の人から見たらなかなかの点数だな。

どちらも似たように、落ちぶれた騎士のような格好をしていた。

片手に剣を持って、もうひとつの腕には巨大な盾。身体にはしっかりとした

鎧が付いている。なかなか強そうに見える。

「さて、俺らも召喚するか。危なくなったら言えよ朱美」

「うん。わかったよ兄貴」

「「サモン試験召喚」」

現れる俺らの召喚獣。俺は相変わらず、スナイパーライフルに毒付きナイフ

自衛隊のような格好だ。

一方の朱美の召喚獣は……………。

布団に包まって寝ていた。

……………は？

「お、おい。朱美。お前の召喚獣はなぜ寝ているんだ？それに武器はなんだ？」

「うーんとね」

そういうと、朱美の召喚獣は眠たそうにあくびを一つしてから立ち上がり、

パジャマ姿のままその手には枕を持っていた。

おい。これはどこから突っ込めばいいんだ？

防具はパジャマに、盾は布団。武器は枕という、修学旅行バンザイな格好をしている、朱美の召喚獣のどっから突っ込めばいいんだろう？

できれば教えてほしいな。



「そろそろ開始してもらえますか？」

先生が、俺達の会話の長さに困り果てている。そろそろ始めないと  
な。

「了解です。よし、朱美頼んだぞ」

「うん。わかってる」

「ちくしょーっ！こっとなったらやけだ！鈴原いくぞ！」

「おっっ！」

相手の二人の召喚獣が朱美の召喚獣を囲むようにして、移動してく  
る。

「なかなか息が合ってるな」

「おらあ！」

片方のやつが、剣を朱美の召喚獣に背後から投げつける。

しかし、布団が盛り上がり、剣の勢いを殺してしまう。

せこいな、あのお布団。

もう片方のやつが、持っている剣を振りおろしてくる、しかし、ま  
た布団によって

攻撃が緩められてしまう。朱美の召喚獣は余裕そうにあくびをしな

がら

うとうとし始めている。

相手はやけになったのか、二人がかりで、挟むようにして突っ込んでいく。

盾を突き出しての特攻だ。攻撃手段のない朱美にとって、嫌な戦法だ。

「腕輪はーつどーう！竜巻だよ」

朱美の召喚獣の腕輪が光ると、朱美の召喚獣は、枕をぐるぐると回して、

遠心力を使い、どんどん速度を上げていく。

とたん、白い何か（枕）が縦横無尽に飛んでいき、相手の召喚獣にぶつかる。

ゴツンッ、と盛大な音がして、二人の召喚獣は一撃で倒れる。

そのあとポスッ、といって枕が落ちる。

どんだけ固い枕なんだそれは。

「……勝者、天咲兄妹」

木内先生が、淡々と勝利宣言をする。

とりあえず一回戦突破だな。

「ちくしょう……なんだよあの布団は……」

「点数差が開き過ぎだ……勝てるわけがねえ」

そういつて二人の先輩は帰って行った。

「まずは一勝だな、朱美」

「うんそうだね。けっこうおもしろいねこれ」

朱美は凄く楽しそうに笑っている。まあいっか。この際のあの召喚獣のことは。

俺と、朱美は皆のいる教室に戻って行った。





## 第二十三話（後書き）

感想をお願いします。

## 第二十四話（前書き）

PVが2000000アクセスを超え、ユニークが100000人を超えました。

こんな駄文がこんなにたくさん読まれるとは思いませんでした。

本当にありがとうございます。

## 第二十四話

教室に帰る途中、俺達は召喚戦争に行く明久と雄二に会った。

「鋼侍、朱美ちゃん、試合はどうだった？」

明久が明るい声で話しかけてくる。結果はわかっているんだろうな。

「朱美一人で勝ってきた。相手は三年のAクラスだったが、俺達の敵じゃなかったな」

「へえ。凄いじゃないか。なかなかやるもんだな天咲妹。今回が初めての

試獣召喚じゃないのか？」

雄二は少し驚いた顔をしながらそんなことを言った。

しかし、当の本人は俺の背中ですやすやと平和そうに眠っている。

どんだけ寝れば気が済むんだ？

「まあ。数学と英語ならこいつは良い点数取れるし、楽勝だったよ。

こいつの召喚獣は見てのお楽しみだな。

かなり力の抜ける格好をしてるんだよ」

俺は少し苦笑しながら、二人に言う。

二人は、なんだそりゃ、と言わんばかりに朱美を見ている。

「それじゃ、僕たちはこれから召喚大会だからもう行くね」

明久はそういうと、雄二を置いて先に行ってしまった。

「それじゃあ、俺も行く。店のほうは頼んだぞ」

「ああ。勝たなきゃ土に還すぞ」

俺は冗談半分本気半分な口調で言う。

「まあ、見てろって。俺達が負けるわけないだろう？」

自信たっぷり目の目だ。こういうときの雄二の言葉にはなぜか説得力がある。

俺は雄二を信じることにした。

「わかってるよ。行って来い」

「ああ。またあとでな」

そして、雄二は先に行った明久の後を追っかけて行った。

「さてと、俺は店のほうを手伝いますかね」

俺は、朱美をおぶったまま、教室に入る。

「いらっしやいませ！何名様ですかって銅侍！どうだったのじゃ？」

俺を出迎えたのはチャイナドレスを着た秀吉だった。

なぜか、反則的なまでに似あっている。そこらへんの女子なんかよりよっぽど可愛く見えた。

「ああ。朱美一人で勝ってきた。楽勝だったよ。で？客の足数のほうはどうなんだ？」

周りを見渡すと、どこにも空席がない。良い傾向なのは確かだ。

実際、これが上手いかなければ姫路の転校の確率が上がってしまう。

営業妨害が出たら、速攻で始末しなければならなかった。

「上々じゃな。ムツツリーニの作る胡麻団子が絶賛で、その噂を聞いてやってくる人が

多くなってる。このままいけば大成功になるぞい。」

この、満席状態が続けば、売れ筋はものすごいことになるだろう。

しかし、油断は禁物である。どこから営業妨害が出るかわかったもんじゃない。

「そうか、そしたら俺も着替えてくる。朱美はその辺に寝かせといてくれ。」

髪を撫でたければどうぞ自由につ、て張り紙でも張ってな。

アイツは髪をなでられるのが好きだから文句は言わないだろう」

俺はそういつて、着替え（チャイナドレス）を貰い、教室の隅で着替えを始めた。

なにやら、変な視線を感じるんだが、放っておくことにしよう。

秀吉は、店の入り口付近のテーブルに朱美を寝かせて、ウエイターの仕事に

徹していた。

俺も着替え終わり、店に入ってきた客をもてなそうとする。

「いらっしやいませ！中華喫茶『ヨーロッパアン』によっこそ！

お客さまは二名様でよろしいでしょうか？」

俺は、モヒカンと丸坊主の男性客に営業スマイルで、もてなす。

どっちもチンピラみたいだな。

「そつだ俺と夏川の二人だ。さつさと店に入れろ」

汚い口のきき方だなこいつ。もう一人の坊主のやつは夏川って言うのか。

要注意だなこいつら。

「かしこまりました。ではこちらへどうぞ」

俺は入口から少し離れた場所。いわゆる窓側の席に二人を座らせた。何か営業妨害をされたときに逃げ辛くするためにこの席を選んだのだが、

おそらくこの判断は合っているだろう。なんかこいつら変な笑い方をしてやがる。

「ご注文はなんでしょうか？おすすめはこの胡麻団子と本格ウーロン茶になっておりますが？」

俺は営業スマイルを崩さない。これは暗殺のときにもよくやってきたことなので、

別に苦でも何でもなかった。

「じゃあそれを二つずつ頼むわ。早く食いたいからなるべく早くな」

二人はまだ笑っている。何かしでかすつもりだな。

「かしこまりました」

そう言って、俺は厨房に行き、ムッツリーニと須川にメニューを告げる。

俺が他の客の所に行こうとしたら



「マジできつたねえ机だな！これで食い物扱っていいのかよ！」

さっきのモヒカン野郎が大声で営業妨害を始めた。

どうやら重ねがけしてあったクロスを剥がして、みかん箱を見たようだ。

用意していた時の視線は、これを見る為だったのか？

『うわ……確かに酷いな……』

『クロスで誤魔化していたみたいね』

その様子を見たお客さんが口々に呟く。マズイ！喫茶店での悪評はかなり痛手だ。

「秀吉、大至急雄二たちを呼んできてくれ。俺はこの場を何とかするから」

「わかったのじゃ。気をつけるんじゃぞ」

秀吉はダッシュで教室を抜け出し、雄二たちの所に向かった。

俺は妨害をしているやつらの所へゆっくりと向かう。

「お客様。他のおお客様のご迷惑になります。できれば店を出てから仰って

くださいませんか？私が話をお聞きしますのです」

俺はモヒカンたちに、丁寧語を崩さないまま話しかける。

キレた方の負けだからなこういうのは。

「ああ？お前には用はねんだよっ！責任者を出しやがれこの野郎！」  
そういつて、俺の胸倉を掴んでくる。せっかくのチャイナドレスが  
ビリビリと

破けていく音が聞こえる。

「私が代理で話をお聞きします。ですので、

できればお静かになってはくれないでしょうか？」

「だから責任者を出せって言ってんだよ！てめえには用はねえ！」  
だめだこいつ。頭大丈夫か？客だからって店員の胸倉を掴んでいい  
と思っっているのだろうか。

「それじゃあ仕方ありませんね。私からは『鼻折から始まる交渉  
術』をさせていただきます」

俺はそういつて、モヒカン野郎の頭を抱え上げ、そのまま宙刷りになっ  
ていた、

足を持ち上げ、顔面にひざ蹴りを喰らわせた後、空中で一回転し、  
勢いをつけて、



ぜ！」

『じゃあ、このテーブルもこれをやるために被害がでないようにしたからか？』

『多分そうよ！ほら、演技も終わったみたいだし拍手しましょ！』

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ！！！！

なんか凄いことになってしまった。だがこの機会を逃すわけにはいかない。

「ショーをご覧いただき誠にありがとうございます。

テーブルの替えは、この後すぐに用意しますので、一旦店から出てお待ちください！」

俺がそういうと、納得したようにお茶と食べ物を持って教室から出て行った。

俺は転がっている、モヒカン先輩を持ち上げ、教室の外へ放り投げる。

もちろん、客に見えないようにだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なかなか見事な技だった」

そこに調理系のムッツリー二と須川が出てきた。

「俺、絶対に団長に勝てる気がしないよ・・・何でなら勝てるんだ

「？」

「まあな。それよりも早くテーブルの調達に行かないとまずいぞ。

客の皆さんにはテーブル調達まで待つてくれっていつてるんだ」

俺がそういうと、須川が携帯を出してきた。

「……………大丈夫。この通りきちんと連絡してある」

電話の履歴には、雄二の電話番号が書いてあった。

「流石ムツツリーニ。指示が早いな」

「……………これくらい当然」

ムツツリーニの顔が少し笑っているように見えた。

「ちよつと皆さん！ここを通してください！」

召喚大会から戻ってきた明久の声が教室の外から聞こえてきた。

どうやら、他のクラスメイトもいるらしく、

テーブルが一気に十台ほど教室に入ってきた。

すると、最前列にいた明久が小声で俺に話しかけてくる。

（営業妨害を一人でなんとかしたんだって？）

(ああ。一人は逃げたが、もう一人はボコボコにしてやった。

ちよつとカツコつけてやってみたら、客がショーだと勘違いをし  
てくれて、

時間を稼いでいたら、こうなつたんだ)

(そっか。よかつたよ何事もなくて)

(少しチャイナドレスが破けちまつたけどな)

俺はそう言つて、少しはだけた胸元の部分を見せる。

明久はそれを見て、「鋼侍は男だ、鋼侍は男だ……」

となんどもその言葉を繰り返し、

それを見ていたムツツリーニが鼻血を出しながら、必死に俺を激写  
していた。

そんななか、雄二はパンパンツ、と両手でたたき、客に聞こえるよ  
うに言った。

「大変ながらくお待たせいたしました。これより、中華喫茶『ヨー  
ロピアン』

を再開店したいと思います。どうぞごゆるりとお過ごしください  
ませ」

雄二はホテルのウェイターのように恭しく礼をした。

こういふところはちゃんとしてるよな、雄二は。

客がぞろぞろと、教室の中に入っていき、空席がなくなってしまうた。

それを見ていると、入口付近から、姫路と島田が入ってくる。

「凄い人数ね……どうしたのこんなに？それにテーブルも変わってるし」

「その様子だと勝ったみたいだな。これは鋼侍の活躍でできたものだ

この機会を逃すわけにはいかないから、島田と姫路はウェイトレスを始めといってくれ」

雄二が二人にそう命を下した。

「はいっ！頑張りますっ！」

姫路は気合十分みたいだな。これなら安心できそうだな。

「じゃあ、俺と朱美は二回戦があるから、雄二たちもそろそろだろ？」

「ああ。早めに俺達も行っておくか。明久、俺達もそろそろいくぞ」

「うん。そうだな」

明久も納得したように、うなずいた。

さて、俺も朱美を起こさないとな。

そう思つて朱美を見てみると・・・・・・・・

なんかたくさんの人を癒し状態にしていた。

女性客だろうが、男性客だろうが、みんなに慈愛の目で見つめられている。

恐るべき力だな。朱美の眠った時の癒しパワー。

俺はそんな状態になっている客に謝礼をしながら、朱美を会場に連れて行つた。

- - -  
- - -  
- - -

会場に着くと、先に明久達が先にステージへ上がっていた。

あいつらのほうが試合が早かつたらしい。

ええと相手は・・・・・・・・。

Bクラス根元、Cクラス小山が、嫌なカップルが相手だな。

「それでは、試験召喚大会第二回戦を始めてください」



今回の立会人は、多少のことは目を瞑ってくれる英語担当の遠藤先生だ。

二回戦は完全に俺らが貰ったな。

「『『『『サモン試獣召喚』』』』」

ステージにいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

『 Bクラス      根元恭二      &      Cクラス      小山友香

英語 W                      199点                      165点

『

『 Fクラス      坂本雄二      &      Fクラス      吉井明久

英語 W                      73点                      59点

『

これは厳しい戦いになりそうだな。

雄二もあまりこの教科は得意じゃないし、明久は論外だ。

まあ、けどこの二人には小細工が利くはずだから、勝てるだろう。

利かなかったら終わりだけどな。

「じゃあ雄二、例の物を」

「おう。これのことだろう?」

そう言っつて雄二が取り出したのは、門外不要の根元恭二個人写真集『生まれ変わったワタシを見て!』だ。正直見ると言われても見たくない代物だ。

「そ、それは……!」

根元の表情が一気に凍りつく。

あれはこの間の試召戦争で負けた根元を脅迫して撮影した、アイツの女装写真集だ。

できれば墓まで持っていきたい汚点だろうな。まあ自業自得と言っつわけで。

「さて、根元君。この写真集をバラ撒かれなくなかったら」

と、言いかけたところで雄二が明久の肩に手を置いた。

「おいおい明久。交渉の相手が違っぞ?」

「え? そうなの?」

「おい、根元の彼女らしい、その女」

雄二が声をかけたのは小山のほうだった。さて何をしてくれることやら。

「なにかしら？」

小山は雄二の持つ写真集を訝しげに見ていた。中身のことは知らないんだろう。

「これを見てみる」

「さ、坂本！わかった！降参する！だからその写真だけは……」

呆気なく明久たちの勝ちが決定した。

「明久、根元を押さえろ」

「ん、了解」

明久は指示どおり、根元を羽交い絞めにする。

「よしよし。Cクラス代表。この写真集が見たかったら、俺達に負けるんだ」

「さ、坂本っ！お前は鬼か！？」

根元が泣きそうな声を出している。流石に同情しなくなってきた。

「……いいわ。私達の負けよ」

「交渉成立、だな」

悪役の笑みを浮かべる雄二。

そうして、小山の手にあの写真集が渡った。

「ゆ、友香！？頼む！見ないでくれ！」

根元の懇願もむなしく、小山はマジマジと写真集を見ていた。

「明久、勝負はついた。喫茶店も気になるし、戻るぞ」

「そうだね。遠藤先生僕らの勝ちということだ」

「あ、はい！坂本君と吉井君の勝利です」

先生が正式に勝ちを認め、明久たちは三回戦進出となった。

「じゃあ、先に帰ってるな鋼侍」

雄二は教室に向かう途中俺に声をかけてきた。

「なかなか面白いことしたな雄二。じゃあ俺も試合があるから」

「頑張ってるな鋼侍」

そういつて、二人は行ってしまった。

まあ結果として、また今回も、朱美が相手をボコボコにってしまった

わけで、すぐに勝負はついてしまった。

俺は何のためにこの大会に出てるのかわからなくなってきた。

まあそんなこんなで三回戦進出となった。



## 第二十四話（後書き）

感想をお願いします。

第二十五話（前書き）

今回は明久が中心です。



## 第二十五話

.....  
..... 第四問 .....  
.....

問 以下の問いに答えなさい

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace-keeping Operations (平和維持活動)の略。』

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動の  
『U』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peace  
a c k e e p i n g O p e r a t i o n sとも

呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

天咲鋼侍の答え

『United Nations Peacekeeping O  
p e r a t i o n s (国際連合平和維持活動)の略。』

紛争において平和的解決の基盤を築くことにより、

紛争当事者に間接的に紛争解決を促す国際連合の活動である。

日本ではPKOと略されることが多い。

PKOに基づき派遣される各国軍部隊を平和維持軍

(Peacekeeping Force、日本ではPKFとも略される)という。

任務については大きく分けて、監視活動(Observer Mission)と、

平和維持(Peacekeeping)に分かれている。詳細はまた職員室で願います。

教師のコメント

詳しくすぎです。もうこれ以上答えなくていいので、教室にいてください。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tsuki Oppaiの略。』

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思ってるんですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田 の略』

それは世界を守る人たちです。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

明久 s i d e

「ただいまー………って、なんでこんなにお客さんが少ないの!？」

先ほど鋼侍がいろいろやってくれたにも関わらず、喫茶店内にお客さんは

ほとんどいなかった。

「お、戻ってきたようじゃの」

あまり仕事がないようで、ウェイトレス役の秀吉も暇そうだ。

「俺らも帰ってきたぞ………ってなんでこんなに客がないんだ!？」

後ろから現れたのは鋼侍。まあさっきまで大盛況だった喫茶店に客がほとんどいないんだ。

びっくりするのは当たり前だろう。

「んで、二人とも結果はどうだったんじゃ？」

「無事勝ってきたよ」

「どうしたら英語で負けられるんだ？」

鋼侍は呆れたように、おぶっている朱美ちゃんを見ている。

相変わらず可愛い寝顔だなあ。

「それは何よりじゃ。ところで雄二の姿が見えんが？」

「うん。トイレに寄ってくるってさ」

喫茶店が気になるなんて言ってた割には暢気なもんだ。

「それより秀吉、この客の少なさはどういうことだ？折角俺が頑張ったのに・・・」

「僕も同感だよ、あんなに頑張って、テーブルも変えたのにどうしてかな？」

鋼侍は自分のやったことが一時的なものでしかなかったことに、かなり落ち込んでいる

ようだ。まあもともと、営業妨害を倒すはずのことが、ショーにまで発展したんだから

その時点で凄いことなんだけど。

「……………むう。ワシはずっとここにおるが、妙な客はアレ以降来ておらんぞ？」

秀吉が首を傾げる。

「ということは外部で悪評を立てている奴がいるってことだな。

雄二が来たら一応相談しておこうか」

「そうしたほうがいいかもしれんのか」

そうやって、三人で考え込んでいると、

『お兄さん、すみませんです』

『いや。気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さい女の子の声が聞こえてきた。

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「なんか一緒に連れてるみたいだけどな」

「あ、うん。そうみたいだね」

はて、葉月・・・・・・・・？あの声、どこかで聞いたことあるような・・・・・・・・？

「なあ、明久。どっかで聞いたことあるような声なんだが、覚えてるか？」

「僕もそんな感じはしてるんだけど、どうしても思い出せないでいるんだよね」

『んで？探しているのはどんなヤツだ？』

ガラツと音を立てて教室の扉が開き、雄二の姿が見えた。話し相手の子は小柄なのか、

雄二の陰になって姿が見えない。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

「ふむふむ。このクラスには多数のロリコンがいるのが確認された。

やはりこのクラスは変態が多いな。」

なんか、鋼侍は冷静な推測をしている。何のためだろう？

そんな鋼侍を見てたら、いつの間にか二人はクラスの野郎どもに囲まれてしまった。

お客さんがいなくて皆暇だからだろう。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃん達を探しているんですっ』

どうやら女の子は人を探していて雄二に声をかけたようだ。雄二のヤツ、

なんだかんだいって面倒見が良いからなあ……………。

『お兄ちゃん達？どっちかの名前だけでもわからないか？』

『あう……………。わからないです……………。』

『？家族の兄たちじゃないのか？それなら何か特徴は？』

名前がわからない相手でも探してあげようという雄二の温かい気遣いが感じられる。

意外と子供好きなのかもしれない。

「ほう……………。雄二はロリコンだったのか……………。これはネタにできるな……………」

そんなことを言いながら、鋼侍はニヤニヤと雄二の様子を見ていた。

中々腹黒いな鋼侍は。

『えつと……バカなお兄ちゃんと強くて綺麗なお兄ちゃんでした』

なんとも凄い特徴だ。

『そうか』

雄二は首を巡らせて、該当する人物を探している姿が人垣の間から見える。

『……後のやつはともかく、バカなヤツは沢山いるんだが』  
否定できない。強くて綺麗なお兄ちゃんっていうのは鋼侍に絞られるわけだけど。

秀吉の場合は可愛いのに属するからね。ここテストに出るから覚えておくように!!

『あ、あの、そうじゃなくて、その……』

『うん？他に何か特徴があるのか？』

『その……すつごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『吉井だな』』

やだな、泣いてないよ？

「全く失礼な！僕に女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い」



小さな女の子が駆けてきて、いきなり抱きつかれた。

「絶対に人違い、がどうした？」

「・・・・・・・・人違いだといいなあ・・・・・・・・」

「あ！強くて綺麗なお兄ちゃんです！こんにちは！」

女の子は、鋼侍の方を見て微笑んだみたいだ。だが当の本人は複雑そうな顔をしていた。

「って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いなんて

いないよ？」

ひとまず顔を見る為に女の子を引き剥がす。先のは声からの予想だったから、

本当に微笑んでいたのかはわからない。

「え？お兄ちゃん・・・・・・・・。知らないって、ひどい・・・・・・・・」

女の子の表情が歪む。あ、マズい！泣かせちゃったかも！？

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃん達に会いたくて、

葉月、一生懸命

『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」  
なんだろう。僕まで泣きたくなってきた。

「明久　じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「ホントにゴメンな。バカなお兄ちゃんは世界一のバカだからバカなんだよ。」

仕方のないことなんだ。許してやってくれるかな？」

ここまでバカを連呼された人間はいないだろう。

「むにやむにや・・・吉井はやっぱりバカだにやあ・・・zzz」

眠っている、朱美ちゃんにまで言われてしまった。僕これからどうやって生きていこう？

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月との結婚の約束もしたのに

」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「じぶあつ!？」

突如首筋に激痛が!なんだ!?!何が起こったんだ!?

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

落ち着いて雄二が言う。

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「こ、こつですか?」

「違うぞ姫路。こつやって、捻るんだ。ふんっ!」

あれ?視界が真っ暗になってきたぞ?

あれは死んだお爺ちゃんじゃないか!?!向こつは暖かそうだなあ・・・。。。

「ちょ・・・ちょっと・・・待つて・・・結婚の・・・約束なんて・・・してな」

「ふえええんっ!酷いですっ!ファーストキスもあげたのにーっ!」

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか?」

「島田、俺の携帯用サバイバルナイフなら二本ならあるが？」

「天咲、早くそれを渡しなさい！こいつを葬ってやるわ！！」

ああ。じいちゃん。どうしたのそんなに慌てて？アレ？川が凄い勢いで

こっちに近付いてきてるぞ？どうしてなのかな？

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

あれ？女の子の声が聞こえるぞ。なんか戻らなきゃいけない気がするよ。

じいちゃん。またね。

「おお！君はあの時のぬいぐるみの子だな？明久がく観察処分者>になった理由でもある」

「はっ！・・・ああっ！あ那时的ぬいぐるみの子か！」

思い出した！そういえば前に鋼侍と一緒に歩いてて、

小さな女の子がお姉ちゃんにプレゼントをしたいけどお金が足りない、

なんて哀しそうにしていたから、鋼侍がいろんなぬいぐるみ店に連れまわして、

なんてことがあったけな。そのあと、いろいろあったから忘れてた

けど。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

女の子がぷうっと頬を膨らませる。

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「うんうん。それは良かった。それにしても、よく僕達の学校がわかったね？」

「お兄ちゃん達、この学校の制服着てましたから」

そういつて、僕の制服を引っ張る葉月ちゃん。

「まさか、小学生が高校二年生に頭の良さで勝つなんて……」

「ああ。立場を逆転させた方がいいんじゃないか？」

「そこまで僕も頭は悪くないよ!？」

さすがに小学生に知識の差で負けるわけにはいかない。

負けたら……いや、負けるわけにはいかないんだ!

「あれ？葉月とアキ達って知り合いなの？」

そんな様子を見て美波が首を傾げていた。

「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの?」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「「へ?」」

僕と鋼侍の声がピッタリ重なりあう。僕と鋼侍はマジマジと葉月ちゃん顔を見る。

言われてみると確かに似ている………。元気そうな雰囲気とか、ちよっと

勝気な目のあたりとか。

「吉井君はずるいです………。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの

付き合いなんですか? 私はまだ両親にも会ってもらってないのに……。

もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃってたり……」

最近姫路さんの壊れ具合が酷くなってるとような気がするな。

これもボロい教室のせいかな。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん!ぬいぐるみありがとうでしたっ  
「!」

葉月ちゃんがぺこりとお辞儀をする。あの学園長とは大違いだ。

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！毎日一緒に寝てます！」

ぬいぐるみ？毎日一緒に寝ている？姫路さんも葉月ちゃんに何かあげたのだろうか？

「良かった。気に入ってくれてたんだ」

そういつて嬉しそうに微笑む姫路さん。本当にうれしそうだな。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

折角、鋼侍が頑張ってくれたのにな

と、教室を見渡す雄二。そういえばそのことを考えていたんだっけ。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な噂を聞いたよ？」

「ん？どんな話だ？詳しく聞かせてくれ」

鋼侍が朱美ちゃんを起こさないように、ゆっくりと屈みこんで葉月ちゃんの

目線にあわせる。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいい、って」

それを聞いた瞬間、鋼侍が何かをぶつぶつと呟き始めた。

いきなりどうしたんだろう。確かに悪評は広がるばかりだけどさ。

「明久、雄二、それに姫路に島田、これからAクラスに行かなければならない」

いきなり鋼侍が真剣な顔を始めた。

なんかさっきからおかしいな。

「なにかあるのか？俺はできれば入りたくないんだが……」

そういえば、Aクラスには霧島さんがいたな。でもどうしてAクラスなんだろう？

「おそらく妨害犯はそこにいる。設備もいいし、客足もかなりいいはずだ。」

……  
そこに流れ込まないわけがない。絶好の場所だからな。それに……

「それに？」

僕はおもわず生唾を飲んでしまう。

何か恐ろしいことがあるんじゃないかと思ったからだ。



「Aクラスの喫茶店では短いスカートのメイド服で経営しているらしい」

「なんだって！？雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！この際翔子が怖いなんて言ってられない！

我がクラスの成功のために、低いアングルから綿密に検査しないと！」

聞いた瞬間全力ダッシュ。

鋼侍もその気配に気がついたのか、僕たちと同じペースで走っている。

朱美ちゃんを背負ったまま。

「アキ、最低」

「吉井君酷いです……………」

「お兄ちゃん達のバカ！」

背後からの罵倒も気にならないほどに、僕の心は躍っていた。



## 第二十五話（後書き）

感想をお願いします。

## 第二十六話（前書き）

毎日二回更新は流石に疲れるな。

始めのころの四回更新とかなんだったんだらう？

そろそろ学校が始まるので、こんなペースをずっと続けるのは

無理そうです。

わかってくれたら嬉しいです。

## 第二十六話

「鋼侍、やはりやめよう」

「お前はここまで来て何をいつてるんだ？ターゲットはこの中なんだぞ？」

「頼む！Aクラスだけはダメなんだ！何としても入るわけにはいかない！」

さっきの勢いは何だったんだ？と言いたいぐらい、雄二はAクラスの霧島を恐れていた。

目の前にあるのは目標地点のAクラス、「メイド喫茶」ご主人様とお呼び！』】である。

しかし、中に潰すべきターゲットがいるのに、それを見逃すわけにはいかない。

俺は手段を選ぶつもりはなかった。

「雄二、すまんっ！」

俺は雄二の鳩尾を、少し強めに殴った。本気じゃないのは、朱美を背負っているせいと、

ここでくたばってもらうわけにはいかないからだ。ほんの数分気絶してもらっただけで

ミッションは達成できる。

「ぐふっ！こ、鋼侍・・・き、貴様あ・・・」

そういつて、雄二は廊下に崩れた。それを明久が引きずるように歩く。

「さ、坂本君！？どうしたんですか!？」

どうやら、雄二といるいろやっているうちに女子三人も追いついたようだ。

「こいつが、なかなか入りたがらないから、無理やり入れ込むことにしたんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!(パシャパシャパシャパシャ!）」

見てみると、指が擦り切れんばかりにシャッターを切る男が一人。

「・・・・・・・・・・ムッツリーニ?」

明久が男に訪ねる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・人違い」

厨房責任者のクラスメイトはカメラを片手に否定のポーズをとった。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してんの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・敵情視察」

最近の敵情視察とはローアングルから女子を撮影したりすることを指すらしい。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られている」

女の子が可哀想だと「

「……………一枚百円」

「2ダース貰おう 可哀想だと思わないのかい？」

ダメだこいつ。欲望がダダ漏れた。そのせいか皆も呆れた顔をしている。

「アキ、普通に注文してるわよ」

「……………そろそろ当番だから戻る」

ムツツリーニは明久に写真を渡すと、教室に帰って行くこととする。

「ムツツリーニ」

「……………何？」

そういって、ムツツリーニは立ち止まる。俺には聞きたいことがあった。

「あのトップシークレット……今どのぐらいで取引されて、どの

「ぐらい売れてる？」

「トップシークレットとは、俺と秀吉が風呂で色々やっていた時の写真だ。」

「ムツツリー二の耐久力に感動し、売買を認めた写真である。」

「……………三万円、五百枚ほど売れた。感謝する。」

「そういつて、グットサインを俺に向けて去って行った。」

「150000000万円の利益かよ!? ムツツリー二のカメラが最新型になっていたのは」

「この利益があつたからなのか!? 恐るべき写真だな。」

「まったく、ムツツリー二にも困ったもんだね（トップシークレットって何? 鋼侍）」

「確かにそうだな（前に俺と秀吉が一緒に風呂に入ってたろう? そのときのヤツだ）」

「俺と明久はアイコンタクトで会話をする。」

「これを実際に声に出して話したらまず明久は殺されることになるだろう。」

「流石に親友が目の前で殺されるのは見たくない。俺が殺すならともかくとしてな。」



明久は俺とアイコンタクトしながら、さっきムツツリー二から買った写真を

ポケットにしまいこんでいた。

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

あ、ふつーにバシてるし。

「やだな。もちろん処分するにきまつてるじゃないか。

それよりそろそろお店に入ろっ？もうすぐくお腹が減っちゃったよ」

そうでもないくせに、腹をおさえて演技をしている。

だから見ても下手くそな演技である。島田はその行動を訝しげに見ている。

「あ、そうですね。入りましようか」

そんな下手くそな演技でも引つかかってしまう姫路は純粹でいいんだが、

心配したくもなってくる。

「うんうん。早く敵情視察も済ませないと 写っているのは男の足

「ばつかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですかっ！」

「く、ごめんなひゃい！くひをひっぱらないで！」

雄二を気にする素振りも見せず、ただ頬をつねっている。

雄二が落ちそうな気もするが、まあ大丈夫だろう。死ぬことはない。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

まず先陣を切ったのは島田だった。

「………おかえりなさいませ、お嬢様」

「おかえりなさいませ お嬢様」

出迎えたのは、霧島と木下だった。木下はキャラが崩れているような気がするけど

放っておこう。多分商売のためだろうな。

「わあ、綺麗………」

姫路が感嘆の声を洩らす。まあ確かにどっちも綺麗だな。

木下は可愛いと言った方がいいか？

「それじゃ、俺らも入るか。（木下お前キャラが崩れてるぞ？）」

「おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様（仕方ないじゃない！  
商売のためなんだから！）」

俺と木下が本当に小さな声で会話する。アイコンタクトはできなく  
ても、

これぐらいはできるみたいだ。

「はい。失礼します」

「お姉さん達、きれ〜！」

姫路たちも入ってくる。

「……………おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

まあこうして出迎えてくれたわけで。

「……………お会計なされる場合は、お金は要りませんので、雄  
二を置いていってください」

今夜は二人だけでいいことをしますので「

霧島は雄二のことしか頭にないようだ。お金の代わりに雄二を置いて  
行けとか、

凄い大胆なこと言ってんな。それに最後のはかなり危険な臭いがす  
るんだが……………。

「霧島さん、大胆です……………」

「ウチも見習わないとね……………」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

三者三様のリアクション。島田はかなり危険なことを見習わおうと  
してないか？

「それじゃあ、霧島に木下、席に案内してくれ」

「わかりました。それではご案内いたしますね」

木下がそういつて歩きだしたのを筆頭に、霧島、俺達が順番になっ  
て歩き始めた。

「ね、お兄ちゃん。凄いお客さんの数だね」

葉月ちゃんがくいくい、と俺の袖を引っ張る。

葉月ちゃんの言うとおり、Aクラスは予想道理の満席になっていた。

おそらくこの中に営業妨害がいるんだろう。

俺は警戒しながら歩いていく。

「ではメニューをどうぞ」

木下が立派な装丁のメニューを渡してくる。無駄に凝ってんのなA  
クラスは。

霧島は皆の言ったメニューを聞くために、メモを持っている。

なるほど。役割を細かく分担しているんだな？

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

「zzz・・・私もそれがいい・・・スプー・・・zzz・・・」

俺の横に寝ながら座っている、朱美も注文した。女子は仲良くシフォンケーキのようだ。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「俺は、ホットコーヒーを頼む。ブラックのままでもいいからな、

あと砂糖とかもいらさない。明久が舐め始めたら大変だからな」

「さすがにそこまで飢えてないよ！？僕は一体どんなふうに見られているの!?!」

明久は俺の言葉を頑張って否定しているが、皆の顔は苦笑になっている。

考えられそうなことだからな。

「んじゃ、俺は」

いつの間にか復活を遂げた雄二が注文しようとするが、霧島によって遮られる。

「……………ご注文を繰り返します」

「……………『ふわふわシフォンケーキ』を四つ、『水』を一つ、

『ホットコーヒーのブラック』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。

以上でよろしいでしょうか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

動揺した叫び声をあげる雄二。雄二が俺以外のやつに翻弄されるなんて珍しいな。

「では食器をご用意致します」

木下も面白がっているのか、明久の前には塩が、俺の前にはカップが、

女子四人の前にはフォークが、雄二の前には霧島から渡された、

実印と朱肉が用意された。

「しよ、翔子!コレ本当にうちの実印だぞ!どうやって手に入れた

んだ!？」

「……………では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

霧島と木下は優雅にお辞儀をしてキッチンと思しき方向に歩いて行った。

「……………明久に鋼侍。俺はどうしても召喚大会で優勝しないといけないんだ…！」

必ず、お前たちか俺達で優勝しなければいけない……………わかつてくれたか？」

「あ、うん。それはもちろんそうだけど」

「わかりきっていることを言うなよ雄二。お前のことは俺も前から把握している」

雄二の目からは並々ならぬ決意が感じられる。少し怖いぐらいのな。

『おかえりなさいませ、ご主人様……………って大丈夫ですかその鼻……………』

『おう。一応な、まあいい二人だ。中央付近の席はあいてるか?』

この声は奴らだな。さっさと始末しないとな。

「ねえ、鋼侍。営業妨害してたのってあの二人?」

明久が俺に小さな声で聞いてくる。そういえば明久たちは見てないんだっけな。

「ああ、あの包帯ぐるぐる巻きにしている方は俺が一回潰したんだが……」

やり損ねたようだな。今度こそ完璧に潰す」

そのセリフを聞いて、明久はほどほどにね、なんて言ってきた。

ほどほど？何それ？おいしいの？

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！」

「そうだな。さっきいった二年Fクラスの中華喫茶は酷かったからな！」

「テーブルは腐った箱だったし、虫も湧いていたもんな！」

人の多い喫茶店の中央で、わざわざ大きな声で叫び合う。

あいつらは小学生か？

「待て、明久」

あいつらに殴りかかりにいかうとしていた明久を雄二が止める。

「雄二、どうして止めるのさ！あの連中を早く止めないと！」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」



「けど、だからってこのまま指をくわえて見ているなんて……」

「いや、やるなら頭を使えということだ　　おーい、翔子おー」

「……なに？」

呼ばれた瞬間に霧島登場。雄二の声には敏感か。

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

雄二が顎で例の二人組を示す。すると、霧島は小さくうなずいた。

「……さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさつきと変わらない。」

ずっと同じようなことを言ってる」

霧島は顔を少し歪めながら言う。まあ邪魔にしかならないしな。

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

店員に紛れこましてなんかやるつもりなのか？

雄二はさすがに無理があるだろうな。

「……わかった」

そういつて、何のためらいもなく脱ぎはじめ、  
「っ、へ？」

「き、霧島さん！？こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ！」

「そうよ！ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」

「わぁ〜お姉さん、胸おつきいです〜」

「う〜ん。アタシのほうがちょっと大きいか？Cカップぐらいに見えるね」

メイド服を脱ごうとしている霧島を、姫路と島田が慌てて止めに入る。

そして朱美。なぜお前は胸のサイズの話をしているんだろうか？

「……………雄二が欲しいって言ったから」

止められた霧島は不思議そうな顔をしていた。

霧島の雄二に対するぞっこんレベルはここまでだったのか。危ないやつだな。

「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った！？

予備があれば貸してくれって意味だ！」

そっぽを向いて首まで赤くなっている雄二が怒鳴る。

「……………今、持ってくる」

霧島が服を着直して去っていく。

いつのまにか、このテーブルは注目の的になっていた。

まあ、これだけ騒げば当然か。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないのか？』

『言ってるな。食中毒でも起こさなければいいけどな！』

『ニ・Fには気をつけろってことだよな！』

ああつつさいな。あいつらここじゃなければ殺しているところなんだが。

「雄二！なんでもいいから連中を！」

「いいからもう少し待ってる。姫路に島田、櫛を持ってはいないか？」

「？持ってますけど・・・」

「ちょっと貸してくれ。他にも身だしなみ用の物があれば全部」

「はぁ・・・」

姫路が上着のポケットをがさがさとあさって、小さなポーチを取り出した。

「悪いな。あとで必ず返す」

雄二がポーチを受け取る。やりたいことはわかるが、いったい誰を犠牲にする気だ？

「……………雄二、これ」

と、今度は霧島がメイド服を抱えて戻ってきた。それも三着。

「おう。すまないな」

「……………貸し一っ」

「だ、そうだ。明久に鋼侍」

「わかった。じゃあ今度雄二を一日自由にしていいぞ。デートに行くんだったら」

おれが良い場所教えるからさ」

「僕も手伝うよ」

「……………ありがとう。吉井と天咲はやっぱりいい人」

「ちょっと待て！どうして俺が！」

雄二の必死の講義もむなしく、霧島は嬉しそうにその場を離れて行った。

「で、これをどうするの？」

手元に残ったのはポーチとメイド服三着。さあ誰が犠牲になるのか。

「……………着るんだ」

恨みがましく俺と明久を見る雄二。俺何かやったか？心当たりは山ほどあるんだが。

「だってさ、姫路さん」

「え？わ、私が着るんですか？」

姫路が目を丸くしている。まあ姫路が着るわけじゃないだろうな。

「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんてできないだろうが」

「それじゃ、美波？でも、胸が余っちゃうとぶべらあっ！」

「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

凄い殺気だな。これが一般人の出す殺気なんだろうか？どっかの戦士なんかよりも

よっぽど凄い殺気をだしてるな。

「島田でもない。それなら面が割れてしまっただろうが」

「……………まさか」

「着るのはお前だ」

「いやあああつ！」

明久がものすごい悲鳴を上げる。まあ確かにばれないだろうな。

「本当は明久だけだったんだが、三着もあるし、天咲兄妹にも着てもらっ」

「俺ら？なんで俺達まで被害を被らなければいけないんだ？」

「そつだよ！雄二が着ればいいじゃないか！無理をしたら着られるはずだよ！」

それに朱美ちゃんも攻撃なんてできないじゃないか！」

俺はその言葉を聞き、首を横に振った。

「いや、ある程度なら朱美も戦闘できるぞ。お前よりはよっぽど強い。」

もちろん雄二よりもな」

『ええっ！』

姫路と島田と葉月ちゃんと明久の叫びが混じり合う。

「……ああそつだ。俺が前に寝ている天咲（妹）を無理やり起こそうとしたら、

何が起きたのかわからんが、俺はいつの間にか気絶してたらしく

て、

身体中がかなり痛かったんだ。近くに紙が置いてあったから、

それを読んでみたら、最後に朱美と書いてあつてな。

それ以来、俺は天咲（妹）を学校にいる間、起こすのをやめたのさ」

哀愁が漂つたように、言葉を口にしていった。

「まあそんなわけで、いつもはこんなふうに寝ているが、起きたら強い。」

もちろん俺には敵わないけどな」

「でも納得いかないよ、雄二でもいいじゃないか、僕じゃなくても」

「やれやれ、わがママを言うヤツだな。それならあっち向いてホイで決めないか？」

出た、雄二の提案。明久は過去に何回も騙されているから、

そろそろわかつてもいいころだろう。この提案を受ければ負け、というこを。

「よし、その提案受けるよ」

やっぱりバカのままだったなこいつは。

「それなら行くぞ、ジャンケン」

「ポンッ」

明久はパー。雄二はチョキ。明久もう負けが決定したのか。

「あっち

」

雄二が勢いよく人差し指を明久に向けて出してくる。突き刺すつもりだな。

「その手には乗るかっ！」

多分違うことを考えているんだろうな明久は。

「向いて

」

ブスッ

あ、嫌な音。

「ぎいやああっ！目が、目があっ！」

目を押さえてのけぞる明久。想像道理のことをやってくれたな雄二は。

「ホイ！……ふっ。俺の勝ちだな」

雄二は勝ち誇ったように声を上げ、明久ののけぞった方向に手を向けていた。



「なあ雄二」

「何だ鋼侍？」

「俺ともあっち向いてホイやるっぜ」

「？別にかまわんが」

よし。これで雄二も殺せる。ここは二人一緒に死んでもらうとしよう。

「よしジャンケン」

「ポンッ」

俺はチョキ、雄二はパー。俺の勝ちだ。

「あっち向いて」

雄二は普通に首を下におろそうとする。ふっ、かかったな。

「ほiiiiiiiiっ！」

俺は下を向いた雄二に向かってアッパーをする。

バキィッ！

「しぐえっ！」

予想以上に上に吹っ飛んでいった雄二、そのまま落下していく。

ゴスッ

雄二は死にかけの虫のようにびくびく痙攣していた。

よし、任務完了。

結局、俺と朱美と明久が着ることになった。

雄二は失神して使えなくなってしまったからだ。もうちょっと加減すべきだったかな？



## 第二十六話（後書き）

感想をお願いします。

第二十七問（前書き）

すみません。さっきまで死んでました。

## 第二十七問

「この上ない屈辱だ……！」

「別にいいだろ？それとも死んでみるか？」

「いえ、結構です」

「二人とも存外にあつておるがな。特に鋼侍は」

雄二から連絡を受けてわざわざやってきた秀吉が、男子トイレで俺と明久の着付けと、

メイクを二人合わせて数分でやってのけてしまった。これが演劇部パワーなのか？

「鋼侍は黙つてれば女の子にしか見えないんだから当たり前じゃないかっ！」

「僕は正真正銘の男なんだから、どうやったって女には見えないよ」

「切り裂きと串刺しどっちがいい？今なら選ばせてやってもいいぞ」

明久は全力で「すみませんっしたっ！」と言つて土下座を始めた。

「うんうん。君みたいな素直な子は僕好きだよ。だからミンチにしてあげよう」

「それって、さっきより酷くなってるよね！？僕を殺さないという選択肢はないの！？」

そんな俺達のコントのようなものを秀吉呆れた顔で見っていた。

「では、ワシは教室に戻るぞい。存分に悪党をのしてくるが良い」

「ああ、言われなくてもそうするさ」

秀吉と別れ、Aクラス前で、朱美と合流し、再び教室に入る俺ら。

なにかものすごく厭らしい目で見られてるような気がするな。

『とにかく汚い教室だったよな』

『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな』

あの連中まだあんな会話を続けていたのか、暇な連中だな。

明久が奴らのほうへ、しずしずと歩き、声をかけようとする。

俺達は別の場所で待機中となっている。明久の行動次第で俺達の行動が変わってくる。

さあどう動く？明久。

「お客様」

ウェイトレスであるように振る舞い、明久は奴らに声をかけた。

「なんだ？」

へえ。こんな子もいたんだな」

「結構可愛いな」

明久を舐めるような視線が襲う。あいつらは変態か？男にあんな視線を向けるなんて。

「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

「掃除？さつさと済ませてくれよ？」

二人が席を立ちあがった瞬間俺達は、奴らに急接近し、ジャンプをする。

「「イ・ナ・マアツ・キイイイイイイイックウツ！」

「！！！！！！！！！！」

「「ごぼガああああッ！！！！」

俺はモヒカンのこれまた鼻を、朱美は坊主のこれもまた鼻を蹴り飛ばした。

モヒカンの鼻、いつか完全になくなるんじゃないかな？

明久はしゃがんでいたため、全く被害を受けていない。まあ計算通りだな。

「き、キサマらは良く見りゃFクラスの吉井に天咲兄妹じゃねえかっ！」



……まさかお前たち二人は女装趣味が

こいつまだ生きてやがったのか。朱美もそこまで非情にはなれなかったか。

「この人、今さっき私の胸を触った人ですっ！」

朱美が泣きまねをしてフォローを入れた。朱美は完全に女だから、説得力がある。追撃だな。

「ちよつと待て！俺は触った覚えはないし、俺達は被害  
ぶあつ！」

「こんな公衆の前で公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！  
痴漢退治という大義名分を得て、雄二登場。

「何を見ていたんだ！？明らかに被害者はこつちだろ！」  
さつきまで死にかけていたモヒカンが、現在倒れている坊主の代わりに、

雄二に食ってかかる。

「黙れ！たった今、コイツはこのウェイトレスの胸をもみしだいて  
いただろうが！」

俺の目は節穴ではないぞ！」

いや、正直節穴だと思うぞ。

「ウェイトレス達。そっちで倒れている男は任せたぞ」

「はい。わかりました」

俺は困惑してしどろもどろになっている明久に代わって答える。

明久は「ああ、そういえば今僕たちはウェイトレスだったね」と手を打っていた。

明久はさつき秀吉に押し付けられていた、ブラを瞬間接着剤で坊主の頭に取り付けた。

うわぁ・・・完全に変態にしか見えないなあれ。それも鼻血出してるから余計に。

「さて、痴漢行為の取り調べのため、ちょっと来てもらおうか」

一方で指を鳴らしながらモヒカン先輩に近づく雄二。連行して、なぜこんなことをしたのか聞くつもりだろう。まあなんとなくわかるがな。

「くっ！行くぞ夏川！」

状況を不利とみて逃げ出すモヒカン。

「こ、これ、外れねえじゃねえか！畜生！覚えてる変態めっ！」

坊主は頭にブラをしたまま走り去って行った。

「逃がすかつ！追うぞアキちゃんにコウちゃんにアケミちゃん！」

「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

「俺達はこのまま大会に行ってくる！着替えてる暇がねえからな！いくぞ朱美！」

「うん！じゃあまたあとでねえ」

「おう！勝つてこいよ！」

そういつて、俺達は一旦二手に分かれ、俺達は大会に、明久たちは奴らを追うことになった。

鋼侍 side

俺達はすぐに会場に向かい、試合に挑むことになった……  
のはいいんだがな。

「朱美、この格好かなり恥ずかしくないか？」

「アタシもそれは思った。三回戦以降は一般公開があるからって聞いてたけど、

ホントに人がいるなんて思ってなかったわ。少ないけどね」

そう、三回戦からは大会が一般公開されることになっているんだが、もちろん俺達の今の格好はメイド服。かなり危ないやつらだと思われてしまう。

しかし、ここにはメガネをかけて、少し太った、明らかに「オタクですっ！」

と言わんばかりのやつしかいない。嫌な視線が俺達を襲ってくる。

変な奴だと思われた方がましかもしれないなこれなら。

「これより三回戦を行います。両者召喚を始めてください」

俺達の相手は、三年のAクラスとBクラスの人。教科は現代社会。俺もあまり得意ではないし、

朱美は壊滅的な点数だ。どうやってぐりぬけようか？

「サモン試獣召喚！！！！」

『Aクラス 秋元 俊平 & Bクラス 立川 準

現代社会 332点 252点

VS

『Fクラス 天咲 鋼侍 & Fクラス 天咲 朱美

現代社会 497点 2点

「お前2点ってなんだよ2点って!? 明久でもこんな点数とらないぞ!？」

それに今回のお前の召喚獣、完全に寝てんじゃねえか! 起きる気配すらねえよ!」

あまりに衝撃的な点数で我を忘れてしまった。0点ならわかるけど2点ってなんだよ!？」

「仕方ないじゃん、英語以外読めないんだからさ。日本語って喋るのは簡単だけど、

書いたり読んだりするのって難しいよね」

朱美は勝手に納得したようにうんうんとうなずいていた。殺してやるるかこいつ。

ということ、朱美は戦力外。召喚獣も寝ているだけなので、ただの錘でしかない。

相手の召喚獣を見ると、相手は軽装備のようだ。動きやすさを重視して、

武器は短剣を数本、腰には投げナイフが装備されている。

レンジャーのような格好だ。俺の1段階下の格好のようだな。

「では始めてください」

先生がそう言った瞬間、向こうの召喚獣が動き始め牽制のためか、ナイフを俺の召喚獣に投げってくる。

朱美は後でも倒せるから、まずは俺ってことか。

二人ともアイコンタクトで指示し合っているようだ。やりにくい相手だな。

俺は召喚獣を右にステップさせ、お返しに毒入り投げナイフを投げるが、

はじかれてしまった。しかし、受けたことによって少しダメージを受けたようだ。

「ちっ！仕方ない。燃費の悪い腕輪でも使うかっ！」

俺が大声でそういうと、向こうは警戒したように、バックステップをとる。

そして、俺の召喚獣に回り込むようにして、ナイフを連続で、タイミング良く投げってくる。

が、俺はすべてのナイフを弾き飛ばした。すこし、腕がジンジンとするが、俺は気にせず、

召喚獣をジャンプさせ、腕輪を解放する。

「腕輪解放！爆発Explosion！」

瞬間、俺の召喚獣を中心に、球状に赤い光が一带を包みこんでいく。

この腕輪は燃費が悪い上に、味方も犠牲にしてしまう厄介な腕輪だが、

威力と範囲は確かなものだ。今回は使えない朱美も犠牲にすることにする。

「おい、まずいぞっ！早く逃げろ！」

「わかってるけど……お、追いつかれるぞっ！」

「うわああああ！！！」

赤い光に巻き込まれた瞬間、二人の召喚獣は消え去った。もちろん朱美の召喚獣はとっくに

消えているが。

「えーつと……勝者、妹ごと葬った天咲君」

酷い言われようだ。まあ間違っではないけどな。

「兄貴、アタシも犠牲にするなら先に言ってよ。まあ結局アタシの召喚獣は

やられる運命だったけどね」

呆れながらも俺のやり方に納得してくれたようだ。

「じゃあ、戻るか。早く着替えたいんだが」

「そうね。早く戻りましょ。あの観客達の視線が嫌だからね」

そう言っつて、俺と朱美は会場を後にした。

途中で走って会場に向かう明久たちを見かけて、あいつらのことを聞こうと思ったが、

向こうはこっちに気付いていなかったようだ。

しかたなく、俺達は教室へ先に向かった。



## 第二十七問（後書き）

中途半端な終わりがただな。

まあ頑張って更新したいと思います。

第二十八問（前書き）

続きです。

ご感想お願いします。

## 第二十八問

### 【第五問】

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

【？可愛らしさ   ？統率力   ？行動力   ？その他（ ）】

また、その時のリーダー候補も挙げてください。』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】候補・・・姫路瑞希&島田瑞希&天咲朱美』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】候補・・・姫路瑞希 / 木下秀吉 / 天咲兄妹 / 島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるどころです。

天咲鋼侍の答え

『【？と？統率力と行動力】候補・・・島田美波 容姿だけで内容がダメでは意味がありませんから』

教師のコメント

それは島田さんに魅力がないということですか？それとも褒めているんですか？

坂本雄二の答え

『【？その他（結婚相手）】候補・・・霧島翔子

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが持ってきてくれたのでしょうか。

「三回戦は危なかったけど、勝ってきたぞ」

「おお、そうか。で、奴らはどうなったんじゃ？」

「それは明久達に聞いてくれ。俺らは途中で抜けたからわかんないんだ」

俺達は一足早く教室に着き、秀吉達と会話をしていた。

朱美は途中で「歩くのダルい・・・おぶってってえ」とか言い始めて、

俺は仕方なくおぶってやることにしたんだが、また背中で寝始めた。

どんだけ寝れば気が済むんだよこいつは。

「とりあえず、こっちの立て直しに協力してくれんかのう、

チャイナドレスは向こうに置いてあるから、着替えてくるのじゃ」

そついつて、申し訳なさそうな顔をして、掛けてあるチャイナドレスを指差した。

「なあ、秀吉」

「ん？なんじゃ？」

「須川はこういうのはしないって言ってたけど、俺達なぜかずっと前から着てるよな？」

どうして俺達はチャイナドレス着てウェイトレスやってんだ？」

「・・・・・・・・須川以外の男子達がみんな揃って『着てくださいいっ  
』」

と土下座しながら言ってきたのを覚えておらんのか？」

あれは凄い光景で、クラスの男子（一部を除いて）がいきなり土下

座を始めるもんだから

俺達三人は仕方なく着ることになった。しかし……。

「いや、それは覚えてる。しかしなぜ俺と秀吉と朱美だけなんだ？

姫路と島田が着ているところなんて一回も見えてないぞ」

「そういえばそうじゃな。ワシらのタイミングが悪かったただけじゃ  
る……多分」

すごく、納得のいかない答えを返されたが、まあいいや。

俺達は明久達が帰ってくるまで、話をしながら、待っていた。

「ただいまー」

「今、帰ったぞ」

どうやら二人が帰ってきたようだ。

「おう、おかえり、でもちろん勝ったよな？」

「というか、不戦勝、食中毒で棄権したんだってさ」

食中毒？まさか姫路の料理を食べたわけではあるまいな？そうだな  
いことを祈ろつ。

「ならば、済まぬがこっちの立て直しに協力してくれんか？」

秀吉が俺のときのように申し訳なさそうに表情を曇らせる。

「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやる必要がある」

ありそうだな」

教室はさっきと変わらず空席だらけ、というか客がいない。

ここいらでなんとかしないと話になんないな。

「ふむ。それで何をするか、じゃが……」

秀吉が教室内を見渡す。俺も明久も見渡すが、やれることはほとんどなさそうだ。

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。お前には鋼侍や秀吉達と同じ格好をしてもらう」

そういつて取り出したのは、チャイナドレス。俺達とおそろいのやつだ。

「ちよっ……！お願い、許して！メイド服にチャイナ服まで着たら、

きっと僕はホンモノだって皆に認識されちゃうー！」

俺は明久の肩に手をポンっ、と置いてから言う。

「明久。それなら俺はとっくにそう思われているはずだぞ。」

「お前も仲間がいれば怖くないだろう？『赤信号みんなで渡れば怖くない』と一緒にの原理だ。」

大丈夫だ、お前なら似合うはず。何も恐れることはないんだ」

「鋼侍……って嫌だよっ！いくらそんなふうになっても僕は絶対に着ないからね！」

「大丈夫だ明久。着るのは姫路と島田だ」

「あ、なんだ。良かった」

「ちょっと待て雄二。ということはチャイナドレスを着ていたのは俺達だけだった。」

「ということなのか？」

「ああ、そうなるな。ってなんで俺の首を捻ろうとしているんだ鋼侍  
って首があああああああああ……！……！」

雄二は断末魔の叫びをあげて、再び冥界をさまよった。

「たっただいま〜！って、なんだ。アキってばメイド服脱いじゃったんだ」

「あ……残念です。可愛かったのに……」



「お兄ちゃん達。葉月もう一回見たいな」

と、三人娘が帰宅してきた。明久はやっぱり人気者だなあ。

けど、明久の悪い噂は余計に飛び交うようになったな。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ？」

にこやかに明久が二人に笑いかける。これで着せようってことだな。

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらおうぞ」

いつの間にか復活した雄二はエモノを逃がさないように、

チャイナ服を片手に退路を断つ。少なくとも島田は逃げそうだからな。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……？」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」

俺はあいつらがなんかしているうちに、霧島にメールを打つ。内容は、

雄二が今にも姫路に襲いかかろうとしている。この制裁は祭りが終わった後になるだ。

間違っではないぞ、うん。

「やれ！明久！」

「オーケー！へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛あつ！」

マジすんませんでした！自分チョーシくれてましたっ！」

「「弱いなお前」」

俺と雄二が思わず突っ込んでしまった。

「仕方ない」

俺はそう言つて、一瞬で、島田の背後に移り、腕をわきの下にくぐらせ、持ち上げる。

「きゃあつ！何すんのよ天咲っ！」

「すまんが、着てくれないか？俺とか秀吉もこうやって着てるわけだし、

明久は確か大のチャイナフェチだったから、喜ぶと思うぞ。な、明久？」

俺は明久に話を振る。ここで間違つたことを言わなければ、大丈夫だろう。

「大好　　愛してる」

予想以上の答えだった。俺はその答えを聞き、島田を自由にする。

「……お前は本当に嘘をつけないヤツだな」

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

島田のツンデレは今に始まったことじゃないけど、まさか姫路もそういつてくるとは、

姫路もだんだんFクラスの空気に侵されてきたな。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちょうだい！」

なんていい子なんだろう。ここまでしつかりしてるなんて。明久とは大違いだな。

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数が」

「……………！！（チクチクチクチク）」

「チクチクチクチクチクチク」

「ム、ムツツリー二に朱美ちゃん！どうしてそんな勢いで裁縫を！？」

朱美ちゃんはさっきまで寝てたはずだし、ムツツリー二はさっきまでいなかったよね！？」

「……………俺（アタシ）の嗅覚を舐めるな（舐めないで）」

なんだろう。なんでこいつら無駄にシンクロしてるんだろう？

それに格好よく言ってるはずなのに、凄く格好悪いセリフをいつてるな。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

姫路が腕時計を確認している。そういえば俺達の試合も近いな。

「いや、今すぐ着替えてもらいたい」

「「え？」」

雄二の声に二人の声が八モる。ここからは俺が説明しよう。

「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ。」

理由を言うなら、一番効果的で、もっとも効率のいい方法だからな

「「、これを着て出場しろって言うの……………？」」

「流石に恥ずかしいです……………」

二人ともチャイナドレスを手に持って困った顔をしている。

しかし、これをやってももらわないと、人が来なくなってしまう。

「二人とも、お願いだ」

そういつて、明久は頭を下げる。そんなに姫路のことが好きなら告っちゃえばいいのにな。でもそしたらおもしろくなるか。

「明久……。お前本当に　　チャイナが好きなんだな……」

俺はノリで、雄二は……。割と本気で言ってるのかもしれない。

「もしかして吉井君、私の事情を知って　　」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

姫路の声を遮るように島田がことを片づけようと、声を挟む。

「あ、は、はいっ！これぐらいお安いご用です！」

姫路も快諾してくれたようだ。

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会ではFクラスであることを

強調するんだぞ」

「オツケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて教室を出ていく二人。あつちには任せておいて大丈夫だろう。

「……できた」

「わ、このお姉ちゃんとお兄ちゃん凄いです!」

神の如き速度で葉月ちゃん専用チャイナドレスが出来上がっていた。

下心が絡んだことについてのムツツリーニは言うまでもないが、

朱美はなんなんだろう? ムツツリーニとハイタッチまでしてるし。

「さて、それじゃ俺達は一旦着替えるか? 秀吉」

「そうじゃのう。ワシらが外れても何とかなるじゃろう。着替えるとするかのう」

俺と秀吉は近くに置いてある、自分たちの着替えを持って、その場で着替えようとした。

「ちょ、ちょっと秀吉に鋼侍! ここで着替えるの!? きちんと女子更衣室で」

着替えないとダメだよ!」

「さっき俺がトイレで着替えた時はなんともなかっただろ？大丈夫だよ」

実際、あのときはなんともなかったしな。

「僕はずっとそっぽを向いていたんだよ。見ないように頑張ったんだからね！」

「……最近、明久がワシと鋼侍のことを女として見ておるような気がするんじゃないか」

「あの風呂のこと以来じゃないかな？秀吉」

「そうじゃのう」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だし、鋼侍は鋼侍だろう」

「うん。雄二の言つとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』、鋼侍は『鋼侍』でいいと思う。」

男とか女とかじゃないさ」

「……俺が言ったのはそういうことじゃない」

そんなことを話していると、隣で葉月ちゃんが着替えを始めていた。

「んしょ、んしょ……」

「葉月ちゃん！君もこんなところで着替えちゃダメだよ！」

ムツツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

大量に出血しているはずなのに、鼻を押さえているムツツリーニは心から幸せそうだった。

一方、朱美は裁縫で疲れたのか、もうすでに睡眠状態に入っていた。

やはりこのクラスはおもしろくていいな（笑）



第二十八問（後書き）

感想をお願いします。

## 第二十九問

「ただいまー」

「ただいま戻りました」

この声は姫路と島田か。

「丁度よかったよ。二人とも疲れてるとこ悪いけど、ホールに回ってくれる？」

明久が姫路達に声をかける。

俺達は姫路達が大会に向かったあと、結局着替えず、チャイナドレスに着替えた葉月ちゃんを

連れて、俺と明久と秀吉と葉月ちゃんというメンバーで校舎内を歩き回った。

最初はあまり効果が見られなかったが、徐々に客が増え、姫路達の試合が終わるころには、

だいぶ席が埋まってきた。今も順調である。

「良かった。段々持ち直してきたわね」

「良かったです」

「女性客も増えてきてな。味についての噂が広がったんだろ。まあ

嬉しいこった」

まあ、あの味で売れないはずがないんだけどな。二人の女子が同時にトリップする

味なんてそうそうないだろう。

「それじゃ、二人ともウェイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オツケー」

チャイナドレスを翻して二人は注文票やペンを取りに行った。

これでまた客も増えるだろう。

「君。注文してもいいかな」

「はい。ご注文はなんでしょう」

俺は背後から掛けられた声に反応して、振り返る。

そこには我らが教頭先生の竹原先生がいた。

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。退場券と社会的抹殺券ですね？ただいまお待ちいたしますので」

しばし、お待ちください」

メモを取る振りをして、ふざけたことを言う。

「ふざけないでくれますか？天咲君。私は今客なんですよ？接客がなつてませんね」

ふんっ、と鼻を鳴らしながらこっちを睨んでくる教頭。本当に死んでくれないかなコイツ

「何のつもりだ営業妨害の犯人さん？いや、仕向けた犯人と行った方がいいか？」

俺は睨み殺すような目で教頭を見る。一瞬、恐怖に歪んだ顔をしたが、

面目を保つためか、冷や汗を流しながら受け答えをしている。

「何のことですか？確証もないのに勝手に犯人に仕立て上げないでください。」

それよりもここに吉井明久君という生徒がいると聞いたんだが、

どの子かね？」

教頭は一旦俺から目をそらし、教室全体を見渡す。

俺は近くにいた明久を指差した。

「今俺の近くのテーブルで注文を聞いてるやつのことだよ。」

そんなどうでもいいことを聞いて何のつもりだ？

こつちとしてはアンタにかまつてる時間はないんだが」

教頭は首を横に振って、「もういい」と言った。

「私はこれで失礼するよ」

そう言つて、教頭は教室を後にして行つた。

「アキ、厨房の土屋から伝言。茶葉がなくなったから持ってきて欲しい、だつて」

明久が島田に呼ばれていたが、俺はさっきの教頭の行動が気になつて仕方なかった。

「アキ、土屋が急いでほしいつて言つてたわよ」

「はい」

そう言つて、明久は出て行つてしまった。俺はさっきの教頭の質問と、行動が妙に気なつて、

明久に何かあるんじゃないかと思ひ、少し離れて、ついて行つた。

明久がストツクのある、空き部屋に入ると、ドアがいきなり音を立ててしまつてしまった。

俺は嫌な予感しかしなかつたので、ドアから様子を窺つた。

部屋の中には、明久とおそらく他校の生徒である、男が三人いた。まず他校の生徒がこの中に入ること自体がおかしい。

俺はドアを開けて、部屋に侵入した。

「明久、ムツツリーニが茶葉の他にも餡子も急いで持って来いってさ」

「あ、鋼侍。丁度よかった」

明久は少し安心したような顔をしていた。

「ん？なんだこいつらは？」

俺は一応演技めいたことをしておく。まあノリだよノリ。

「よくわからないけど、鋼侍と喧嘩をしたいみたいなんだ。だから、あとは宜しくね」

そういつて、明久は男たちをすりぬけて廊下に出て行ってしまった。

まあ邪魔だからいいんだけど。

『コイツどつするっ？』

『面倒だから一緒にやっちまおうぜ』

男の一人がラリアットで襲ってくる。所詮は戦いの素人だ。攻撃が

当たるわけがない。

俺はしゃがんで、またの下をすりぬけ、相手の攻撃の勢いを殺さぬよう、

上乗せするように思いっきり後頭部を蹴り飛ばす。

『ぐぼげっ!』

壁に鼻をぶつけたようで、鼻血を出しながら倒れる。まず一人。

『で、手前ええええっ!死にやがれっ!』

二人目はとびひざ蹴りで仕掛けてきた。

俺は右にサイドステップをして、顔面に拳を叩きこむ。

吹っ飛んで、壁に当たった後、俺は鳩尾に拳を捻りながら叩きこむ。

『ぐふおえっ!』

微妙に血を吐いて二人目もKO。

『ち、ちくしょうっ!ふざけやがってええええええええ!!』

コイツはただ突進して、殴りかかろうとするだけだった。

俺は避ける動作を見せず、ただ足を振り上げ、腕に叩き落とす。

『ぐあぁあぁあぁあ!』

ボキッ！と嫌な音がしたが気にせず、痛みで後ろに逸れたところを、顔面に膝蹴り。

こいつも最初のやつと同じよう鼻血を出して倒れた。こいつが一番重症だな。

多分鼻も折れたし。

俺はこの三人の男たちを掃除ロツカーに無理やり詰め込んで、空き部屋を出て行った。

その時間三十秒。まあこんなもんでしょ。

「アイツらの掃除終わったけど、必要なものってきたか？」

「う、うん……微妙についてる返り血が怖いんだけど……」

明久はものすごく引きつった顔をしていた。俺は頬についた血を少しなめると、

明久の顔が余計に青くなった。どうしてだ？

「じゃあ戻ろうぜ。ムツツリーニも待ってるだろうしな」

「うん。そつだね」

そんなこんなで二時間が過ぎ



「明久に鋼侍、そろそろ四回戦だ」

「え？もうそんな時間なの？」

「そうだな。おそらく俺達のほうが早いから、先に行ってるな」

俺はそう言って、寝ている朱美をおぶって、教室を後にした。

あ、今回も着替えるの忘れたな。まあいっか。

そう思い、俺は会場に急いだ。

俺は会場に着き、待機している。

「これから第四回戦を始めます。出場者は前にどうぞ」

マイクを持った審判の先生に呼ばれ、俺とさっき起きた朱美がステージへと上がる。

外部からの来客の為につくられた見学者用の席には人がいっぱいいた。

流石に四回戦となってくると違ってくるのか？

今回の相手はこれまたAクラス。どんだけAクラスの参加率高いんだよ。

「それでは召喚を始めてください」

「「「「サモン  
試獣召喚！」「」」」」

四人の声が揃い、足元に魔法陣が現れる。

少し歓声が上がったようだが、おそらくこれは初めて召喚というものを見たからなのだろう。

で、点数のほうはどうか？俺は特大のディスプレイを見る。

『Aクラス 高橋 冬子 & Aクラス 橋本 夢

古典 328点 298点

VS

『Fクラス 天咲 鋼侍 & Fクラス 天咲 朱美

古典 536点 72点

「おい、朱美。現代社会より点数がいいじゃないか。どうしたんだ？」

「今回のテストには選択問題が多かったから結構とれたんだよ」

いつも古典は一桁上等の朱美がここまで点数とれるなんてことは奇跡に近い。

今回ばかりは神様に感謝することにしよう、って神様はアイツか。じゃあ感謝しなくていいや。

さて、相手の召喚獣はつと、斧を二刀流にしたわけのわからん装備をしてる

召喚獣が二匹。防具はかなり固そうに見える。頭にもあるし、ナイフじゃ無理かな？

「それでは始めてください」

先手は相手のほうだった。まあ突進してくるだけだったけどな。

俺の召喚獣はすぐに横に逸れ、攻撃を回避する。が、

「朱美！お前の召喚獣は何やってんだ！寝てる場合じゃないだろ！」

向こうは、二手に分かれ、一人は俺、もう一人は朱美の召喚獣に突っ込んでいったのだ。

しかし、朱美の召喚獣は寝ている状態。速攻で負けてしまう。

「大丈夫だって、ほいっと」

そう朱美が言うと、朱美の召喚獣は寝がえりをうって、相手の召喚獣に足を引っ掛けて

転ばせた。頭から突っ込んだ相手の召喚獣は、なかなかのダメージを受けている。

「きゃあ！私の召喚獣になんてことすんのよ！」

相手は朱美の地味な攻撃が気に入らないのか、一旦距離をとって、

ブンブンと斧を振り回し、

斧を寝ている朱美の召喚獣に投げつけた。

俺はもう一人にやつを相手にしているので、斧の行く手を遮ることはできない。

向こうの戦闘が気になるが、そうも言ってもらえないので、俺はこっちの戦闘に、気を戻した。

しばらく攻撃を受けてみてわかったことがあった。

相手の動きは単調で、中段、上段に斧を振り回してくるだけ。

召喚獣の扱いに慣れてないことが丸わかりである。

あと防具に微妙な隙間があることを発見した。腹の部分の繋ぎ目が、少しあいているのが見え、

俺は一旦距離をとる。

「そんなに点数とってんのに、防戦一方？これなら私達の勝ちは決定したも同然ね」

相手は勝ち誇ったように、腕を組みながら話しかけてくる。

「だが一発も当たってないぞ？それに動きも単調で流しやすい。

召喚獣の扱いに慣れてないのが丸わかりだぞ」

「なっ！それなら私を倒して見せないさいよ！」

相手は最初と同じく突進で仕掛けてきた。俺は先ほどと同じように横にステップして、

腰にナイフを取り出す。体制を低くして、ナイフを逆手に持ち、腹の部分を一闪する。

「きゃああああ！」

一人目終了。さて朱美のほうはどうだろう？

「このっ！このっ！どうして攻撃が当たらないのよ！」

寝ている朱美の召喚獣に苦戦しているようだ。ダメージは一切ない。それどころか、何回も転ばせてダメージを与えているようだ。点数は五分五分まで来ている。

この短期間でよくここまで使いこなせるな。

「アタシそろそろ飽きてきたから終わらせるね？」

朱美はそういうと、布団を使って相手を包み込む。そして、召喚獣に抱きつかせる。

相手の召喚獣は布団の中で暴れまわるが、朱美の召喚獣が抱きついてるせいで、

何もできないまま。だんだん静かになっていき、最後には何もなく

なつた。

朱美の召喚獣が布団を開くと、そこにはダウンした相手の召喚獣の姿があった。

「ふむ。勝者天咲兄妹！」

『わあああああああ！！』

無駄に凄い大歓声。先生は次の選手達を呼び出している。早々に去ることにしよう。

しかし、次にステージに上がってきた奴らを見て、俺と朱美は足をとめた。

ステージが上がってきたのは恥ずかしそうにチャイナドレスを着た姫路に島田。

学生服の雄二と明久だった。

「先生すいません、ちょっと用事があるので、ステージに残っていいですか？」

俺は審判役の先生に声をかける。

「構いませんが、何かをするんですか？するなら早めに終わらせて下さいね」

よし。了承は得た。あとは雄二が何とかしてくれるだろう。

「鋼侍、勝ったのか？」

「ああ。もちろん。島田達がチャイナドレスを着てるってことは  
ついでにここで宣伝をするんだろっ？俺達も付き合っぜ」

「それはありがたい。それじゃとっとと用事を済ませちまうか」

雄二はそう言って先生からマイクを奪い取って挨拶を始めようとした。

『清涼祭にご来場の皆様こんにちは』

(姫路に島田、雄二がここで宣伝を始めるから並んでくれ。明久もだ)

(え？あ、はい)

小声で三人を呼び、客に向かい合うように整列する。

『ここにいる僕ら六人は、本格飲茶を提供する二年F組の中華喫茶で働いています。』

このように可愛らしい女子も一生懸命頑張っていますので、よろしければどうぞ

お立ち寄り下さい』

雄二が丁寧にお辞儀をする。その動きに合わせて、俺らもお辞儀をする。

「「「「「「「「「「「「「「「」

挨拶が終わったので、俺と朱美は観客席に行く。

雄二が先生にマイクを返すと、四人は向かい合うように並んだ。

『「「「「「「「「「「「「「「「」  
ということだそうです。ご見学の皆様、お時間に余裕  
がありましたら、

出場選手達のいる二年F組に立ち寄ってみてください』

先生は苦笑いしながら俺らの宣伝に協力してくれた。ありがたいな。

『さてCMも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。F  
クラスの四人とも、

いい試合をお願いします』

そう告げると、四人は一旦距離を置いた。

「「「「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！」「」「」

四人の召喚獣が一齐に召喚される。皆の召喚獣は相変わらずの姿を  
していた。

四人はステージの上で何かを話しているみたいだが、あいにく聞き  
取ることができなかった。

周りがうるさ過ぎるのだ。



雄二が自信満々に何かを言うと、特大のディスプレイに姫路達の点数が表示される。

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波

古典 399点 6点 『

相変わらず酷い点数してんな島田は。日本語読めりゃあBクラス並みなのにな。

島田の様子を見てみると、酷く驚いている。対して雄二はニヤニヤと笑うだけ。

何か仕掛けたんだな。高笑いまでしてるし。

次に表示されたのは雄二達の点数。さあどうなるかな？

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

古典 211点 9点 『

笑ってる場合じゃないなこれ。島田はともかく、明久も一桁つてどいうことだよ（笑）

また会話を始めた四人。突然島田が明久に向かって、ものすごい殺気を放ち始めた。

やっぱり、どっかの軍隊に入ったほうがいいよな島田って。

わずかながらも、姫路からも殺気が放たれている。

ホントにFクラス色に染まってきたな。

突然、始めの先手をつつたのは姫路だった。

明久の召喚獣との間に一瞬で迫る。明久の召喚獣はそれをぎりぎりで避ける。

点数が低すぎて、いつもより更に動きが鈍いように見えた。

島田は直接明久本人に殴りかかるようにする。反則じゃないのか？

『反則はありません』

俺の問いに答えたように、先生が島田の行動を認める。

明久は雄二と何かアイコンタクトをしたようで、何とか避けた姫路の大剣

の引きもどしを狙って、飛び込んでいった。

ザクツ！こつちまで聞こえる大きな音が響く。痛いだろうなあ。

大剣を止めて、身動きの取れない明久の召喚獣と、姫路の召喚獣に向かって、

雄二の召喚獣が襲いかかる。

明久はフィードバックがそのまま帰ってくるだろうから、そうとう

なダメージを受けることに

なるだろう。例えるならダンプカーだ。

口クな防御をしてなかった姫路の召喚獣はもちろん、明久の召喚獣も吹っ飛んだ。

明久はあまりの痛みに悶えている。まあそりゃそうか。

よそ見をしていた、島田の召喚獣も、すぐに距離を詰められ、吹っ飛ばされる。

まあ結果は言わなくてもわかるだろう。

『あゝ……えゝと……』

形容しがたい展開に向井先生は困っているご様子。

『姦計をめぐらせ、味方もろとも相手を葬った坂本雄二君の勝利です』

俺のときと一緒だな。勝った一人しか名前は呼ばれなかった。

明久はそのあとあまりの痛みを失ったようだ。

雄二は倒れた明久を背負い、俺達と共に教室へ戻って行った。



第二十九問（後書き）

感想をお願いします。

### 第三十問（前書き）

更新遅れてすいません。

学校が始まって、忙しくなっていました。

これからは、一週間に一回の更新にさせていただきます。

### 第三十問

「ひきょうもの」

「二人とも酷いです……」

「あ、いや。あれも勝負だったからさ」

島田のジト目と姫路の悲しそうな視線から逃れるようによそを向く明久。

ここは普通やられた明久ではなく、攻撃を行った雄二を攻めるべきなんだがな。

憐れな明久だ。

「二人ともそう言うな。お前らの代わりにしっかりと俺達が優勝してくるから」

雄二はどこも悪びれた様子もなく、普通に言っただけだ。

「おいおい、俺達もいるんだ。そう簡単に優勝は狙わせない。決勝で一対一をするのは俺達だ」

俺はさも当然のように優勝すると言っただけだ。雄二に対して、俺達もいることを

言っておく。俺も優勝賞品には興味があるからな。

「わかってるさ。優勝と準優勝、三位はFクラスで埋め尽くしてやる。これは約束だったろ？」

何をいつてるんだ、と言わんばかりの口調で言ってくる。

まあこのことは雄二も承知の上なんだろう。流石だと言いたい。

明久は俺と雄二が話している間に、島田とこそこそと話している。

おそらく大会のことと喫茶店のことだろう。どちらも姫路の転校に  
関係することだ。

「あの、絶対に優勝してくださいね……？」

姫路が明久に上目遣いに覗きこんでいる。明久の顔は少し赤くなっ  
ている。

「もちろんだよ。絶対に優勝する。全部うまくやってみせるさ」

姫路と約束したからなのか、明久の瞳は熱く燃えたぎっていた。

「やれやれ。それなら明日の朝は気合入れて起きて来いよ  
つと。」

ほう。なかなか盛況じゃないか」

「そうだね。結構いい感じだね」

「良かった。宣伝の効果があつたみたいですね」



「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないものね」

「まったくだな」

我らがFクラスには結構な数の客が入っていた。さきほどの試合の宣伝は

かなりの効果が出ているようだ。

「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

葉月ちゃんが俺らの姿を見て、店の中から走ってきた。

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

「んにゃ〜……」

明久が葉月ちゃんの頭をなでると、葉月ちゃんは気持ちよさそうに目を細めた。

『お、あの子たちだ！』

『近くで見ると一層可愛いな』

『手伝いの小さな子も教室のいる子も可愛いし、レベルが高いな！』

客から様々な声上がる。やはり服装は大事か。

「明久に鋼侍。戻ってきたようじゃな。」

「鋼侍は勝ったんじやろうが、明久達と島田達どちらが勝ったのじや？」

「俺ほうは聞かなくても大丈夫だと、信頼しているんだらうか？」

「それなら嬉しいな。」

「雄二、かな？」

「そうね。坂本の一人勝ちね。」

「ですね。」

「まあそうなるな。」

「？明久は同じチームなのに負けじゃったのか？」

「まあある意味負けたのは明久のみだな。」

「明久達や俺たちが入賞すれば姫路たちの目的は達成されるし。」

「まあいい。そんなことよりも姫路たちは喫茶店に専念してくれ。」

「数少ないウエイトレスなんだ、頑張ってもらわないとな。」

「もちろん俺と朱美も手伝う。試合まではこっちに力を入れるさ。」

「俺はそう言って、島田と姫路に笑いかけると二人は恥ずかしそうに」

しながらも、

仕事に向かっていった。葉月ちゃんも一緒に。

「……ワシと鋼侍は男なのじゃが……」

秀吉は仕事をしながらも男と認めてもらえないことに悲しんでいるようだ。

「秀吉に鋼侍。絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」

明久は念を入れていってくる。店のためという理由もあるだろうが、個人的にもこの恰好が気に入ってるんだろう。

「やれやれ、仕方ないのう……。あ、いらっしやいませー！」

中華喫茶ヨーロッパアンへようこそー！」

入店してきた客を見て、口調が一瞬で変わった。

まあ流石演劇部のホープといったところか。

俺はそのあとに入ってきた客を持て成したり、いろいろ喫茶店の仕事に専念した。

明久side

「それじゃ、準々決勝に行ってくるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね！」

「わかってるって」

「ついでに負けたら俺と島田でジャイアントスイングでキャッチボールするからな。」

「もちろんボール役はお前だ」

「全力で勝たせていただきますっ！」

喫茶店の中で動き回ること一時間。いよいよ準々決勝の時間となった。

準決勝と決勝戦は二日目の午後に予定されているから、今日の試合はこれで

ラストになる。鋼侍たちはさっき試合をしてきて、速攻で勝ってきた。

聞いたところ向こうはお腹が痛くて死にそうだったが、

棄権するぐらいなら負けたほうがいいと言って、突っ込んできたらしい。

鋼侍はそれを容赦なくたたきのめし、勝利。対戦相手はさぞ悔しかっただろうな。

まあ僕たちはさつき教室を出て、今会場に向かっている。

鋼侍もついてきたけど、どうしたんだらうか？

「明久。この試合は特に負けられないからな」

雄二の目が今まで以上にマジだ。それもそのはず。次の試合の相手は、

「霧島と木下か……厄介な相手にあたったな雄二。霧島はなんとかできても

木下は厄介だぞ。作戦は考えてあるんだらうな？」

鋼侍が正論を言う。確かにそうだ。霧島さんなら雄二が愛の言葉を捧げれば

すぐに折れるだらうけど、木下さんはそうもいかないからガチで勝負するしかない。

「ああ、確かにあいつらに弱点という弱点はない。

しかし、付け入る隙ならあるということだ。

そのために秀吉とムッツリーニの二人に協力してもらおう」

そういえば教室に二人の姿は見えなかった。

ということは雄二はもう二人には作戦を言っているのだらう。

普段はバカだけどころいうときには頭が回るんだよなあ。

「で、狙いは霧島と木下のどっちなんだ？ 場合によれば変わってくるぞ」

鋼侍は真剣な顔をして聞いている。不安な表情が隠せていない。

何かあったのかな？ こっちまで心配になっちゃうよ。

「今回は木下優子を狙う。ヤツを利用して一気に形勢を傾ける」

「秀吉のお姉さん？ そんなことしなくても、さっきも言った通り

雄二が霧島さんとうまくやってくれたらいいと思うんだけどな」

「うるさい黙れ」

不機嫌そうに会話を打ち切る雄二。自分のことに関してはてんでダメなんだよな。

けど霧島さんのことどう思ってるんだろう？ 僕の見立てだと手応えありなんだけど……雄二は素直じゃないから彼女に伝えたりは

しないだろうな。やれやれ。そのうち僕が何とかしてあげるしかないか。

不器用な悪友を持つと苦労するなあ。

「……明久。お前のその視線が非常に不愉快なんだが」

「え？なんのこと？」

「明久。お前の言いたいことはわかるが、それはお前にも言えることだぞ。」

そこははっきりしとけ。俺はここから用事があるから、頑張っ  
てこいよっ！」

そう言っつて、鋼侍はどっかに行ってしまった。僕にも言えることって  
どういうことだろう？

「まあいい。俺達は俺達の仕事をするぞ明久。」

この戦いに負ければ、お前の大好きな姫路の引越しの確立が

高くなるし、俺の人生損失の確率も高くなる。命が懸かっていると  
思え！」

もうすぐ勝負の場となるステージだ。否が応でもテンションが上が  
る。

「その『大好きな』ってのはやめて欲しいけど、了解！絶対に負け  
るものか！」

会場を前に、二人で気合を入れる。元よりこの勝負負けることなん  
て考えていない。

どんな手段を用いても勝ってみせる！

「おっしや！行くぞ！」

「おっっ！」

拳をぶつけ合い、僕らは敵のいるステージへと歩み進めた。

『お待たせいたしました！これより準々決勝を始めたいと思います  
』！』

僕らが到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。

どっちら時間ぎりぎりだったようだ。

『出場選手の入場です！』

まるで格闘技の入場みたいだ、と思いながらお客さんたちの前に立つ。

僕らの向かいからは対戦選手の霧島さんと木下さんがやってきた。

「……雄二。邪魔しないで」

「そうはいくか。俺にはまだやりたいことが沢山あるんだ！」

別にいくのが嫌なら素直に断ればいいのに。素直じゃないなあ。

「……雄二、そんなに私と行くのが嫌？」



うっ！こ、これは必殺上目遣い！霧島さんみたいに普段はクールな女の子

がやると、その威力はもはや無限大だ！

ここで酷いことを言える奴は人間じゃない！

「ああ。嫌だ」

人間じゃない。

「……やっぱり、一緒に暮らしてわかりあう必要がある」

む。霧島さんも負けてない。あそこまできっぱりと拒絶されたのに全然気にしてないなんて。性格だけでいえば二人はお似合いだと思う。

「ハッ！残念だったな！そんな寝言は俺たちに勝ってから言つことだ！」

「……わかった。そうする」

二人の言い争いも終わり、いよいよ準々決勝が始まる。

「雄二、作戦はどう？」

「任せておけ。抜かりはない。」

頼むぞ秀吉っ！」

何故か雄二が目の前の木下さんに向かって秀吉と呼びかける。

何を言ってるんだろう？確かに外見は秀吉に見えるけど、

Aクラスに所属している秀吉のお姉さんのはず　　って、そうか！

秀吉と木下さんが瓜二つだということを利用した、二人の入れ替わり作戦か！

やるじゃないか雄二！

「……ふふっ」

と、木下さんが口元に手を当てて笑う。どうしたんだろう？

秀吉なら早く返事してほしいんだけど。

「違うぞ雄二っ！そこにいるのは真正正銘木下優子だっ！

お前の作戦は奴らに見破られていたんだっ！」

侍side

鋼

俺は明久達と別れて、ある場所に向かった。

理由は差出人不明のメールが届いたからだ。こんなタイミングでメールが来るなんて

おかしいと思った俺は、すぐにメールを確認した。

内容は、『体育館の裏に来てくれ』だった。たったそれだけだったが、これまでの営業妨害に関係しているのではないかと思い、すぐに向かった。

そこにいたのは、

「その髪の色……！鋼侍…なのか？」

スーツ姿の髪をオールバックにして、俺と同じ白銀の髪をしていて、俺より身長が高い男がそこに立っていた。この姿には見覚えがある。

「雄大か……何の用だ？お前は外国で仕事が忙しいんじゃないのか？」

俺の親、天咲雄大がそこに立っていた。雄大は自分のことを名前で呼んでくる

息子を見て、とても悲しい顔をしていた。

「爺さんに名前で呼べって言われたのか？」

もう一度『お父様』って呼ばれたかっただのにな……まあ仕方がないか」

あきらめるように、雄大は肩を落とした。

「朱美をこっちに送ってきた理由はアンタ達が忙しかったからだろ

う？

なぜその忙しいはずの人間がここにいる」

朱美が初めて朱美に会った時、両親が忙しくて構ってあげられないから

という理由でこっちに来たはずだ。しかし、目の前の男は全く忙しそうに見えない。

一年に一度こっちにくるとは聞いていたが結局一度も来ておらず、今十四年ぶりに再会したのだ。感動の再開ではないがな。

「お前たちをこっちに迎えに来たんだ。

ひと段落ついて、仕事の激流が収まってきたからね。

どうだい？また一緒に暮さないかい？」

雄大は笑顔でそんなことを言ってくる。俺はそんな目の前の男を見て、

胸の奥からわけのわからない感情が渦巻いてくる。

知らないうちに、口が勝手に動いていた。

「アハハハハハハハハハッ！今更家族ごっこってかあ？

笑わせるなよ雄大っ！修行から帰ってきて、やっと家族に会える

と思ったら

もう家にはいませんかと？家には紙が置いてあるだけ。

簡単にいえば育児放棄に近いなあ雄大。百万円月に出すから

それで生活してくれなあ？嫌がらせのつもりか？

んな金なくなたって、俺には今まで稼いできた金があるから要らねえんだよ！」

俺は気付かない内に涙を流していた。いままで溜め込んできたものが溢れだしたのだろう。

「……………」

俺のそんな姿を見て、雄大は悲しそうに、すまなそうな顔をしている。

まあ自分の息子がこんな風に泣いていたら、そうなるのもあたりまえか。

「……………なあ、どうして俺を置いてどっかに行ったんだ？」

「アンタもわかってるんだろう？どんなに遠くに行ったって爺さんからは

逃れられないことぐらい。俺一人だって朱美を誘拐することぐらい  
いできる」

実際外国に行つてする任務もあつたわけで、そのついでに誘拐することなんて

赤子の手を捻るより簡単だ。そのことはこの男も知っているはずである。

「……そんなことぐらいわかつてたさ。しかし、お前に合わせる顔がなかった。

つらい修業をして帰つてきた息子に、どう声をかけていいのか分からなかった。

だからいつかお前を迎えにいこうとアイツと一緒に誓つたんだ。

それが今日だったということなんだ。わかつてくれ」

俺に説得するような声をかけてくる。この人はそれだけで向こうに行くと思つている

のだろうか？ そうだったらこの男の頭はお花畑だな。

「やだね。俺にはここでできた友達がいる。

暗殺についても趣味になりかけている。というよりもう趣味だな。

俺は人を殺すことに快感を感じる。楽しくて楽しくてしょうがないんだよ。

ここで学んだことも多い。朱美も同じことを言つたろう。

「この生活は楽しい、ってな」

俺は真剣な顔をして言う。俺の言ったことは全部本当だ。

殺すたびに自分の存在、生きている自分を感じることができる。

だから俺は暗殺業なんて危険な仕事を続ける。

雄大は俺を見て、驚いた顔をする。殺すことが楽しいなんて言う息子がいたら

みんなこうなるだろうな。

「しかし、朱美のことはもう決まっていることだ。

夏には迎えに行くと言ってあるし、パスポートもある。

本当は一週間前には帰ってるはずなんだが、明日まで待ってほしいといわれてな。

だから明日は朱美にとって最後の学校だ。またこっちに来る機会もあるだろうが、

いつになるかはわからん」

今度は俺が驚かされる番だった。そんな話は聞いていなかったのだから。

だから大会に参加したいって言ってたのか。それもいつもの眠そう

な顔ではなく、

真剣な顔で。学園長が俺と朱美の出場も認めたのはこれが理由だったのかもしれないな。

「最後に親らしい忠告ぐらいはさせてくれ。お前はここの教頭に狙われている。

いや、お前のクラスといったほうがいいか？先ほども何か話していたしな。」

黒い髪日本人形みたいな女の子と茶髪の可愛い女の子と話していたぞ。

裏のあるような話し方をしていたから、注意をしておけ。言っておくが

嘘じゃないぞ。それに俺は情報収集だけは爺さんよりも優れている

と言われたぐらいだ。すまなかったな鋼侍。またいつか会おう」

そう言って、雄大はその場を去ろうとする。しかし、俺はそれを許さなかった。

「待てよ」

「どうしたんだ？鋼侍」

俺は振り返った男に向かって礼をする。



「ありがとうございます。お父様。よければ大会の決勝戦を  
観下さい。」

素晴らしい戦いが見れるはずですから」

多分俺の顔は最高の笑顔になっていることだろう。

たとえ嘘っぱちの笑顔でも、喜んでくれればそれでいいと思っ  
たらだ。

「ああ。楽しみにしているよ」

そう言い残し、校内を去って行った。

「さて、早く会場に向かったほうがいいな。雄二はおそらく

木下と秀吉を入れ替えることで、相手をかく乱させようとしたん  
だろうが、

失敗するだろう。そのことを早く伝えておかなければ！」

俺は会場に向かって、全力で走って行った。

父親と朱美のことは後に回し、会場まで走り抜ける。

会場まで辿り着くと、雄二たちが会場に上がるうとしているのが見  
えた。

そんなに時間は立っていないようだ。

観客の中に潜り込み、「すみません」と謝りながら前へと進む。

「頼むぞ秀吉っ！」

雄二の声が聞こえる。俺は声のするほうへ、他の客を押しつけながら進み、

思いつきり声を出して言う。

「違うぞ雄二っ！そこにいるのは正真正銘木下優子だっ！」

お前の作戦は奴らに見破られていたんだっ！」

side out

客席のほうからの大きな声。鋼侍の声だった。

ここから見てもわかるように、すごい汗を掻いている。

全力で走ってきたからなのか、肩の部分が少しはだけている。

元々少し破れていたチャイナドレスであの恰好は結構まずいと思う。

でもそんなことより、奴らってなんだろう？

「流石、天咲ってとこかしらね、正解よ。秀吉っていつコミはあそこにいるわよ」

木下さんは楽しそうに笑って、ステージ脇の一角を指す。  
そこにあっただのは、

「ひ、秀吉！？どうしてそんな姿に！」

ボロボロにされた拳銃手足を縛られた秀吉の姿だった。

「バ、バカな！」

雄二の目が大きく見開いて叫ぶ。雄二の作戦は失敗だ。

「……雄二の考えてることぐらい、私にはお見通し」

霧島さんが雄二を見て笑みを浮かべた。試召戦争では幼馴染という立場が

有利に働いたけど、今回はそれが仇になるなんて！

「ま、匿名の情報提供もあっただけだね」

木下さんが妙なことを言った。匿名の情報提供？

鋼侍の言っていた‘奴ら’と同じ存在だろうか？

「く……すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……」

倒れていた秀吉が起き上がり、申し訳なさそうに唇を噛んでいる。

けれどそんなことより、チャイナドレスで縛られているもんだから

物凄く目に悪い。いけない気分になってしまいそうだ。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「ムツツリーニ！いつの間に!？」

カメラを構えたムツツリーニが一瞬で僕らの傍に出現していた。

「一撮影なんてしてないで、早く秀吉の縄をほどいてあげてよ《その写真、後で売って欲しい》」

「明久。本音が混ざっているぞ」

しまった。つい僕の正直な部分が出ちゃったみたいだ。

「……………了解」

小さく頷くと、ムツツリーニは素早く秀吉に駆け寄ってその縄を解いていた。

できれば写真の件も忘れないでほしい。

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱い者いじめは好きじゃないし」

「くうっ……………！」

木下さんの降伏勧告に雄二は顔を歪める。

雄二の作戦は失敗このままでは正面から戦うしかなくなってしまう。  
そんなことをしたら僕らの負けは確定だ。

僕は救いを求めるように観客席側の鋼侍に向かってアイコンタクトをとろうとする。距離的にはつらいけどやるしかない！

（どうしよう鋼侍。このままじゃあ負けちゃうよー！）  
きちんと届いたかな？そしたら向こうからも返事が返ってくるはず  
なんだけど。

（今回は仕方ない。雄二に愛の告白紛いのことをさせる。  
反論を言ってくるようだったら、俺が殺すといっておけ。

（台詞はお前に任せる）

鋼侍は申し訳なさそうな顔をしながら、そう送ってきた。

今回は仕方ないんだよね。やるしかない！

僕は雄二に向かって小声で話す。

（雄二。僕に考えがあるから、指示通りの台詞を言ってほしい）

（考え？一体何を　　）

（今は迷っている余裕なんてないよ。とにかくよろしくー！）

(お、おう)

僕の指示だとバレないように雄二の陰にそれとなく身を隠す。そして、

念のためジェスチャーで秀吉にこっちに来るように指示を出す。

(それじゃ行くよ。僕の言ったことをそのまま言っただ。棒読みにならないようにね?)

(わかった。今回はお前に任せよう)

雄二が小さく頷く。よし、やるぞ!

翔子、俺の話を聞いてくれ

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

雄二が僕の台詞をそのまま告げる。よしよし。

お前の気持ちは嬉しいが、俺には考えがあるんだ

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には考えがあるんだ」

「……雄二の考え?」

俺は自分の力でペアチケットを手に入れた。そして、胸を張って

お前と幸せになりたい

「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張って  
お前と幸せになりたい　って、ちょっと待て!」

雄二が慌てて僕のほうを向こうとする。けど、そうはいかない。

後ろから強引に雄二の頭を押さえつけてやる。

「……雄二」

霧島さんはうつとりとした表情で雄二を見ている。

これを提案した鋼侍も苦笑気味だが、間違いではなかったはずだ。

だからここは譲ってくれ。そして優勝したら結婚しよう

「だ、誰がそんなこと言うかボケエツ!」

雄二が激しく抵抗してきた。ふん、バカめ!キサマの反応などお見  
通しだ!

「くたばれ」

「くへっ!?!」

後ろから激しく頸動脈を押さえる。これで聞き分けもよくなるはず  
だ。

「……雄二?」

霧島さんが続きの言葉を待ちかねている。お任せ下さい。貴方の期待に応えましょう！

(秀吉よろしく)

(うむ。了解じゃ)

ここで近くに呼んでおいた秀吉の出番だ。秀吉の声真似で止めを刺す！

「だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう。愛してる翔子」

本人と区別のつかない物真似で最後の言葉が紡がれる。

「……雄二。私も愛してる……」

「ま、待て……。俺は、愛してなど……」くっ！?

素直になれない雄二のために、反論できないよう首を捻ってあげた。

「ふはははは！これで最強の敵は封じ込めた！残るはキミだけだ！

木下優子さん！」

「ひ、卑怯な……！」

「でもアタシ一人でも吉井君には負けないはずっ！行くよ  
試獣サ召喚モン」



「ふふっそれはどうかな？この勝負の科目が保健体育だったことを恨むんだね！」

ムツツリー二に目配せをする。これが元々雄二の考えていた秘策だ！

「いくよっ！新巻鮭<sup>サーモン</sup>！」

「……………試獣召喚」

呼び声に応え、出現する召喚獣。それはたとえAクラスの木下さんでも

太刀打ちできないほどの強さを持った

「えっ！？それ、土屋君の……………！」

ムツツリー二の召喚獣だ。これが秘策『代理召喚（バレない反則は高等技術）』だ！

「……………加速」

「ほ、本当に卑怯　　きゃあっ！」

初撃から腕輪の力を発動させて勝負を決める。

保健体育であればムツツリー二に敵はいない！

『Aクラス　木下優子　&　Aクラス　霧島翔子

保健体育

321点

UNKNOWN

▣

VS

『Fクラス

土屋康太

&

Fクラス

坂本雄二

保健体育

511点

UNKNOWN

▣

こうして、決着はついた。

鋼侍は木下さんにさっきのことを謝りに行って、雄二はなぜか虚ろな目で

タキシードを着ていた。

ある意味物凄い勝負だったと思う。

第三十問（後書き）

G U ・ D A ・ G U ・ D A ・ D A ・ Z E ・

書いてる途中でめんどくさくなって、大変なことになってしまいました。

ご感想お願いします。

### 第三十一話（前書き）

感想の返信を今ここでさせていただきます。最近パソコンに触れてなかったものですから

返信が出せないでいました。

MONOさん 「」の抜けている場所を指示してくれば嬉しいです。

読んでくださってありがとうございます。

ためきさん 優子との発展はAクラスと交わることが少ないので、時間はかかるとは思います、頑張っていこうと思います。

ソーラさん 雄二だけを殺すことが多いのは確かですねw  
須川達を殺すことはなかなか難しいと思います、  
あいつらが異端審問会に引っかけることなんて皆無なので、

また別のことで殺そうと思いますw  
ムツツリーニは……まあ後で何とかします。

一番星さん 純粋な感想ありがとうございます。更新速度は遅くなりましたが、

これからも頑張っていきたいと思います。  
読んでくださってありがとうございます。

ヒョウガさん ご感想ありがとうございます。

また感想をくれたら嬉しいです。

### 第三十一話

.....  
 .....第六問.....  
 .....

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる

材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

天咲鋼侍の答え

『水酸化カルシウム 組成式  $\text{Ca}(\text{OH})_2$ 、式量 74.09・無色の六方晶系結晶

消石灰と呼ばれる ・580 で1分子の水を失い酸化カルシウムとなる』

教師のコメント

流石というべきですかね。答えだけではなくその物質の性質まで書いていることから

余裕の気配が感じられます。

天咲朱美の答え

『calcium hydration』

教師のコメント

間違ってると思ってxを付けてしまいましたが、調べてみるとあっていました。

すいませんでしたね。この問題が解けたということは日本語が読めるようになったという

ことでいいでしょうか。読みができるようになったら書きにも挑戦してみてください。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「明久。今日という今日はお前をクロス」

「あはは。やだなあ雄二。目が怖いよ？」

「ここは雄二に同情すべきところだな」

俺が頑張つて木下を説得している間に、明久は雄二にいろいろやってたみたいだ。

詳細は聞かなきゃわかんないけど。

「だいたい、雄二の作戦が読まれてたのがいけないんじゃないか。相手はあの霧島さん」

「なんだから、充分に考えられた事態のはずだよ？」

「ぐっ。それを言われると反論できん……」

「今回は雄二のせいじゃない。どんな作戦でやっても同じことが起こるのは」

「目に見えてるからな」

雄大（父親）がくれた情報によれば、鍵は教頭の竹原が握っている。

しかし、それを証明するにはあまりに情報が少ない。

俺一人が真実を知っていたとしても意味がないのだ。

「確かに鋼侍の言ってることは正しいかもね。霧島さんが相手じゃあ

作戦なんて考えても無駄だね」

「……鋼侍の言いたいことが全く理解できないなコイツ」

明久に言っても無駄だったようだ。こいつの頭じゃ情報が処理できなかつたか。

「ところで姫路や島田は教室にいるのか？」

「え？まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

この時間は姫路や島田、葉月ちゃんに朱美。さっき戻ったムツツリ  
ーニや秀吉も

喫茶店でウエイトレスをやってるはずだ。朱美は寝てるだけだけど  
な。

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずだと思っただが……」

「俺達がいなくなるタイミングを狙ってくるだろうから、おそらく  
教室では」

「……………鋼侍、雄二」

教室の前まで戻ってきたところで、ドアの前にたっていたムツツリ  
ーニが駆けよってきた。

「ムツツリーニか。何かあったのか？」

「……………ウエイトレスが連れて行かれた」

「ええっ！？姫路さん達が！？」

「……………うっ！うっ！手できやがったか……………」

俺達主力メンバーの俺、雄二、明久がいない間に何かやってくると  
思っていたが、

まさかこんな形で妨害してくるとは思いもしなかった。



「やはり、俺達3人と直接やり合っても勝ち目がないと考えたか。

当然と言えば当然の判断だな」

雄二の呟きが聞こえてくる。すでに勘づいていたのか。まあ俺が気づいていて

雄二が気付かないなんてことはほとんどないからな。当然か。

「ってそんなことより、姫路さん達は大丈夫なの!?どこに連れて行かれたの!？」

相手はどんな連中!？」

「落ち着け明久」

「へぶうつ!？」

俺は明久の顔面を殴りつけ、明久をノックダウンさせると、雄二と話を開始する。

「雄二、コレはお前の予想の範囲内か？」

「ああ。もう一度俺達に直接何かを仕掛けてくるか、

あるいはまた喫茶店にちょっかいを出してくるか。そのどちらかで妨害工作を

仕掛けてくることは予想できたからな」

今回の相手の目的は売り上げに関することだろう。ウェイトレスを連れ去る

ことによつて客足を少なくさせて、喫茶店の失敗を謀る。

でも今回はやりすぎだ。警察沙汰にもなりかねない。

「引つかかることが随所あつたからな」

何回か俺と同じように考えごとをしている場面があつた。その時から引つかかることが

あつたんだろう。

「……………行き先ならわかる」

と、ムツツリーニが取り出したのは盗聴器。……………なんで持つてるんだ？

「了解だ。なぜ持つてるのかはあえて聞かない」

クラスメイトから犯罪者が出るのは避けたい。

「さて、場所が分かるなら簡単だ。かるくお姫様を助け出すとしましょうか、

王子様？」

雄二はにやついた顔で、先ほど復活したばかりの明久に言う。

「そのニヤついた目つきは気に入らないけど、今回は感謝しておくよ  
姫路さんに何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないか  
らね」

「……それが向こうの目的だろうがな」

「……………」

「え？」

「とにかく、まずはあいつらを助け出そう。ムツリニ、タイミン  
グを見て

裏から姫路達を助けてやってくれ」

「……………わかった」

「僕らはどうするの？」

「王子様の役目は昔っから決まっていることだろう？」

茶目っ気たっぷりの目が明久に向く。

「王子様の役目って？」

ピンとこないようだ。普通ならわかるはずなのにな。

「お姫様をさらった患者を退治することね」

『さてどうする？天咲と坂本とこの人質を盾に』

吉井だったか？そいつら、

して呼び出すか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。

今はあまり聞かないが、中学校時代は相当鳴らしていたらしいからな』

『じゃあ天咲つてやつはどうなんだ？』

『……………学校一つ丸ごと潰したらしい』

『……………』

『勝てるわけなくね？』

『この学校では【白銀の騎士】、一部では【破滅の天使】、一回だけ聞いたことがあるが、』

【裏会の聖騎士】とも聞いたことがあるぞ』

『……………』  
『……………』  
『……………』  
『……………』  
『……………』  
『……………』

ムツリーニの受信機から色々聞こえてきた。俺の恥ずかしい二つ名がどんどん挙げられていく。

懐かしい響きもあったような気がするな。うん。

(……鋼侍、お前は一体何をしていたんだ?)

(それは聞かない方がいいよ雄二。あれは見てる方は爽快だけど、実際受けてる方は

皆病院送りだからね)

まあそんな話をしながら、ムツツリー二に案内されたのは、文月学園から歩いて

5分程度のカラオケボックス。そのパーティールームに連れて行かれたらしい。

『お、お姉ちゃん……』

『アンタたち！いい加減葉月と朱美を放しなさいよ！』

聞こえてきたのは島田の怒鳴り声。葉月ちゃんと朱美が捕まってるせいで

ろくな抵抗もでないらしい。なぜ朱美が捕まっているんだ？

自分だけでも逃げられたらどうに。……ってまさか寝てるのか!?

『お姉ちゃん、だつてさ！かわいー！』

『ギャははははー！』

吐き気すら覚える外道の声は7人分。どうでもいいから早く帰らせて欲しいんだが。

(待て、明久に鋼侍。勝手に行動するな。気持ちはわかるが、まずは人質の救出が)

先だ。ムツツリーニが上手くやるまで待っている)

(……わかったよ)

俺は納得できなかったが、とりあえず待ってみる。

『……………灰皿をお取り換え致します』

『おう。で、このオネーちゃんたちどうする？ やっちゃっていいの？』

『だったら俺はコツチの巨乳ちゃんがいいなー！』

『じゃあ俺はこの綺麗な髪してなかなか胸のある可愛い子貰うな！』

『あっ！ズリー！それなら俺2番ね！』

『あ、あのっ！葉月ちゃんと朱美ちゃんを放して、私達を帰らせて下さいー！』

『だってさ。どっつする？』

『それはオネーちゃんたちの頑張り次第だよな？』

『やつ！さ、触らないで』

『ちよつと、やめなさいよ！』

『あーもう。うっせえ女だな！』

『きやあつー！』

ドン、という何かを突き飛ばした音と島田の悲鳴。そのあと数秒遅れて

聞こえてきたのは、ガシャアアンなんていう、まるで何かがテープルを巻き込んで

倒れたような音だった。

俺の中の何かがトんで、視界が真っ赤に染まる。

（おい、明久、鋼侍！）

雄二の制止するような声が聞こえたが、そんなことはどうでもいい。

俺は先に行った明久を追い越し、ボックスの扉を蹴飛ばした。

バゴンツ！と音を立て、扉が吹っ飛び相手の男のうちの一人に直撃したのが見えた。

葉月ちゃんを掴んでいた野郎に当たったみたいだ。

「な、なんだデメエは！？ダイスケに何しやがる！？」

「兄貴っ！」

寝ていると思われた朱美は手足首を縛られて、

動けなくなっている。だから反抗できなかったのか。

後ろから、数秒遅れて明久も登場する。

「よ、吉井君に天咲君？」

「アキ……」

身を縮めている姫路と、尻もちをついている島田も見えた。少し離れたところで秀吉も確認できた。

「アキヒサ、オマエハムコウニイッテ、ヒメジタチヲアンゼンナト  
コロマデツレテイケ

コイツラハオレガコロス。ビョウインオクリナンテナマヤサシイ  
ノハヤメダ」

俺の言葉はおそらく相当カタコトになっているだろう。

俺はそんなことより、こいつらを殺すことに頭が向いている。

「オレノリセイガスコシデモノコツテイルウチニココカラニゲロ。」

「ジャナイトオマエマデコロシテシマウカモシレナイ。ダカラニゲ  
ロ」



「い、鋼侍……?」

「ハヤクツ!」

「う、うんっ! 姫路さん達は早く逃げて! 美波は僕につかまって!」  
そう言っつて、明久たちは逃げようとする。

「テメエら待ちやがれっつてごぼっ!」

明久達に掴みかかるうとした男の顔面にハイキックをかます。

壁にぶつかって、咳き込んでいるようだ。そしてそのまま倒れる。

それを見ている間に、朱美を除く、男たち以外は逃げることに成功したようだ。

朱美は手足を縛られているからソファに寝転がったままだが。

「テメエぶざげやがっつてっ!」

その声を聞き、周りの4人の男たちが一斉に俺に向かって襲いかかってくる。

ジャンプのワン　ースのサ　ジっつて言ったらわかるかな?

手を軸にして、地面で回転させ足を開脚状態にしてかかどで蹴り攻撃する。

マンガのようにあそこまで吹っ飛ぶことはないが、それなりにダメージを与えることはできる。

一人は壁に頭を強打して、昇天した。こいつら身体弱すぎねえか？

「集団できてもこの程度か？所詮チンピラでしかなかったようだな」

俺は体制を元通りにして、倒れているチンピラを見下ろす。

見ているだけで吐き気がしそうだが、俺は耐える。

「ふ、ふざけやがってえええええええええっ！」

一人の男が突進してくる。まるでイノシシのようだな。

俺はスッと左に避けて、わざと歯を殴る。こっちも痛いけど、向こうは前歯がすべて折れる。

歯が折れることはそこまで痛くないけど、喋りにくくなるだろうな。

見た目も悪くなるし。

「醜い豚だな。さっさと失せろ」

俺は先ほど突っ込んできた男の鳩尾に膝を入れる。

男の口から血と嘔吐物が出てきた。汚いったらありゃしない。

俺はこの男を、他の男に向かって思いっきり投げつける。

かなりの速度で投げたので、男の飛んだ方向にいた男は豚（さつき  
の男）と一緒に

ぶっ飛び、壁にぶつかる。

「げふっ」「

二人の男がいつせいに悲鳴を上げる。これで二人とも撃沈。あと残り  
は一人となった。

「う、うわあああああ！！く、来るなあ！」

最後に残った一人は仲間が全員やられたことから、恐怖を感じてい  
るらしい。

身体はどんどん出口の方へ近付いていく。

しかし、俺はこいつらを許す気もないし、逃がす気もなかった。

俺は最後に残った一人の男の首を掴み、持ち上げた。

「あ、あががががががっ！」

首を持ち上げられた男は苦しそうにもがいている。

俺は掴んだ首の頸動脈をおもいつきり抑えた。

そうすると、相手の首はカクンと落ちて、気絶したのがわかった。  
呆気ないものだな。

これじゃあつまんないので、内臓を殴り、そのあと肋骨を数本折って、終わらせた。

もちろん他の連中にもおんなじことをしておいた。ここは平等にしておかなきゃね。

皆平等。なんていい言葉なんだ。全員口から血を流し止まらない。殺人現場にも見える。

「はあ。結局全員病院送りかよ。一人ぐらい殺してもいいんじゃないかな？」

「兄貴。そんなこと言ってないで縄ほどいてよ」

ソファに寝っ転がっている朱美から苦情が来た。まあ当然か。

俺は朱美に近寄り、手足にある縄をほどいた。

「ありがと。じゃあ戻ろっか」

朱美はそう言って、立ち上がり、倒れた男たちの大事なところを踏みつけながら

ボックスから出て行った。アイツもなかなかエグイことするじゃないか。

俺はやれやれなんていいながら、ボックスを後にした。

あいつらどうするんだろうな。なんてぼこぼこにした張本人が心配をしている。

まあそんなことを気がかりにしながら、教室に戻って行った。



### 第三十一話（後書き）

なんか久しぶりに書いたからわけわからなくなってるなw

まあ一応明日も更新するつもりなんでよろしくお願いします。

## おまけ5 (前書き)

高校生活って思ってたほど面白くないですね。

まだ一カ月たってないけど不登校になりそうです。

親が許さないけどね。



## おまけ5

俺と朱美が明久達と合流した後真つ先に教室に戻り、少し話しこんだ後解散と

なった。今現在教室にいるのは俺と明久と雄二の三人だ。

「明久、鋼侍。そろそろ来る時間だぞ」

テーブルでお茶を飲んでいると、雄二が突然そんなことを言い始めた。

「ババアのことか？」

「ああ、そつだ」

「え？いったい何のこと？ババアって言うつと学園長だよな？なんでわざわざここに来るの？」

「さつき俺が廊下で学園長とあつた時に『話を聞かせろ』ってな」

「話ねえ……。ダメだと雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるなら」

「こつちから行かないと」

「面倒くさいうえに元よりババアが引き起こした問題でもある。

なんで一々こつちから出向かなきゃならねえんだよ」

「ババアに原因が　えええっ！」

気付いていなかったようだ。ここまでされたら普通気付くだろうが。

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分と御挨拶だねえ、ガキどもが」

声と同時に教室の扉がガラガラと音を立てて開いた。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め！」

「俺はそこまで言っていないけどまあいいや。人を待たせといて最初のセリフが

罵倒とはどういうことだババア」

「おやおや、いつのまにかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

俺の話は無視ですかこのアマ……って歳でもないような気がするの  
でやっぱりババア。

「ある意味黒幕かもしれないけどな。そうじゃなかったとしても

大切な情報が抜け落ちてるんじゃないか？俺達に話すべきことはあ  
れだけじゃないだろ。

話さないのなら、これは裏切りの行為とみなして一方的に要件を押し

し付けるぞ」

実際にこちらはそのことで被害を受けている。話さないのなら無理にでも聞きだす。

まあ大体の事情はなんとなくだが掴めるけどな。

「ふむ……。やれやれ。賢しいやつらだとは思っていたけど、まさかアタシの

考えに気がつくとは思わなかったよ」

雄二は繋ぐように言葉を並べる。

「最初取引を持ちかけられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら

何も俺達に頼む必要はない。チケットは優勝者のみに送られるチケットだ。

だったら最初から鋼侍達に頼めばいい。それなのに始めに俺達を選んだ。

あまりにも不自然だと思わないか？アンタが理由もなく俺達を擁立するわけもないしな」

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することはできない、

とは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修に関しては渋ったりなんかしないはずだ。

教育方針なんてものの手前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。

教育者側、ましては学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にわざと渋ったってこと？」

「応要点だけはつかめてるんだよな明久って。普段の生活にもそういうことがあつたらな……」

「そういうことになるな」

雄二がそういったのを聞いて明久は「こ、このババア……！」って顔をしている。

「あの時、俺がババアに一つ提案したのを覚えているか？」

「提案？え〜っと」

「科目を決めさせるってヤツかい。なるほどね。アレでアタシを試そうってワケかい」

「ああ。めぼしい参加者全員に同じように提案をしている可能性を考えてな。

もしそうだとしたら、俺達だけが有利になるような話には乗ってこ

ない。だが、ババアは

提案を呑んだ」

俺はやれやれと言った風に繋ぐように言う。

「提案を呑んだということは、他の奴らじゃなくて俺達が入賞しなくちゃ

ババアが困るということ。この時点で何か理由があると思うだろ？

それに学園祭の喫茶店ごときで営業妨害がでたり、対戦相手に情報を流す

密告者がいたりといろいろあつたしな。終いにはウエイトレスの誘拐ときた。

ここまでしてやりたいことはなんなのか？まあ色々考えて、接点を繋いでいったら

アンタに返ってきたっていうわけさ」

実際にアレはやりすぎだからな。本当はあいつらを殺してやるうかと思っただが、

それは任務で発散するということ、自分自身を納得させた。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか……すまなかったね」

と、突然学園長が俺らに頭を下げてくる。流石に責任を感じているのか。

「お前たち二人の点数だったら集中力を乱すだけで勝手に潰れるだろうと」

最初は考えていたのだろうけど……ここまで進まれて焦ったんだろ  
うね。

アンタら兄妹のほうはまた別の仕掛けが待ってるだろうけど

ここところは耐えてくれとしか言えないね」

申し訳なさそうに俺を見ながら頭を下げてきた。まあ俺達兄妹は

こんなことじゃあ全く効果がないと思われているんだろう。

仕掛けてくるとしたら帰り道、夜中、明日の朝のどれかだろう。

「さて、こちらのタネ明かしはこれで終わりだ。今度はそっちの番だ」

「はあ……。アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったん

だけどね……」

だから誰にも公言しないでほしい。そんな前置きをして、

学園長は俺らに真相を話した。

「まあ要訳すると……学園長の目的はチケットの回収ではなく

『しろがね白金の腕輪』と『琥珀の指輪』の回収が本来の目的であるということだ。

『白金の腕輪』はバカにしか使えず、

その逆に『琥珀の指輪』はよほどの天才にしか使えない。

『金剛の首飾り』は圧倒的な点数を誇る教科で使わなければ即暴走。

『白金の腕輪』は片方の召喚フィールド作用はそこまで危惧することではないが、

同時召喚用は現状のままだと平均点程度で暴走の可能性があると。

『琥珀の指輪』はある一定ラインを越えなければ暴走の可能性あり、ということだな」

俺は今までの要点を簡単にまとめて言ってみた。ババアはそれに頷き、

「まあそういうことだね。詳しく説明すると、

『金剛の首飾り』は600点を超えてなければいけない。

『琥珀の指輪』は総合5000点を超えていなければならない。

こんな点数取れるのはアンタ達兄妹ぐらいいかないからね。

アンタ達兄妹には絶対に優勝してもらわなきゃいけないというわけだよ。

お前達バカ二人には三位になってもらわなければいけないのさ」

学園長はやれやれといった風にお手上げのポーズをとって見せた。

「そうか。そうになると、俺達の邪魔をしてくるのは学園長の失脚を狙っている

立場の人間 他校の経営者とその内通者といったところだな」

「二人とも僕一人だけを置いていくように話を進めていくのはやめてほしいな？」

「やれやれこのバカが……。俺達の邪魔をするってことは、腕輪の暴走を阻止

されたら困るってことだろ？そんな学園の醜聞をよしとするヤツなんて、

うちに生徒をとられた他校の経営者くらいしかないだろうが」

雄二は呆れた顔をしながら説明をしている。

どうして明久はバカなんだろう？いや、明久だからバカなのか。



「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにはいかないからね。」

恐らく一連の手引きは「教頭の竹中だろ?」ほう?そこまで頭が回っていたのかい?」

俺を驚いたような顔で見つめてくる。ババアに見つめられても全く嬉しくねえな。

「俺の情報網を舐めないでもらえるかな?俺の隣人から教頭が

いろいろ動き回っているのを聞いたし、俺に対する接し方も明らかにおかしかったからな。」

他にもいろいろ怪しい動きをしていたしな。例を上げるとしたら

近隣の私立高に出入りをしているのも発見されてるしな」

「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは」

「まあ教頭の差し金だろうな。協力してる理由まではわかんないけどな」

まあ金とか、成績を上げるとかそんな感じの類だろうがな。

明久はふむふむと頷いて、思ったことを口にした。

「あのだ、コレって かなりマズい話じゃない?」

「そうだな。文月学園の存続が懸かっている話になるな」

「あ、でも。いざとなったら入賞者に事情を話して回収したら」

「お前ちゃんとトーナメント表見たか？お前らの次の相手は常夏コンビだぞ。」

あいつらは教頭側の人間だから嬉々として観客の目の前で暴走を起すだろうな」

まあ最初っから話しあいで解決する話じゃないけどな。

「悪いがアンタ達にはなんとしてでも入賞してもらわなきゃいけないんだよ」

学園長は表情を硬くして俺らを見ている。事態は結構深刻みたいだな。

「まさかこんなことになっているとはな」

雄二もこれは想像以上だったらしい。俺はこういうことは慣れているが、

学校で起きるとなると話は違ってくる。

「学園長、最後に質問です」

明久は結構真剣な顔をして学園長に話しかける。

「なんだい？」

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点いかなければ起こらないんですか？」

「そうさ。一つや二つ科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

明久達が暴走を引き起こしたんじゃ話にならないしな。

雄二も総合ではそこまでの域に達してないし、問題はなさそうだな。

「二人とも。聞きたいことは聞けたし、今日はもう帰ろう」

「そうだな。家に帰ってやることもあるし　明日も早いしな」

「まあここにおいても意味はないしな」

「それじゃ、アタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がる。

「お前たち、明日は頼んだよ」

「はい」「ああ」

俺は明久達と別れ、すぐに帰路についた。

家の電気は消えていて、朱美の部屋の電気もついていない。

門をくぐり抜け、家のカギを開ける。

ガチャ、と鳴ったのを確認すると、音を立てないようにゆっくりと扉をあける。

この家の扉は防犯対策用なのか、扉を開けるときにギイッと大きな音を立ててしまう。

近くで聞けばかなりうるさいし、結構遠くまで聞こえるので近所迷惑にならないように

するためにも音が鳴らないように心がけているが、今日は朱美がもう寝ているので

念には念を入れて、いつもより慎重に扉をあける。

玄関に入り、入ってきたときと同じ要領で扉を閉めて、靴を脱ぎ自分の部屋に向かう。

「はふう。今日は一段と疲れたなあ」

俺は近くに置いてあったクマのぬいぐるみを抱きしめ、ベットに転がりながら

そんなことを言った。

実際今日はいつもの五倍くらいの疲労感がある。一体今日だけで何人葬ったことだろう？

俺は指を折って数えてみる。……あれ？指が足りないな？

そんなアホなことを考えながら、今日あったことを整理してみる。

まず最初に常夏コンビが現れてボコして、メイド服で大会に参加して、

チンピラボコして、チャイナ服で大会に出て宣伝して、親父にあつて、

誘拐犯ボコしてe t c……

まあこんな感じか。

そんなことを振り返りながら、さっきコンビニで買ってきたチヨココロネを頬張る。

飯は作るのめんどくさかったし、なによりこっちは疲れている。

朱美もいろいろあって疲れているんだろう。特に最後のは酷かったしな。

少し朱美のことが気になったので、ベットから降りて、立ち上がる

P i r r i r i r i r i r i r i r i r i r i r i r i r i !

無線機が鳴り始めた。何かの仕事だろうか？

俺は無線機を手に取り、連絡を聞く。

「こちらアヴェンジャー。何かの任務でしょうか？」

「ああ、そうだ。ここから少し離れたところのある山で何かの暴動があったらしい。」

詳細は不明だが、一応調べておくにこしたことはない。武器は軽装備で行っとけ。

こちらに敵意があるようなら、殺してもかまわん。それではな」

それだけ口にするると、無線は向こうから一方的に切られてしまった。

「拒否権はなしだよ。めんどくさいな」

殺してもかまわんでアンタねえ、って言いそびれたじゃないか。

まあ今の俺には好条件なんだけどな。一人ぐらいは殺してしまいたい気分だしな。

しかし、そんなことよりも俺は朱美のことが気になった。

気になることは先に済ませてしまいたい性格の俺なので、

朱美のことを優先することにした。

俺は家の目の前に置いてあるバイクを確認してから、朱美の部屋に向かった。

静かに扉を開けると、少し苦しそうな声をあげながら抱き枕にくっ付いて寝ている

朱美の姿が見られた。やはり誘拐のことがあったせいだろうか？

俺はそっと近づき頭を撫でてやる。少し安心したのか寝息はゆっくりとしたものになった。

「すまなかったな。もう少し俺がしっかりしていたらこんなことにはならなかったはずなのに……」

朱美はこう見えて正義感の強い奴だ。寝てるか体を動かしてるか、ゲームしてるか

という、普段の生活からしてみれば考えられないことだが、

こいつをこの三ヶ月間ほど見てきていろいろわかった事の一つである。

自分を盾にすることで、他のみんなの被害を最小限に抑えようとしたのだろう。

結果的にはあまり変わらなかったみたいだな。

俺は撫でることを止め、部屋から出ようとする。

扉を少し開いたところで寝ている朱美に向かって言葉を紡ぐ。

「これは俺のひとりごとだ。ここに残りたいのならば俺が力を貸してやる。

向こうへ戻りたいと言っならば俺は止めない。それだけだ。じゃあな」

俺は朱美の部屋を後にして、現場に直行した。

朱美 s i d e

アタシは兄貴から助けってもらった後、家にすぐに帰って自分の部屋に直行した。

そろそろ引越しの準備を始めなくちゃならないからなんだけどね。

期限は明日まで。実際は先週の時点で帰らなきゃならなかったんだけど

アタシが無理にお願いして、文化祭の最終日まで延ばしてもらった。

両親がアタシを向こうに連れ戻す理由は簡単。

両親がアタシと兄貴と一緒に暮らしていきたいという願望によるもの。

ものすごいエゴかもしれないけれど、仕方ないっちゃ仕方のないこ



と。

特にアタシについては絶対的って言ってたっけ？

兄貴はこっちの生活になじんでいるから無理には返さないけど、

アタシは向こうにいた期間のほうが圧倒的に長い。

こっちの生活は大変だけど、毎日がとても楽しかったので個人的には

かなり気に入っている。兄貴はもちろん美波達も良くしてくれた。

わからないことがあったらすぐに教えてくれたし、

兄貴はすぐに肩を貸してくれたりもした。だんだんここがアタシの居場所なんだと

思うようにもなっていた。

バカばっかのクラスだったけど、毎日が充実してて、笑いが絶えなくて……。

いろいろ思い返してみれば、こっちにきて苦しいと思ったことなんてほとんどなかったな。

向こうでは毎日が勉強。それ以外何も無い。

友達はいなかったし、作るうとも思わなかった。

皆飛び級で上がってきたアタシを睨んでたし、地味な嫌がらせも数

え切れないほど受けた。

そんな奴らと友達になろうってのがおかしいと思う。

娯楽ならマンガとかゲームとかで十分だと思ってたし、別に求めようともしなかった。

そんなことをしていたある日、アタシは両親から日本へ行くように勧められた。

理由は、忙しいから構ってる時間がない。それじゃあなんだから

実の兄と会って、向こうで一時的に暮らしてみないかということだった。

アタシはこの話を聞くまで自分に兄がいることなんて知らなかったし、

なぜ兄がアタシたちと離れて生活しているのかが分からなかった。

理由を聞いてみれば両親は曇った顔をするだけで何も言わなかった。

何かあるんじゃないかと思い、アタシはしつこく両親に聞いた。

三十分ぐらいだろうか？ずっとその話題を振っていたら、観念したのか

ぼちぼちと話し始めた。いろいろな話を聞いている間、アタシは

兄という人がどんな人なのかいろいろと想像してみた。まあ結果的

に、

マッチョなくせに根暗で、冷徹な心を持ったヤツ。

というのが結論になった。

まあそんな感じで、何日か経ってアタシは日本に行った。

道案内は使いをを付き添わして、歩いて行くうちに家に着き、そこで使いとも別れた。

私は親から貸してもらった針金を使って、無理やり鍵を開けて中に侵入した。

そのときはまだ兄は帰ってきておらず、アタシはリビングにあったソファに座って

兄が帰ってくるのを待っていた。そこから10分ほど待って、家の扉が

開く音が聞こえてきた。空き巣だったら困るので、親から少しだけ教わった護身術の

構えをとる。しかし、入ってきたのは細身で白銀の髪をポニーテールにして、目が蒼く

警戒している目をしたアタシより少し背が高い、綺麗な少年だった。

「ん？あんた誰よ？」

アタシの口から出たのはそんなセリフだった。

「お前こそ誰だ？勝手に人の家に入り込んで、不法侵入罪で訴えるぞこらあ」

それが兄貴との出会いだった。

ある意味もの凄い出会い方だったのかもしれない。思い出せば笑えてくる話だ。

クラスに入ってみれば、いままでの学校とは真逆でアタシの存在をすぐに受け入れてくれた。ホントにバカばっかだったけれど

本当に楽しい日々が過ごせていた。

友達はすぐにできるし、アタシを妬む奴なんてだれ一人いなかったし、

本当の自分がすぐに出すことができた……。

けどその幻想も明日で終わることになる。明日には向こうに帰らなくちゃいけない。

そう思ったら胸が物凄く痛んだ。

帰りたくないなんて思っちゃいけないことを考えてしまっ、そんな自分がいた。

アタシは引越しの準備を止めて、この思いを振り払うようにベット

にダイブする。

バネによってアタシの体は一回だけはねて、また元通りになる。

制服のままだったけどそんなのは関係なしにベットに潜り込み、抱き枕を抱える。

抱き枕を抱き締めれば抱き締めるほど帰りたくなってしまう。

いつのまにかアタシは泣いていた。少しだけ嗚咽が出てしまっている。

そんなのはお構いなしに、ホントに静かだけど扉を開く音が聞こえた。

あの扉はどんなに音を立てないようにしても、音が鳴ってしまう不思議な扉だ。

アタシは頑張つて息を潜める。ぺたぺたと兄貴が歩いてくる音が聞こえてくるからだ。

その足音は通り過ぎ、少し離れたところから扉の開く音が聞こえてきた。

自分の部屋に入ったのだろう。アタシはほっとしたように息を吐く。

嗚咽が聞こえていたらかなり恥ずかしいので、息を潜めていたのだが、

ばれずに済んだようだ。アタシは再び抱き枕を強く抱きしめる。

しばらくそうしていると、兄貴がアタシの部屋に入ってきた。

アタシが寝ているかと思っっているのだろう。扉の開け方もゆっくりとしたものだった。

そしてゆっくりと気配が近寄ってきたのを感じて、アタシの体が強張った。

アタシの顔は抱き枕に埋もれているので顔は見えていないだろうが、体が強張っているのはすぐにわかるだろう。兄貴はそつとアタシの頭を撫でてきた。

ゆっくりと優しく、慈しむように撫でてくる。

そうされているうちに体の力が抜けていった。

「すまなかつたな。もう少し俺がしっかりしていたらこんなことにはならなかつたはずなのに……」

兄貴がそういったのが聞こえてきた。それは引越しのことなのか誘拐のことなのかは

わからない。もしかしたら両方かもしれないけれど。

兄貴はアタシの頭を撫でるのを止めて、部屋を出ていこうとする。

もうその頃にはアタシは安心のせいか、睡魔に誘われて寝てしまい

そうになっている。

「これは俺のひとりごとだ。ここに残りたいのならば俺が力を貸してやる。」

向こうへ戻りたいと言っならば俺は止めない。それだけだ。じゃあな」

そう言い残して去って行ってしまった。

何かを言おうとしたが、アタシの意識はすでに睡魔にやられてしまっていた。

Side out

「一体何人いるんだこいつらは!？」

俺が現場に到着して30分。俺は暗闇の中襲いかかってくる影と戦っていた。

実際に影と戦ってるわけではないが、相手が黒い服、(おそらく学ランだろう)

を着ているので、照明のない山の中では影にしか見えない。

懐中電灯を持っているやつのは確認できるが、それ以外は全く見えない。

暗闇の中、気配だけで相手のことを確認して戦っているが、もう20人ぐらいは

やったはずだ。それでもうじゃうじゃと湧いて出てくる。

それに加え、敵の所持している武器もかなり危険だ。

ガスガン、金属バットや竹刀に木刀、人それぞれだ。

それに比べ、俺はサバイバルナイフと単発式の銃COLTを使っている。

替えの弾は沢山持ってきてあるが、この人数相手に使うのは正直言っ  
てきつい。

サバイバルナイフは威力は申し分ないが、リーチが短すぎる。

金属バット相手じゃあ分が悪すぎるのだ。

回避するにしても、回避直後に後ろから襲われたんじゃあ終りな  
で、

柔術を使って投げ飛ばすぐらいしかよける方法はない。

「これって暗殺の部類じゃないだろ！？なんでこんなのを俺にやら  
せるんだ！？」

まあそんなことを言ってるひまもなく

「死にくされやあああああああっ！」

後ろからバットを持った男が襲いかかってくる。



俺は左にステップして、右足で相手の顔面を蹴飛ばす。

「ぐへっ!?!」

奇妙な声を上げ、振つとんで行く先には他の奴らもいたらしく、巻き添えを食らっていた。

そいつらに追い打ちをかける暇もなく、横からガスガンを構えた奴が見える。

俺はそいつに向かって飛びかかることによって距離をゼロにし、膝蹴りを繰り出す。

男は俺の行動に気付いたのか、銃器で防御の体勢に入ってきた。だが甘いっ!

俺は男の想像を上回る勢いで膝を前に突き出し、銃器をへし折って顔面に食らわせた。

俺膝には鉄の膝当てがあるので、こっちは痛くもなんともない。

しばらくの戦闘を続けていると、体がだんだん言うことを聞かなくなってきた。

疲労が溜まりすぎたのだ。意識が朦朧としてきたところで、

バンッ、という銃声とともに、肩に何かを受けた。

「ぐあああああっ!?!」

あまりの痛みに意識が刈り取られそうになったが、ぎりぎりのところで持ち直す。

俺の肩からは真っ赤な血が溢れだしている。しばらく止まりそうもない。

そんな俺の肩に弾を直撃させた奴はガッツポーズをとっていた。

俺はその姿を見て怒りが溢れだし、視界が真っ赤に染まった。

「あああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああつつつ！！？」

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す  
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す  
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す  
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す

頭の中がそれ一色に染まり、俺は次々に銃を相手に向け、撃ちまくる。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死  
ね死ねっ！！！！！！！」

一発の無駄もなく、弾は吸い込まれるように相手の頭を撃ち抜いてゆく。

言論は汚くてもそれは舞を踊るかのように美しく、血が彼を着飾るように舞っていった。

それは『破滅の天使』の名に恥じない殺し方であった。

周りの敵を全員殺し終えたころには午前三時を超えていた。

途中からの記憶は飛んでいる。今体のアドレナリンが切れたため、

肩の痛みが大きくなり始めていた。

「早く傷の手当てをしないとまずいな……とりあえず学校に行つとくか。」

学校なら鉄人がいるし……なんとかしてくれるだろう」

ふらふらになりながらもバイクにまたがり、学園へ向かう。

学園に着くころには肩の痛みが半端じゃなくなっていた。

途中で応急処置はしておいたが、所詮応急処置でしかない。

傷口なんてすぐに開いてしまうだろう。

俺は自分の教室、二年F組の教室に入り倒れこむ。

「は……っはは……流石に疲れたなあ……。」

ここまでくれば後は先生が気付いてくれるだろう……。」

肩がズキズキと痛むが、そんなことよりも眠気のほうがすごかった。

出血はそこまで多くないはずだが、貧血にはなるだろうな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の意識はここまでしか続かなかった……。

おまけ5 (後書き)

グダグダ感がまたアップしたなあ……。

いろいろ考えてるうちに時間がなくなっ  
てこんなふうになってしま  
いました。

まあ後で挽回してみせますよっ！……多分。

感想お願いします。

## おまけ6 (前書き)

O r z

今言いたいのは、完全にスランプ状態に陥ったということだけではない、ただの言い訳ですね。  
すいませんOTL

## おまけ6

明久side

昨日雄二達と別れてからすぐに寝た。

理由は……あんまり聞かないでほしいな。

疲れているっていうのもあったけど、むしろ、あれ、のほろが酷かった。

まあ、そんなこんなで今午前5時。

きゅるるるるるるるるるる。愉快な音が腹部からなり始める。

「お、お腹が減ったよ」

あまりの、空腹、で起きちゃったんだよね。昨日台所で冷蔵庫を開いてみれば

食材ゼロ。これはいつものことなので我慢できるレベルだ。

食器棚のほうへ目を移すと、砂糖ゼロ、塩ゼロ、サラダ油ゼロetc……

まあ食べるはおろか舐めることさえ許されない状態だったんだよね。

手持ちの残金を調べてみると……920円。生活できるレベルじゃないし、





いつもならワンコールで出るはずなのに……

ガチャ、只今留守にしております。ピーッという音が

僕は？のボタンを押し、ついでに電源も消しておく。

緊急時に携帯が使えなかったら意味ないからね。

「仕方ないか。コンビニで何か買っていい？」

そう言っただけは家を後にした。

買ってきたのは105円のツナマヨのおにぎり一個。

これ以上何かを買ったらこれからのお金の行き先が不安になってしまっただけだ。

まあそんな感じで今登校中。雄二も補充テストをするはずなので早めに来ているはずだ。

「やっぱりこれ一個じゃ物足りないよ……」

そんな愚痴をこぼしながらも、もぐもぐとおにぎりを食べながら学校に向かう。

学校に着くころには朝焼けが綺麗に空に浮かんでいた。

「まだ早かったかな？でも早めにテストを受けるに越したことはな

いよね？

先生も何人かいるみたいだし」

僕は先に職員室によって、鉄人を呼び2年F組の教室へと向かっていった。

教室の目の前まで来て、誰もいないのを確認すると

僕は教室の扉を思いっきり開け出来心でやってみた。

「手を上げろっ！金を出せっ……って鋼侍っ!？」

目の前には血まみれで倒れている親友？（悪友）がいた。

Side out

鋼侍 side

「ん……んんっ……うっは………?」

「学園の保健室だ」

隣りからドスのきいた声が聞こえてくる。視線をそちらに向けると、  
我らが担任西村先生の姿がそこにあった。俺は寝たままの状態で話しかける。

「俺は2?Fの教室にいたはずですが……」

そう。俺はよくわからん黒い連中との戦闘の途中肩を撃ち抜かれ、戦闘終了後応急処置をして教室に向かった。そこまでは覚えている。どうして病院に行かなかったのかというのは……頭になかったからとだけ言っておこう。

「一体お前は何をしていたんだ？ここ最近任務はなかったはずなんだが……」

それとも背後から狙われたのか……どっちなんだ天咲？」

呆れたような顔をしながら聞いてくる鉄人。俺はその言葉に脳内が？で埋め尽くされる。

「……は？俺は任務ってことで敵集団の殲滅に近くの間まで向かったんですが……」

「俺はそんな話聞いてないがな。総司令官である俺を通さない任務などないはずだが、何かの間違いじゃないか？」

どうもおかしい。確かに任務は調査班のほうから一旦総司令官に情報渡り、

総司令官が指示をだしてから正式に任務として俺達が動くことになっている。

それでは今回の任務は一体何だったのか？通信先は確かに本部だったし、

呼び出しをしたのは……誰だ？あんな声をした人間が本部にいたか？  
状況も詳しく伝えず、連絡も無理やり向こうから切るなんてことが  
今まであっただろうか？否、一回もなかったはずだ。

ということは本部が一時的に何者かに乗っ取られたと考えたほうが  
いいだろう。

本部に待機しているのは多くて5人。本部にいる人はみな戦闘経験  
はあるが、  
どちらかというテスクワーク派が多い。

戦闘派はその数が限られているので、よほどのことがない限り本部  
にいることはない。

襲撃されても太刀打ちができないのは当然と言えば当然である。

「先生」

俺は痛む右肩を左手で押さえながら起き上がり、先生に話しかける。

「ん？なんだ？」

「一度本部に戻ってくれませんか？調べたいことがあります。あと  
本部の確認も

含めてなんですがね。行ってくれるなら俺がここに来るときに使っ  
たバイクを使って

ください。確かここはバイクでの登校は禁止だったはずですから、  
俺が乗っていたのがばれたら面倒なんで」

先生は少し困惑した表情を見せたが、しばらく考えるポーズをとってから、了承の返事をした。

「……わかった。俺はあえて何も聞かん。詳しいことは後で電話するなりしてくれ」

そう言うってから先生は保健室の扉を開いた直後、何かを言い忘れたのか

先生は一旦こちらを見た。

「一応言うておくが、お前が倒れているのを知らせたのは吉井だからな。

例を言うなり殺すなりしておけ」

そう言うて、先生は保健室を去って行った。

「……………殺していいのか？ 恩人を」

俺はこう呟かざるを得なかった。

俺は先生が去ってしばらくした後、時間を確認した。

現在午前8時半。そろそろいろんな奴が登校してきてもおかしくない時間だ。

俺は手早く近くに置いてあった包帯をさっきまで着けていた包帯と

交換し、

何事もなかったかのように教室へ向かっていった。

途中、家の掃除ができなかったことを心から後悔したが、今日帰ってから

やればいいと自分に言い聞かせた。

まあいまさら言うのもなんだが今俺は制服を着ている。

おそらく先生が予備を用意してくれたんだろう。ありがたいことだ。

俺は教室の目の前に立つと、何やら教室内でがやがやと聞こえてくる。

『さっきから思うんだけどこの血の跡は一体だれのなんだ？まさか天咲の奴勢い余って人殺しちまったとか……』

『あり得ない話でもないけど、もしかしたら天咲の血かもしれないぞ。』

でもそっちのほうがあり得ないか……』

『止めようぜこいつの話。俺たちはとりあえず目先の清涼祭のことだけ考えようぜ』

『それもそうだな』

………血、流れてたんだ。俺入ったらなんか空気が重くなりそう  
な気がするのよ

気のせいだよな？大丈夫：だつたらいいな。

俺は一度深呼吸をして、肩を上げすぎたせいか右肩に鈍い痛みが走った。

バカなのか？俺は。こんなことを考えていると、教室のドアが勝手に開いた。

「ん？鋼侍か。お前教室のあの赤いシミについて知ってるかっておおうっ！？」

俺は教室の床に付着した血を見て、目の前に現れた雄二の顔面を殴ろうとした、

が、雄二はぎりぎりのところで避けてしまった。

殴ろうと思ったのは、このことについてあまり触れられなくなかったからという理由と、

ただ単純に殴りたかったから、という理由だ。

「チツ、外したか……」

「お前、見境なしに人を殴るのは止めておいたほうがいいぞ。

一般人がお前のパンチを受けたら間違いなく殴られた部分が凹むからな」

雄二は少し冷や汗を掻きながら、困った顔をして俺に意見をしてきた。

「お前だから殴りかかったんだけどな。とりあえず朱美は……いつも通りだな」

俺は自分の近くにある朱美の席に目を移すと、そこにはいつも通り……なのかな？

何か微妙に疲れているような気がするけど、まあ目の錯覚だろうな。

そして俺の前の席に座っている明久の席にも目を移す。テストを受けていたせいなのか机（みかん箱）に突っ伏して、よだれを垂らしながら幸せそうに寝ている。

なんとも平和な奴よ。

まあ、あんなんでも俺を保健室まで連れてってくれたんだから感謝しないとな。

「俺だからってお前なあ。まあいい。とりあえずあの赤いシミのこととは置いといて大会のことだけを考えるか。ムツツリーニ、そこの赤いシミをふき取っというてくれ」

「……………承知した」

「任せるのじゃ」

いつのまにか俺達の後ろに立っていたムツツリーニと秀吉が雑巾を持って教室に入って行った。

あれ？血のことは聞かないんだ。まあそっこのほうが俺的には嬉しいからいいんだけど。

そのあとに続いて姫路や島田というメンバーが入ってくる。



「おはようございます、坂本君、天咲君」

「おはよう二人とも……つてあれ？アキは？」

島田はそう言うと明久の席に目を移し、いきなりダッシュして

「ぎゃあああああああああああああああつ！目がっ！  
目がああああああああああああああつ！！  
！！！！！！！！！！」

いきなり眼つぶしをして、明久を起こした。

明久は教室内を転がり回っている。他の奴らは明久が近くに転がってきたら蹴飛ばすといういじめにしか見えないことをやっていた。

「いつまでも寝てるんじゃないわよ全く」

ふんっ、と鼻を鳴らして厨房のほうへ行ってしまった。昨日何かあったっけ？

「うっうっ……前が全く見えないよう。肩も腰も他の所も痛いけど……」

あまりの痛みのせいか、寝ころんだまま膝を抱えてすすり泣いている。

あまりにもむごい仕打ちだったからな。

「うっうん………？何よ一体？」

明久の絶叫によりさつきまで眠っていた朱美が目を覚ました。  
といってもまだ目が虚ろな状態だが。

朱美は首をコキコキと鳴らして周りを見渡す。俺のほうを見ると、

「さつきの騒ぎって兄貴のせい？もうゆっくり寝かせてよ…昨日の  
‘あれ’で疲れてるんだから。まあその分優しくしてくれたからい  
いんだけどさ……」

朱美は少し顔を朱に染めながら、うつむいてそう言った。

あれ？俺何かやったっけな？けどこの場合……

ピキツ、何か教室に亀裂が走ったような音がしたような気がする。  
気のせいであってほしい。

俺は一旦教室を見渡す。教室のありとあらゆるところから恐ろしい  
ぐらいの負の念、  
まあ所謂‘殺気’というものだ。戦場に行ったことは何回もあるが、  
これほどまでの殺気を受けたことがいまままであっただろうか？  
否、無い。

俺は少しでも教室から離れようと、少しずつ後退していく。

しかし、後ろからやってきた須川から腕を拘束される。

「キサマ、俺を敵に回すとはいい度胸じゃないか」

俺もありったけの殺気を須川に向ける。しかし、須川はうるたえる

どころか

拘束する力を強くして、教室の隅のほうへ俺を無理やり連れて行くとする。

俺も必死に拘束から逃れようとするが、一向に外れることはない。右肩に力が入らないのもあるし、何より痛いからでもあるんだが、それでもこいつらよりは力はあるはずなのに、外れない。

「クソツ！どうして外れないんだっ！っておいつ！その鎖はなんだっ！？」

十字架も新品になってるじゃないか！？何で手錠まであるんだ！？もうわけがわかんねえよ！？」

目の前にあつた手錠と鎖はいつの間にか俺に付けられ、それに驚いているうちに十字架に磔にされていた。

須川も死神の服に着替え終わり、クラス全員（主要メンバーを除く）が大きな鎌をもって磔にされた俺の前に立つ。

須川は急に表れた審判台に座り、木づちでダンツと大きな音を立てて、場を鎮める。

「団長、まさかあなたがこのようなことをされるとは思いもよりませんでした。

いつももあなたが俺達を引っ張って行って、俺たちに沢山のことを教えてくれました。

しかし、あなたは俺達を裏切ってしまった。あなたがどんな思いでこのような行動に

出たのかは俺達にはわかりません」

場にしんみりとした空気が流れ始める。え？何この空気？  
完全にすべて俺が悪いみたいになってるんだけどさ。

そこから長々とした話が始まり、涙ぐむ奴らもいた。  
だんだんこの空気を破壊したくなってきたんだが、  
俺にはどうしようもないんだよなこれが。

「 というわけです。さて、昔話が長くなりましたことを心よ  
りお詫び申し上げます。

これより異端審問会を開かせていただきます。罪状…読む必要もな  
い。殺れ<sup>ヤ</sup>」

その言葉を待っていましたと言わんばかりの勢いで、クラスの男子  
が襲いかかってくる。

「おいつ！？敬語がなくなっ たうえに罪状すら読まれないだど！？」

『 『 『 死ねええええええええええええええええええええええええつ！！』

『！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

「このっバカアあああああああああああああああつ！！」

「ぐふつ！おべつ！？いだだだだだだだだだだあああああああ！！！

「！

バキッ、ドゴッ、ボコッ、ゴキゴキゴキっ！ミシミシミシミッ  
キッ！

意識が薄れる中、最後に木下の声がしたのは気のせいだろうか？  
まあ聞き間違いだろう。アイツがFクラスに来る理由なんてないはずだしな。

俺は朱美のほうへ目を向けると、朱美はくすくすと忍ぶように笑っていた。

いつかぜってえ仕返ししてやる。

そんなことを考えながら今日二度目の失神をすることになった。

「ぶざけやがって、俺を何だと思ってやがんだあいつらは」

俺は怒っていた。まあ気絶させられたんだから怒るのは当然だが、何よりも俺を置いていったことに腹を立てていた。

朱美はさっきのことを謝ってきたが、俺は許す気はなかった。

あのクラスだったらああなることはわかっていたはずなのにな。

俺はぶつぶつと呟きながら喫茶店のウェイトレスをやっている。

まあ呟いてるって言ったって、客には聞こえないぐらいの小さな声だけ。

「すみませ〜ん。ウェイトレスさん注文をしたいんですが」

「すみません、ご注文は？」

もちろん現在営業スマイル中だ。あ、いまさらだが明久達は常夏コンビと戦っているはずだ。まだ帰ってきてないから結果はわからないが、さっき秀吉達が様子を見に行ったので

終わったら連絡が来るだろう。

俺は注文を聞き終わると、ムッツリーニにメニューを言ってから一休みする。

「ふう。そろそろ俺達も準備しないとまずいかもな」

近くのテーブルでいつも通り寝ている朱美に向かって一声かける。まあ寝てるから全く意味はないんだけどな。

「……………こっちは任せてくれ。この人数で何とかする」

ムッツリーニの心強いお言葉。親指をビツ、と立てながら健闘を祈ってくれてるようだ。

俺はそのお言葉に甘え、朱美を背負い、教室を後にした。

おまけ6 (後書き)

短いいいいいいいいいいいいいいいいいい！

筆が進まねええええええええええええええええつ！ (泣)

だれかオラに才能を分けてくれええええええええええええええええええええええ！

読者の皆様、お見苦しいところをお見せしてしまい誠に申し訳ございませんでした。

作者の親友です………というより作者は俺のパシリです (笑)

俺達はそろそろ学校のテストが近いので、作者：<sup>バカ</sup>いいやもうバカでw

まあバカはしばらく執筆することはできません。

さきほど俺がバカの鳩尾を殴って、今ベットの上で悶えています。気がしないください (笑)

というわけで今俺がコイツのパソコンを使って勝手に書いていますw  
まあそういうわけなんで更新は不定期になると思いますが、  
とりあえずコイツの書く小説に付き合っただけでお願いします。  
お願いしますね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4815k/>

---

俺（殺人鬼）とバカとテストと召喚獣！

2010年10月13日14時46分発行